
YOU -the song for death-

れいちえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

YOU - the song for death -

【Nコード】

N1573Q

【作者名】

れいちえる

【あらすじ】

……

あの日、僕は死んだと思った。けどこうして生きている。それからだ。

奪われた死の代わりに与えられた一つの仕事。

…… 思いもしなかった。

僕の人生が、まさかこんなにも人の死に満ちてくるなんて……

普通の二ト予備軍大学生の男が一人。イケメンなのに彼女も無くて、どうでもいいか、と思っていた彼に訪れた人生の転機。それは過酷で、まともに受け止めることのできない日々の始まりだった。

穏やかなはずの日常から隠された、誰にでもあるそんな当たり前。一期一会の経験に彼は苦悩し生きていく。

—ご注意—

かなり具体的な暴力表現が一部の章でございます。
それを推奨するものではないこと、それだけをご承知の上でお読みいただきたいと思います。

それではようこそ、一人の青年が生きた非日常の世界へ……

「贖罪」(前書き)

3年前に投稿しました「YOU」の改稿版になります。
加筆修正、挿入話、追加エピソード多数あり！ 以前お読みいただいた方でも十分にお楽しみいただけると思います。

それではどうぞ……

>i21662—2200<
クダリさまからいただきました。「YOU - the song
for death -」のイメージ画です。ありがとうございます
！

「贖罪」

これは、僕が出会った死の話。

やる気や根気、人生のビジョン。

そんなもの必要なのかな。無くったっていいじゃないか。結局いつか、やるんだから。

……

……ずっとそんな風に考えていた。これはきつと、僕への罰。

いつか誰もが経験する、そんな当たり前。だけどそれを、誰もが拒む。

僕はそれを見ていかなくてもいけない。

それがずっと怖かった。

どうして僕がしないといけない。

関わりあいたいはずがない。

……ただど誓った。

僕はもう、見捨てはしない。

白い刃が、紅く染まりきるその日まで。

「僕の仕事」

「またか……」

すでに4人目だ。今日はやけに多い。さっきやってきたばかりだと言っのに。これだから街中つてのは……。

用事があつたからって昼間からこんな人通りの多いところに出ちや、

「自分から仕事を増やしてるようなもんか」

誰に言うでもなくつぶやいた。はやく職を探したいと言っのに、強制労働とも言える義務の方に圧倒的に時間をとられてしまつているのが悔しい。

でも、しかたない。もともと僕が悪いのだから。

ここはあるビルの自動ドアの前。これから中に入ろうと思つていたのに。なかなかすごいタイミングだ。すっかり元通りの長さに戻っている髪をくしゃくしゃと掻き、踵を返して発見した仕事の対象の後ろをつけて行く。

こんなストーカーじみたことをしていたらいつか捕まってしまう。だがこうしないと見失ってしまう。自分の範囲の中で放置しておい

て、万が一前のようなことになったらそっちの方が都合が悪い。手助けもないし、できるだけ自分が危なくないようにしたいなら仕事はすぐその場で片付けた方が良くに決まっている。

「これで暮らしていけるならまだいいんだけど……」

ため息をつきそんな冗談を言ってみるが、そんなことはできない。あくまでこれは元通りになるまでの一時的な契約。それにこれを生計にしたいとは思えない。そもそもこんなことを依頼してくれる「人」なんかいるわけがない。いろいろ頭の痛い問題にぶつぷつ一人で文句を言いながら足音を隠して後をつける。

……それに今度はいつ終わるんだろう。

アレが出てくる事も大分減ってきたようだから、以前よりも効率が悪く落ちている。だけど無いに越したことはないのだから文句を言うてもしょうがない。

今回はビルの屋上か。ここからなら僕が人目につく心配はない。人目についてもわからないだろうけど、怪しまれても困るから安心だ。どうしても距離が離れてしまつから巧くやるにはコツがいる。コイツがまつすぐな形してたらもつとずっと楽なんだけど。とりあえず屋上の階段部屋で座って待機。

……にしても、今日は本当に昼間から目に付くが多い。僕がわか

るだけでもこんなペースで日々起きているというのなら、いつか誰も居なくなってしまうんじゃないかと心配になる。

今回の人は、僕よりは年がいつているがまだ若い男性だ。一体何があつたんだろう。まあ人それぞれに想いがあるわけだし、いずれにせよ今現在「見えない」状態になっている人の運命を曲げることは僕には不可能だ。僕がヘタに手出しするわけにいかない。

僕がやらなくてはいけないのは、この場に縛られ、離れられなくなってしまう前に導くことだけ。それ以上のことは無理だ。

……

耳を澄まして気づく程度の大きさの鈍い音がしたのに続いて、下が騒がしくなった。さて、それじゃあ僕も僕の仕事をし、今度こそ食べていく手立てを探しにいけますか。

「声」

「将来、か……」

僕は今一応大学にも通わせてもらい、現在三年目の秋。就職のこ
となどをマジメに考えなくてはならない時期にたたされている。だ
が、世に言う若者の例にあてはまるように、非常に無気力で何かす
る気もない。いわゆるニートの予備軍だ。

せつかく大学に通っているのだからちゃんとした企業に勤めなさ
い、と両親は説得する。でも、僕には明確なビジョンというものも、
それ以前に自分自身で生きていこう、という気力がない。必要ない。
まだまだ両親だって現役で働けているし、どうして僕だけでやって
いこうとしなくちゃいけないんだ。なんだかすごく面倒くさくてた
まらない。

……わかつてはいる。そんなことを言っていられるのは今のうちに
過ぎないと。実際自分の家だって株だとか、特許だとか、利権だと
か、土地だとか、遺産だとか、何か大きな財産があつてこれからも
それを使つて楽に生活していくことができる、そんな特別な環境に
なんてない。

何か唐突に事故なんかがあつて両親が死んでしまった、なんてそ
んなことがあつたら途端に僕は路頭に迷うことになる。でも、そん
なことは非現実的でとても実感が湧かないし、どうせそんな切羽詰
ることになつたりしたら絶対、自分から何かしらの仕事を探して生
活するようになるに決まっている。

「だったら今はまだ何もしくたつていいじゃないか」

それが僕の行き着いた結論だった。

大学にいつて単位のために授業に出て、その後は早々に就職が決まっている友達や、決まっていけない友達と遊び歩いている。自分は自宅から大学に通っているから小遣い制で、足りない分の遊ぶお金は自分でバイトして稼いだこともあった。

……でも長続きしない。

始めてもすぐに居心地の悪さを感じてしまい、息が詰まる。二カ月働けばいい方だ。初めの給料をもらうまではやってはみるが、結局止めてしまう。早ければ本当にすぐに行かなくなってしまう、バイト先の方からもう来なくてもいい、と解雇通告されたことだつてある。だったらなんでバイトなんかしようとしたんだろう。就職して、もしその職場での居心地の悪さをすぐに感じてしまったら同じことになるに違いない。しかもバイトとは違って毎日毎日八時間、加えて残業などなどでそれ以上の長時間の拘束を受ける。たまったものではない。そう考えるとなおのこと就職という言葉が僕の頭から足早に遠のいていく。

自分に困ったことが起こったら、そのときに考えればいい。

今の状態が一番心地いい。学校の友達、自分を保障してくれている家族に包まれて、なあなあで生きていけるのが最高だ。

「気持ちはわかるけどよ、お前もホントに考えたほうがいいって。実際にやる前に考えてないと余計辛いぜ、裕也？」

友達にまで説教される始末だが、できないものはできない。

今日も授業を受けたあとゼミに行つて、勉強しているようなして
いないような、むしろ友人らが彼らのゼミ活動を終えてやってくる
のを待つだけの時間を過ごし、その後みんなで適当に町をうろつい
て、中途半端にファーストフードを口にし、一人二人と友達が帰っ
ていくのにあわせて自分も家に戻り、用意されていた夕食の中から
ちよつとだけ食べたいものを食べて部屋に入り、深夜までインター
ネットのゲームをやつて、その後いろんなサイトを見て回り、くだ
らない罵詈雑言や聞くに堪えない自己主張を目にしていた。

「どうせお前らだつて僕と同じ分類の存在のくせに」

だけど僕のほうがよっぽど高尚だ。そんなことにこだわるものが
くだらないと気づいているんだから。人を見下す発言をして自分の
存在がより価値のあるものだと考え、実際自分に価値がないことを
忘れようと努力しているんだろう？

僕はそんなことをしない。そんなことをすること自体に価値がな
い。世の中の人には本当に価値のないことに腐心している者もいる
んだな。

…… ナニモ チガワナイダロウ……

はつとして周りを見渡した。自室だし、扉も開いていない。気配
も感じない。僕一人だ。絶対に僕一人しかない。居るわけない。

パソコンだってミュートにしてある。しかし確かに聞こえた。身体に、特に頭の中に深く響き渡るような声。気味が悪くなってすぐさまパソコンを切り、寝ることにした。

……

ホントウニ クルシイノハ オマエジシンナノダロウ……？

ジブントイウモノヲ シリタクナイノダロウ……？

ダカラ タシャヲサゲスミ ワスレタフリヲスル……

時間を置いてはさつき聞こえた声が響き渡る。眠りに落ちようとする瞬間、瞬間に。

怖い。一体なんだ、何なんだ。必死に耳を押さえて丸くなり、その声が聞こえなくなるように祈った。しかしその祈りは通じることではなく、時々、ようやく忘れられそうになったところに声が響く。僕を追い詰める言葉ばかりだ。

「くそっ！ だったら何だっていうんだ！」

いい加減に頭にきた。どこの誰だか知らないが、こんな悪趣味なことをしやがって。ベッドから起き上がり、天井に向かって声を荒げた。

カワルコトニ キョウフシテイルノダロウ……？

「だから、お前は一体誰だ！どこから話してるんだ！僕にどうして欲しいんだ！」

僕がそう怒鳴った時だ。部屋をノックする音が聞こえ、母が心配そうに部屋を覗き込んだ。

「裕ちゃん……どうしたの？」

「あ、いや……何でも、なんでもないよ。ごめんね、お母さん。夜中に大声出して」

ベッドに立ち上がったまま母に気まずく返答した。心配そうな顔はそのままだったが、冷静に返答した僕の言葉を信じてとりあえず扉を閉め、僕の部屋を後にした。

目撃した人物が母でなかったら間違いなく頭がかわいそうな人にも思われただろう。

だが幻聴などではない。一体なんだったというんだ、あの声……。

それから先は聞こえることなく、やっと眠ることができた。

そんなことがあったことを忘れ、しばらく通常の生活を送っていた。それまでと何も変わらず将来に対しては無気力でその場限りのよく言う「今が良ければそれでいい」という生活。

今日の分の大学の授業も終わり、自分の将来をちゃんと決めていく友人たちと電車に乗っていた。いつもとは趣向を変えて街で飲もう。もう日も沈み、流れていく風景が夕闇に飲まれていった時だった。

コワイノダロウ……？

突然聞こえてきたあの声。聞こえているのは僕だけだった。友人たちは全然何とも無いようで、お互いどうでもいいような馬鹿げた話で盛り上がっていた。僕だけは動揺を隠せず、あたりを見渡してしまっていた。

「おい裕也、どうしたってんだよ。彼女でもいたか？　って、いるわけねえか！」

はっとしてなんでもないと答える。友人たちは深くは詮索しなかったが、明らかに挙動不審となった僕を見て心配していた。

……

何だ……？

電車の窓からふつと外を見たとき、鏡のようになった窓に映った僕の姿に覚えた違和感。だが何がいつもと違うのか、よくわからなかった。

電車で得体の知れない恐怖を感じた僕は、いつも以上にしかも無理していつもの酒量を過ごしても飲み続けた。大分酔いが回って吐き気のする一歩手前くらいまで行っていた。トイレに立ち、ちよつとふらつきながらも自分一人で用を足して手を洗っていた時だ。鏡

に自分の姿が映っていた。ぼんやりと歪んで見える。きつと酔っているから焦点が定まっていなかったらう。蛇口を閉めた時だった。

オシエテヤロウカ……？

身動きが取れない。完全に固まる全身。息をするのが精一杯だ。あんなにひどかった酔いが一気に覚めていく。

突然何かが、下を見たまま動かない僕の肩を叩く。びっくりした拍子に金縛りが解け、青い顔のまま振り向いた。

「おい裕也！ 裕也！ 大丈夫か、本当に……」

「なんだ、高志か…… おどかすなよ」

「驚いたのはこっちだぜ？ 一体何分経ってると思うよ？ もう10分だぞ。そりゃ心配して見に来るっつーの。見にきたら洗面台で固まってるしよ。…… 本当に大丈夫か？」

「ああ、大丈夫。 って10分？ まだ2、3分じゃないのか？ 僕が立ってから」

「何言ってるんだ。2、3分で様子見に来るかよ、それも男のよ！」

「それもそっか。悪い悪い。でもさ、ホント何でもないから」

そう言って顔を上げ、ちらつと鏡を見た。

……やはり少し自分の姿がぼやけている。だが友人の姿はまったく

ぼやけていない。

何だ、これ……。

得体の知れない気味の悪さに、背筋に冷たいものが走る。何の悪い冗談だ。

戻ってみると、一斉に僕の長い離席を冷やかす。適当にあしらいつつ自分の席に戻って、何事もなかったようにまた馬鹿げた話の中に入ってしまった。とりとめもない愚痴や先生たちへの文句、不満を笑い話にしながら盛り上がっていた。酔いも覚めてしまったから、またいくらかアルコールを取る。

……盛り上がっていないと、じわじわと押し寄せる恐怖に押しつぶされてしまう、そんな気がしていた。

「男」

帰りの電車。電車の窓に映る姿は、誰一人としてぼやけているものはいなかった。それは僕も同じで、今ははっきりと映っている。さっきトイレの鏡に映っていた僕の姿はやはり気のせいだったのだろうか。

次々に友人たちは自分の実家、アパートの近い駅で降りていき、最後僕一人だけとなった。ドアにもたれかかって、住宅街の明かりを見ていた。

シリタイノダロウ……？

……まだ。息がうまく出来ない。飲んでいるうちに一度目の酔いも戻ってきて、さらに加わった酔いのせいもあって立っていられなくなる。空いていた席に座った。

何を知らせようというのだろう。まだ乗客がたくさんいる車内で

自分にしか聞こえない声に返事するのは狂気じみている。しかし大分耐えかねていた僕は聞くしかなかった。

「何を…… 僕に……？」

オマエニ アンネイヲ…… モウスコシ…… モウスコシマテ……

……

顔を上げ正面を見ると、窓に自分の姿が映っていた。

…… ぼやけてはいない。ほっとした。

だが、それは束の間。窓から目を離せなかった。

身体が透き通っている。座っている席の背もたれと一緒に映っている。

……こんなバカなことがあるわけがない。まだ酔っているとは言え、そこまでの見間違いはしない。何だというんだ。夢？

自分の降りるべき駅名がアナウンスされ、はっと正気を取り戻した僕は乗車口の前に移動した。その窓に映る僕の姿ははつきりとしている。やはりさっきはまだ酔っていたんだろうな、と押し寄せる不安に蓋をした。

駅から自宅までは歩いて20分くらいだ。特に遠すぎることもないから、悪酔い覚ましに歩いて帰ろう。かなり歩様も安定し、まっすぐ歩くこともできるようになっていた。とことこ歩いて、駅から自宅までの半分くらいの位置にある公園まで来た。この時間、このあたりは人通りも無く本当に静かでちょっと怖いくらいだ。

……

そんな公園の、暗い街灯の下を通過した時だった。

「教えてやろう……」

背後から響く声。

……ありえない。それまで僕の前を歩いていた人も、後ろについてきていた人も、ましてや街灯の陰に隠れていた人も、絶対にいない。いない。いない。

足が前に出ない。

「教えてやろう、お前の感じている不安、恐怖の一切を取り除く方

法をな……」

背筋が凍りつく。振り向くことさえ出来ない。生唾を飲み込むので精一杯だった。

「知りたいのだろう？ 俺の声も聞こえていただろう？ 全部教えてやろう……。こっちを向くんだ、さあ」

振り向かず声を上げて走って逃げ出したい気分ではいい。だが、蛇に睨まれた蛙とでも言うのか、足がすくんでしまつて身じろぎ一つできない。酔いも再び一気に覚めていく。

コツ、コツ、と歩み寄る音が聞こえ、後ろのモノが少しずつ僕に迫ってくる。

「どうした、動けないのか？ ならば目の前にいつてやるから待っている……。なに、今すぐ何かあるわけじゃない、心配するな……」

優しく僕に語りかける。男の声だ。

……なぜだろう、覚えがある声。知らない声ではない。だが、誰の声か思い出せない。

懸命に思考を巡らせている僕の横を男が通過し、正面に立つ。背丈は僕と同じ、髪の毛の色は黒く、短くもなく長くもない。着ている物が妙だった。漆黒で裾が擦り切れたようなロングコート……。まだ時期としては早すぎる。その男がゆっくりと振り返り、僕と向き合った。

「な……」

「どうした、驚くことではないだろう……。知っているだろう、俺のことを……」

「う、嘘だ、そんな…… あるわけが……」

「だが目の前にいるのだ、現実としてな……。触れてやろうか？」

ほら、お前の頬に触れた俺の手の感触、これでも違うと言うのか？」

「何なんだ、お前…… 一体これは……」

「だから、もう理解しているだろう……。？ 髪の色が違おうと、話し方が違おうと……」

そう、僕は目の前の男を知っている。何度だって見ている。

「俺は…… お前だ」

僕の目の前にいるその男は、どこから見ても僕だった。声の主を思い出せるはずがない。自分自身なのだから。もう一人の僕が不気味に笑いながらさらに一步、僕に近づく。

「さあ、お前が知りたかったことを教えてやろう。怖がることはない。もうすぐ、その時なのだから……」

そつと耳打ちするように僕に語りかけた時だった。やつのことと言つことを聞かない体を動かし、黒ずくめの僕を振り払って走り出した。もう無我夢中だった。この恐怖に耐え切れない。

「逃げる？ 何から逃げるのだ？ 恐怖か？ その恐怖を生んでいるのは自分自身だというのに……。俺が教えてやろうというのに、救われる方法を……」

離れているはずなのに一向に小さくならない声。怒声でなく、落ち着いて僕を説得するかのような口調だというのに。一体どうなっているんだ。何がなんだか分からず必死で走った。

そうだ、トッペルゲンガー。居るはずのない、居てはいけないもう一人の自分。それに出会った人は必ず命を落とすと本やネットで見たことがある。逃げないと。何としてもアレから逃げなくてはいいけない。でなければ絶対、

どがん

鈍い音と衝撃が全身に走り、壁と地面に叩きつけられた。うつ伏せのままの僕は、走り去る車のテールランプを横目で見送るしかなかった。

「か…… そ ん な…… い や だ……」

頭が痛い。口から血が流れ出ている。内臓を相当痛めたのか。

……

……実感でわかる。死ぬんだ。

「……こんな最期か。より哀れだな。俺が救ってやれなくて残念だ……」

いつの間に追いついたんだ。黒い髪 of 僕が覗き込んでいる。

「そう、死だ。死ねばいい。今の自分のまま、変わることはないように……。お前というものを保つために……。お前もそうしたかったのだろう？ 本当ならば俺が導いてやる方が苦しむことが無かったのだが……。運が無かったということか。なあ、裕也……」

黒髪の僕が僕に背を向けた。役目を果たすことが無くなったから、このまま立ち去るのか？ 必死で彼のコートの裾を掴んだ。

「いやだ…… いやだ…… 助け……」

「……自由になりたかったのだろう。もう苦しまなくて良いのだ、安心しろ」

「だからって…… いやだ……！ 死にたくない…… 死にたくない！」

「喋るな、苦しくなるだけだ」

「お願い…… 助け……」

息も絶え絶えにすがりつく僕の力のない手を振り払い、僕の方に
向き直って、腰を下ろすこともなく立ったまま見下ろしながら語り
かけてきた。

声だけは、異常にやさしく穏やかに。

「なあ、裕也……。どうして俺が出てきたかわかるか……？」

お前を死なせるためだ。苦しまないように自身を殺すためだ。

お前はこれから先、生きて苦しむことを知っていた。それを恐れ、
歩むことが出来なくなったお前がいた。今までのように自分に意志
がなく、生きているのか死んでいるのかわからないまま存在するこ
としかできない。

本当は不安だっただろう？

……不憫だ。お前がこのようにして死ぬことは分かっていた。死の
運命からは避けられぬ。ならばせめて、苦しむことなく楽にしてや
りたい。そう思ったからこそ何度もお前に語りかけたのだ……。そ
してお前は求めた。これからは俺がお前として生きよう」

「……死にた かったわけ じゃ…… な……」

意識が今にも飛びそうだ。マジでやばい。まだ何か言っているよ
うだが、もう一人の僕の声ももう聞こえない。まぶたも閉じていく。

「まだ…… 死にたく……」

……

再び身体に響く衝撃。もう全身感覚が無くて、痛いのかどうなのかわからない。だらんとしたままの身体を引き起こされたような気がした。うつすら目を開けると、目の高さよりも下にもう一人の僕の顔があつた。目線をさらに下にとすると、何か大きな刃のようなものが僕の胸の真ん中から生えている。足も地面についていないようだ。

もう一人の僕は腕組みをして僕の様子を見ていた。意識もあいまいでぼーっとしているから、自分がどんな状態であるかがわからない。頭の中に僕の声が響く。

「引き抜けぬというのか……？ これは…… だがこのままでは……
…… いいだろう、来い」

その声を聞いた途端、僕の意識は途切れた。

「扉」

…

…

ぼんやりと意識が戻った。

ここはどこだろう。視界もぼやけてよくわからない。何度も瞬きをして目を慣らししていくと、だんだんはつきりと見えるようになってきた。一人女の人が僕が寝ているすぐ近くで何かをしている。髪の色も違うし、母さんではない。着ている服は……薄いピンク？室内なのに服と同色の帽子を被っている。

自分の置かれている状況がわからないとやっぱり不安だ。力ない身体を何とか起こそうとすると全身に激痛が走る。動くことすらままならない。思わず苦痛の声がもれた。

僕が意識を取り戻したことに気付いて、女性が僕の名前を呼ぶ。はい、とはつきり答えることもできず、かすれた声が喉から漏れる。だがそれで十分だったようで、「先生を呼んできますね」、とだけ言って急ぎ足で出て行った。

辛うじて動かせる目と首を必死で動かして身の回りを確認する。僕が寝ているベッドには柵がつけられていた。僕の体の上にはきれいな白いシーツがかけられ、そこから出された僕の腕には透明なチューブがつながっている。その先には金属のフックが付いた棒に掛けられた液体の入った柔らかい袋がある。穏やかなペースでポタポ

タと滴^{しずく}が落ちていく。そしてさつき出て行った女性の姿……。こ
こは病院、のようだ。

さっきの女性はやはり看護婦さんで、彼女に呼ばれてきた医師が
僕の意識がちゃんとあることを確認して、僕に状況を説明してくれ
た。

車にはねられ意識不明の重体になった僕は、僕がはねられたその
音に気づいた住民が救急車を呼んでくれたことで病院に搬送され、
いろいろな治療を受け、なんとか回復したのだという。救急車の中
にいた時、呼吸が止まりかけたり心拍も微弱だったり、状態とし
て一番危なかったらしい。

病院についてからも油断できず、頭蓋骨は骨折していなかったも
のの脳出血があつて、その血を抜く緊急手術をしたそうだ。肋骨も
折れていた。今も息をすると響くような痛みがある。息をするのも
ちょっと我慢したくなる。内臓もやはりひどく痛めていて、手術に
よって破裂していた部分を縫合したとのことだった。

あの時感じたとおり、本当に死と隣り合わせの状態だ。

左足も骨折していたが運良く程度が軽く、ギプス程度で十分治療
できそうだと言ったことだった。

……これだけのことがあつて運の良かったのが足の骨折って……
直接じゃないけど、死んでいない方が不思議って言われているよ
うなものだ。改めてぞつとする。

しばらく時間が経って、バタバタとあわてて病室に駆け込んでき
た人がある。母だ。わんわん泣いている。

「じめんなさい」

声に出さなかったが、母の泣きすぎる姿を見て自然に胸の中に湧く。こうなったのは僕自身のせいではないのに。母の話によると五日間も僕は意識不明だったそうだ。痛々しい僕の姿を見て、途中何度もうダメかもしれないと思ったことか、と涙を拭い、青い目を細めながら言われた。夕方を過ぎ、日も落ちたころ父が見舞いに来た。父も本当に安心した、というような表情を浮かべていた。

ああ、やっぱり死なくて良かった。

これからは心を入れ替えてがんばって生きることになろう。

約一ヶ月入院し、無事に退院した。久しぶりに行った大学。何にも変わらない。僕がいようといなかつと何も変わらない。そんなもんだろ。変わったことと言えば僕の状態くらいだ。ギプスはまだ外せないで着けたまま、松葉杖の生活。それと、

「おお？！ 何だよ裕也！ ファッションのつもりか？ 似合わねえな、はははは！」

失礼な。似合う似合わないじゃない。こうしておかないとヘンなのだ。

頭の包帯は取られた。だけど手術の傷だけでなく、無念な事実がそこには隠されていた。気に入っていた髪が手術のために剃られて

すべて無くなってしまったのだ。ちよつとは伸びているのだがまばらだし、何か寒いし、違和感がありまくりなので髪が生えそろつまで帽子を被ることにした。父も母もそれを勧めた。言われるまでもない。

だけど、授業中にも被っていたら一人の先生に注意された。しかたないので取ったら、その先生も何だか悪いことをした、そんな顔をした。それ以来、被っていても特に注意されることはなかった。

時々病院に通い検査をしてもらいながら、いつもの暮らしを続けていった。事故後の後遺症もなく順調に回復しているようだった。以前よりもずっと前向きになったためか、骨折の回復も良好で結構早くギプスも外すことができるようになった。ずっと動かすことの出来なかった左足はすっかり固まってしまっていて、思うように動かすことが出来るようになるまで時間がかかりそうだった。もうしばらく松葉杖に頼ろう。

そうだ、変わったのはそれだけではない。今までためらっていた「働く」ということ。せっかく拾った命なんだから少しは今までと違った考え方もしてみよう。

……まだ思うようにならない、こんな姿だが。だが少しは良くなってきたいるそうだが、ニュースでもよく言っているようにまだまだ世知辛い世の中で、今までダラダラ暮らして、資格も何も無い僕がそうそう簡単に採用されるはずも無い。採用通知は一社としてこない。まあまだ卒業するまで先が長いし、いつかヒットするまでめげずに続けていけば良いだろう。

そのうち髪も生えそろう、以前よりもまだまだ短いがみつともないというほどでもない。帽子付きの生活からおさらばだ。

……

……少しだけ気にかかることがあった。僕はどちらかというと日本人寄りの見た目ではあるが、髪は母譲りで少しだけ金色が入っている。その髪色を僕は気に入っていた。しかし剃られてから少しずつ伸びてきたそれは、自分の知っている色をしてはいなかった。

黒い。

鏡に映る僕の姿は、あの夜遭遇したもう一人の僕そのものだった。あの夜の出来事は悪い酔い方をしたせいで見た夢、幻覚に違いがないと信じていた。実際あれ以来もう一人の僕姿も声も、一切見聞きしていない。だが、鏡に映る僕をみると、とても夢とは思えないリアルさを感じざるを得なかった。

だが、胸には傷がない。

入院中に病室着を脱いで自分の体を見た時、腹にはいくつもの手術痕があったが、胸には痣はあれども縫ったような形跡は無かった。

先生に尋ねたが刺し傷はどこにも無かったと言われた。

……やはりアレは夢だったのだろうか。

冬のある日。

その日はまた就職活動のために会社訪問をして帰る途中だった。もう左足も十分に動かせる。ちよつと遅くなつて電車に乗ったのはすっかり日も暮れたころだった。その時僕は乗車口のあたりに立っていた。

当たり前だが、電車の窓には僕以外にもたくさんの乗客の姿が映っていた。ちよつと後ろを見て、また目線を窓に戻すと、違和感があった。違和感はあるが、それが何かすぐには理解できなかった。

「やだな、まるであの日みたいじゃないか……」

そんな不安が思わず口に出る。また後ろを見て、また窓を見た。

……気がついた。

足りないんだ。窓に映っている人間の数が……

鏡に映っていない人は、見た目は丈夫そうでもまだ働き盛りの、ちよつと頭の薄くなつた会社員風の男性だった。呼吸することも忘れるような、えもいわれぬ恐怖。しかし止せばいいのに変に好奇心が湧いてしまい、その男性が降りた駅で僕も降り、こつそりと彼の後を後をつけてしまった。

彼は特に変哲もなく、大勢の群集とともに駅を後にした。そんなに遠くないのか徒歩で帰路につく。だんだん人通りも少なくなり、街灯だけが頼りの暗くて寂しい路地になっていった。場所が違いこそすれ、あの日のままだ。

ところが何か起こることもなく、そのまま僕はその男性が住んでいると思われる一戸建てまでついて行けてしまった。家族は出かけているのか、電気もついていない。その家に男性が入っていた。男性が入っていつてはじめて電気がついた。

……

あの男性の姿が窓に映っていなかったのは見間違いなどではない。しかし僕が感じた恐怖も好奇心も気のせいだった、と半分がっかりしながらその場を後にしようとした、その時だった。

「な、なつこ?! 一体どうし うっ!」

入っていった男性のものと思われる声と、何かをひっくり返した音が聞こえた。なんだ、やっぱり家の中に家族が居たんだ、と初めは平然としていた。だがよくよく考えてみる。男性のあわてたような声の様子と、それに続いた音。

そして、「一体どうした」という言葉。

……ただ事ではない。思わずその一戸建ての庭に入り、外から今さつき電気がついた部屋を覗くと、女性が赤黒い液体の中に突っ伏しているのと、入っていった男性がシャツの背中に赤い跡をつけ、テーブルをひっくり返して倒れているのが見えた。玄関に走る。鍵はかかっていない。大慌てで中に入って行って男性を担ぎ起こした。その時遠くの部屋から誰かが外に出て行った音がした。きっとこんなことをした犯人だろう。僕が入ってきたことで慌てる感じがなかった。追いかけようと思えば追いかけれそうだった。

だけど、追いかける余裕などなかった。傷口を押さえるが血はまったく止まらず、シャツの赤い染みはどんどん広がっていく。近くにあったタオルも使っていたがそんなものでは治まらず、僕の手もまわりつく粘度の高い液体で染まっていく。呼吸も非常に浅くて荒い。目が虚ろになっていく。何か言おうとしているが何も聞き取れないし、何と言っているのか理解することもできなかった。

僕ではどうすることも出来ず、その男性は間もなく息を引き取った。男性の妻と思われる、倒れていた女性の手首を取り、脈をみたがやはり止まっていた。

為す術なく、僕はただ警察と救急車を呼ぶことしか出来なかった。受話器を置いて、本当なら見るのもいやなのに、二人が倒れている赤黒い部屋に戻る。

……

そこから先の自分の行動、僕は意識的には行っていない。初めからこうするのが当然と知っていたかのような行動だった。

身体の正面で軽く掴むように握った右手に左手を添えると、何か棒のようなものが現れた。それをそのまま右手で握り、左手から引き抜くかのように両腕を広げていく。するとそこには何もなかったはずなのに、柄が金色で長く、巨大な白い刃を持った大鎌が現れた。

手品のように、何か悪い夢でも見ているかのように。

重さを感じない。本当にそこにあるのか実感が湧かない。だが確かに目に映っている。

僕はそれを手にし、くるくると頭の上で鎌を回転させ、握りなおした。

「やめろ！」

自分の行いに対して叫ぶ。だが僕はそのまま男性に振り下ろした。大鎌は男性を貫き、深々と床にまで突き刺さった。……様に見えた。僕は呆然としていた。しばらく突き刺したままにし十分時間が経った後で鎌を引き抜くと、その刃は金色になっていた。再び鎌を回転させると再び刃が白くなった。あつけにとられたまま、次は彼の妻に振り下ろした。引き抜くと鎌の刃はさつきと同じく、だがさつきよりもより濃い金色になっていた。

そして頭の上でまた金色の刃をくるくると回す。勢いよく僕の正面で柄尻を床に突き立て手を放すと、鎌が勝手に浮き上がり、軸回

転し始めた。切っ先が僕から離れるように正面を向いた。そのまま僕は身体の正面でパンと音を立てて両手を合わせ、その後何もないところをこじ開けるように両腕を開いた。すると目の前にうっすらと何かが現れ、だんだんとその姿を濃くしていった。

それは巨大な扉だった。荘厳な、見る者を圧倒する扉だった。

扉が完全に現れると宙に浮いた鎌が勢いよく倒れこみ、扉を切り開いた。切り開いた鎌の刃から光が溢れ、その光の粒はすべてその扉の中に吸い込まれていく。粒のすべてが中に入っていくと、再び白い刃となった大鎌はまたしても勝手に起き上がった。鎌が起き上がるとともに重そうな扉は閉じ、再びうっすらとなり姿を消した。僕は再び鎌を手に取り、取り出したときとは逆の手順でそれを消した。

すべてを見終わったあとも、僕はただ茫然としているだけだった。

二人の身体に深々と巨大な凶器を突き刺したはずなのに、鎌による外傷は残っていなかった。

「予見」

二人の遺体は病院に搬送、そして第一発見者たる僕は参考人として警察に連行。

本来降りる駅でない駅で下車し興味本位で男性の後をつけ、こともあるうか奥さんがすでに殺害されていて、男性がまさに殺害された現場に居合わせた。これではどうぞ僕を疑ってください、と言っているようなものだ。

かなり強い口調で僕を問い詰めるので、精神的に参ってしまう。しかし当然ながら凶器もなにも僕の所持品から現れることもなく、証拠不十分ということで程なくして解放された。父が警察署まで迎えに来ていた。大変だったな、と僕に声をかけ、それからは無言だった。

確かに本来降りる必要もない駅で下車するという不審な行動をしたには違いないが、現場の第一発見者となってしまった息子が受けたショックは想像以上のものはず。ならばそれ以上この話題に触れないようにしようという優しさだったのだろう。

……

……辛かった。自分の身に起きたこともそうだが、何よりそんなことについてではない。

僕が連れて行かれる少し前に、まだ中学生くらいの娘さんが家に戻ってきた。

誰もが異常とわかる雰囲気包まれてしまった日常と、想像したこともない事情。

それを知った時の混乱と呆然に満たされきった姿を、僕は忘れない。

…

…

自室に帰ってきた。もう日も変わっている。

怖かった。今になって恐怖が襲ってくる。現場に居合わせたこともそうだが、何より自分が人の死を予見できるようになっていることに。

まだ確証を得たわけではない。だがおそらくそうだ。

鏡に映らない人、それは死期が近い者。

以前自分もそうだった。だが僕はまだ消えてはいなかった。ぼや

けていたり、透けていたりした。だが生きたいと強く、強く願^{あらが}い抗ったおかげか、瀕死にはなったが一命を取り留めた。昨日の彼が生きたいと願わなかったはずがない。

あの時間き取れなかった言葉。それは絶対、生への未練、死への呪い。

きつと僕の目に完全に映らなくなるまでに至った人は、死を避けられないのだろう。

……おそろしい。どうして、いつからこんなことがわかるようになったのだろう。友達、いや家族にだってこんなことを相談なんかできやしない。それにもしも、友達や家族に鏡に映らない人が現れた時、一体どうしたら……。

とても頭が痛くなる問題だったが、簡単に答えが出るはずもない。いつしか僕は眠ってしまった。

次の日、今日は大学の授業も就活もないので朝起きてから一日中部屋に閉じこもっていた。普段部屋にいるときは大抵パソコンを動かし、またパソコンの前に座っているのだが、今日はずっとベッドの上に座っていた。ご飯は要るか、と母に聞かれたが要らない、と答えた。食べる気になれない。

……ずっと考えていた。だけど一度寝て覚めると、あんなに常軌を逸した出来事も嘘のように思えてくる。本当にあったことなのだろうか。

その時なんとなく自分の部屋の本棚にある漫画やイラストの載っ

た本に目が行った。そして思い出した。昨日僕がどこからともなく取り出した大鎌、当然のように行った行動。どう考えても常識を超越している。だが一つ、一つ心当たりがある話がある。

……

死神……

大きな鎌を持ち、人の命を刈り取る悪魔。そんなものいるはずがない。そもそも死神だなんて、理由なく命が失われた時にそれを無理に理解しようとするために用いられている抽象的な概念に過ぎない。

……そのはずだ。

だが、それも今の僕を十分に納得させていない。実際自分が目にしている。いまだに信じられないがああの時の僕は、死神そのものだった。自然と頭を抱えてしまっていた。

「そんな…… そんなわけない……。イメージさ、創造の産物だよ。僕の白昼夢に決まってる……。気が動転しすぎてたんだ。そうさ、そんなはずない！」

……ナゼ ゴマカソウトスル……？

あの声が響く。僕の奥底から響いてくるような声。……もう一人の僕の声。

「……ワスレタノカ？ オマエハ オレナノダ。シニガミの俺が
才前のイチ部だつタヨウに、お前は俺の代わりに俺の力が使えるよ
うになった。お前には死者がわかり、お前はその魂を導いた……
それだけのこと」

「なんでそんなことに……」

響くような声のはつきりとしたものに変わった。それに気づいた
僕は顔を上げ、そして息を呑んだ。目の前には黒いロングコートを
着た、少しだけ金色の入っている髪をした、以前の僕の姿があつた。
しかしあの夜見たときのようににはつきりとはなく、うつすらと透
けて見える。

「なんでアンタが……」

「この姿か？ ……お前が死ななかったからだ。なんだ？ 契約を
忘れているのか……？」

……まあいい。だがお前はこれから死者を見つけるたびにその魂を
導かねばならない。たとえいかなる障害があろうともだ。それが死
神となった者の使命……。いずれ思い出す。なぜ、そしていつまで
人の身でありながら魂を導き続けねばならないのかを。

それまで救い続ける。俺をもな……」

そう言い残し、たしかに死神と名乗った以前の僕は消えていった。

……

にわかに信じられなかったが、いやでも信じるしかなかった。突
然黒髪になった自分。そして以前の僕の髪色になったもう一人の自
分。もしこれが、生きたいと願ったがもはや死ぬしかない元の肉体

を生かすために、死神の僕と身体を交換したための現象だとしたら……。

……おそらく仮定の話ではない。ほぼ確実だ。

僕の容態は医師もはっきり言ったように、とても危ないものだったのだ。僕もその話を聞いて思う。

……よく生きていたな、と。

そんな僕に生きるチャンスを与えるために、瀕死の身体と交換してくれたのだろう。ならば……

……死神をやらなくてはいけない。言われたように。昨日したように魂を導いてやらなくてはいけない。いくら僕だって恩と言うものを知っている。

ちょっと待てよ。昨日僕がやった時、扉が開いたよな。それは俗に言う霊界、天国といったものへの入り口なのか？ それにそこに吸い込まれていった光の粒達……じゃあ、あれが魂だっていうのか？

今まで信じていなかったものがどんどん現実に現れてくる。現実が現実離れしてきた。

何がなんだかわけがわからず、今まで信じていたものが信じられないものになっていくような気がする。

……とりあえずお腹が空いた。自分が感じたことは、信じないことにはどうしようもない。

父は帰ってきていなかった。母と一緒に食卓につく。母だつて気になつてゐるはずなのに、事件のことは一切聞かなかった。その代わり、昨日母がいろいろ感じたことを延々と話している。にこやかに、時に腹を立てたり。

……

まるで僕を励ますように。

……事故に遭うまではこんな風に食事すること、少なかったよな。勝手な時間に帰ってきて、母が作っておいてくれたご飯を温めなおしてもらつて。休みの日なんて、作ってもらつても自分が食べたい時間じゃなかったら食べたくなくなるまで部屋を出ることすらしなかった。

……それが当たり前だと思つていた。

間違つていた。

母の話を聞いて、母とともに笑い、母をなだめ、ゆっくり一緒にご飯を食べた。

「使い方」

夕食を食べた後また自分の部屋に戻り、さっきのことについていろいろ考えていた。安請け合いではなく、ある程度は深く考え結論をつけた。本心をいえば理由をはっきり聞いたわけではないから断ってしまいたいくらいだ。だが、彼の言う「契約」と、「俺をも救え」という言葉。重要な何かがあるような気がしてならない。

……例えば契約を破ると再び命を落とすことになるだとか、僕がやらないままでしたら死神の僕が消えてしまい、彼の役目をこれから永遠に行っていくなくてはいけないだとか？

そんなことになってはたまらない。僕だってこれから普通の生活を自分の手で行っていかうと思っっているのだ。……まあある程度欲はあるけれど。

はやく彼との契約を果たしてしまうべく、自分の責務となったことをしよう。

……

とはいったものの考えるほどに問題点が浮上する。

見つけ方は鏡に映っているかどうか、でよいのだろうか鏡を持ち歩いてそれを見ながら人ごみの中を歩くわけにもいかない。それに上手い方法を見つけたとしても、その人がその時を迎えるまでつききりでないといけないのだろうか。

「あり得ないだろ、それ……」

思わずため息混じりにつぶやいた。何だかやる前からうんざりしてしまう。

それに世の中には死に逝く人なんていっぱい、いっぱいいる。当然僕が遭遇しない人も数多くある。そういう人たちはどうなんだろう。そこまでカバーして回れるはずがない。今はまだ辛うじてかまわないが、僕自身の生活は……？

聞きたいことはたんまりとある。

「……。うーん……」

どれだけ強く念じても応答がない。こっちからアプローチできないのだろうか。

「一方的……か。こっちの都合は関係なさそうに出てくるっつーのに」

なんだかずるい。せめてどうしたらいいか、くらいのアドバイスをして消えてくれたら助かったのだが。なんだか頭がもやもやしてきたので気晴らしに外を歩いてくることにした。

外に出てみてふと気がついた。今でこそ人通りはないが、日中人通りがあるときに発見して、しかも目の前で僕のように事故にあっってしまった場合、どうすればいいんだ？ 僕があの時みたいに大鎌

を取り出したら大騒ぎになってしまはずだ。課題が山積みで困ってしまう。いろいろと検討していかないと……

気晴らしに出たはずなのにまったく逆になってしまった。まったく、めんどろなことになるってしまったよ。

次の日、授業が午前中に一つだけあったので大学にいった。電車に乗らなくてはいけない。日中だったので窓が鏡のようになっていなかったのが幸いだ。人がたくさん乗るのだから必然的に見つめてしまう可能性が高い。見つけたら行かなくてはならないのだ。ひとり人知れず祈る。

無事に遭遇することなく大学に到着。ここなら昨日思いついた実験をしても上手くごまかせるはずだ。

「こう手をあわせて……」

階段下の物陰に隠れ、一昨日したように手から大鎌を取り出す。昨日も自分の部屋で一度やってみた。今回も上手く取り出すことが出来た。僕に取り出そうとする意思さえあれば、TPO関係なく取り出せるようだ。

……それにしても見れば見るほどに大きくて危ない。こんなに巨大な刃が付いているというのに重さがないのが不思議でたまらない。

重さがないというのはどう言うことなんだろう。ひょっとして、幽体ってやつ？

昨日そんな考えが湧いた。そんな言葉を口にする事、いい歳した男がしてたらはつきり言っで、さむい。だけど今僕がおかれている状況、それはそんなことを簡単にかき消してなおお釣りが来る。

もしこの仮定が真実だとしたら……。

そこで僕はこの鎌を消さず、右手に持ったまま人通りが少ないこの階段下から現れ、教室へと向かった。

この大学は結構学生数が多く、それに伴ってサークル活動とか個人的な趣味とかで一風変わった格好をしていたり、妙な物を持ち歩いたりしている人がちょこちよこちよこちよこちよこちよこちよこの大鎌が僕の期待を裏切ってほかの人にも見えてしまう物だとしても、

「サークルの備品ですが、何か？」

の一言で片付けられる。

……かもしれない。そう思ったから、大学を実験の場とした。
セットや小道具と思われるだろうが、こんな大きな凶器を持って歩いているのに、すれ違う人すれ違う人が誰も僕を避けない。見ようともしない。

これはいい反応だ！

思わず左手でガッツポーズ。完全に見えていない、と結論してもいいだろう。昼間に人目のつくところで遭遇したとしてもこれならば問題がない。あとはこれの危険性だが……

ちなみにこの大鎌は重さがないくせに手触りはしっかりと金属的で、そして硬い。先端を触ってみるとチクチクとやはり刃物の触感がする。たとえ一般の人に見えていなくても、当たったりしたら大怪我、というかそれで命を刈り取られる恐れが大だ。さらに見えていないから避けることも出来ない。

「まさか……ねえ。そういう使い方……？」

とんでもない想像が脳裏をよぎる。が、試してみないと何ともいえない。

持ったまま教室に入ってみた。やはり誰一人として気づいていない。授業が始まった。ある程度教室には人が集まっていたが遅刻してくる者も幾人かいた。大鎌は消さずに肩に担ぐようにして、あえて一番後ろの入り口に近いところに座っているのに、横を通る誰かがこつちを見ない。教壇の上に立つ先生もまったく無視。うむ、見えていない。

この凶器の危険性チェックの実験台に、遅刻して来た中の一人を使うことにした。僕の嫌いな奴だ。喋り方、歩き方、態度、そのどれもがいかにも

「オレ、ロククだろ？」

みたいなよくわからない主張と勘違いからできている。僕に害をなしたことはないが、多分つきあってみても性根からあわない。

都合のいいことに僕の近くに座っている。いくらキライな奴だからと言って、いきなりグサツ！ とするわけにもいかず、そーっと鎌を伸ばしていつて、そいつの足を上から突っついてみた。

「うえっ?!」

刃先はあっさりと腿を貫通した。思いつきり血の気が引いた。それ以上声は出さなかったが、口は開いたまま。だが相手は刺さっていることに全然気づいていない。

血も出ず、痛みも無く。

間違いなくこの凶器には、硬くて刃物のような手触りがあった。あっけにとられてしまい呆然としていたら、相手の顔色が少しずつ悪くなっていく。はっと気づき、大鎌を引き抜いた。鎌が刺さっていた跡は革製のパンツにすらまったく残っておらず、白い鎌の刃の先端は少し金色を帯びていた。鎌を抜いてからもそいつは授業が終わるまでなんだか体調が悪そうにしていた。

……

…

「まあ、偶然つてあるし……」

すぐに結論付けるのは避け、心を落ち着けるためにも自分自身に言い聞かせた。授業後少しだけあとをつけた。彼が彼女と思われる子と歩いて駐車場に向っていく。

「ハルう、今日ヤケに顔色わるくなくくない？」

「ついだよ、授業来るまでは普通？ でもよ……座ったら急に身体がだるーくなってよ……息切れもするんだぜえ、変だよな。風邪ひいたとかそんなんじゃないしょーだしよ」

「あはは、じゃタバコの吸いすぎ？ それかもう若くないんじゃないかね？」

「バーカ、んなわけねえだろ。オメーが何か伝染したんだろ？ 別れっぞ？」

バツカじゃねーの、と罵る彼女の頭を小突いた。

……

……二人とも僕とは絶対気が合わない。いや、そうじゃなくて。

やはり体調が悪くなったのは僕が刺したせいかな……気がついて早めに抜いて良かった。ヘタをしたら本当に命を削るところだった。危なかった、と胸をなでおろした直後。

「その通りだ」

思わずあたりを見渡してしまった。しかしこの声、死神の僕だ。
今日は声しか聞こえない。

「お前は今、非常にまずい事をしかけた」

「ああ、なにもないのに殺しかけ……」

「そうではない。もとよりあの者は近いうちに死ぬ。だがまだ魂を
吸い取るな」

え？ 今何て言った？ あいつが死ぬ？

「まだ肉体とリンクして死を予期していない魂は非常に強く肉体に
固着しようとする。それを無理に引き剥がそうするとそのまま魂
が変性するのだ。」

変性した魂はレクイエムの力が癒す。だが何度も繰り返せばレク
イエムが狂う。そしてさらに蓄えた力がそれを修正するために使わ
れ、失われていく。修正するのに十分な力が無い場合はそのまま砕
ける。それだけは避ける」

「レクイエム？」

「そうだ。今お前の手にあるものだ。お前に教えておく。今は死ん
で間もない者だけ救え。それが一番レクイエムに危険が無い。いく
ら見つけたからといっても、その場で生きたまま導くな……」

そう言った後はもうなにも話してはこなかった。聞きたかったこ
とはまだあったのだが、向こうから回線を閉じてしまったように何
の返答も無かった。

その時だった。

ゴシャン

僕の後ろの方から、そしてちょっと遠くの方からすごい音がした。
何があっただろう。物見遊山のつもりでその音のした方へ歩み
を向けた。

「運命」

すごい人ばかりだ。皆の目線の先は大学から出てすぐにある、交通量が結構多くて危ないと評判の交差点。そこで大型トラックと普通乗用車が出会い頭で事故っていた。

乗用車は右っ腹に思いつきりぶつけられたらしい。車体フレームが軽く「く」の字になっていて、そのまま押し流されたようでタイヤの痕をアスファルトに残し、車体が車道に対して斜めになっていた。

トラックはスピードを緩めなかったのだろうか。さらに悪いことに曲がった乗用車はそのままトラックの下に潜り込むようになっていた。運転席付近がすごいひしゃげ方をしていた。

……トラック自体の損傷はその強固なバンパーによって大したことになさそうと言うのが皮肉なものだ。

僕の視界にちらつと映る。二台が絡み合っている光景のすぐ脇だ。

まさか……

人だかりを掻き分けて車に近寄った。助手席から乗っていた人が

引つ張り出されて路上に横たえられていた。何人かの通行人がその人の介抱をしていたが意識は無いようだ。頭を強く打っているようで、頭から血を流している。

そこからスクラップの方に視線を移す。運転手は一目見て救出不可能と分かる状態で、おそらく死亡している。運転手の方に励ます声をかける人もいないから、ほぼ即死だろう。凄惨な現場だ。

開け放たれた助手席の扉の奥に見える、血が滴りだらりと力なく垂れ下がる左腕の時計、そして救出されていた同乗者。

……運転手はおそらく、僕がすっかり殺しかけたアイツだ。

死神の僕はもうすぐ死ぬといていたが、本当にすぐだった。偶然とはいえ惨い。

……偶然だと思いたい。まさか僕が大鎌を刺し、魂を吸いかけたせいで運命が曲がり、死に近づいたとは考えたくない。

「……ほら、今だろう？」

頭の中で声が響いた。はっと気がついた。授業後もずっと消し忘れて今も右手に大鎌、レクイエムを持っている。しかし狭い車内にこの凶器が入ると思えない。ボソボソと死神の僕に問いかけた。

「今は無理だよ、レスキューが来て引つ張り出してくれないと……」
「……レクイエムがお前たちの知っている物理法則に従っていると？ お前は何を見て、何をしてきた？ さあ、やってみろ。そのまま振り下ろして貰えばいい……」

半信半疑だったが、僕はレクイエムを握り、なるべく周囲の人に気取られないよう振りかぶって男に向かって振り下ろす。

グシャグシャにひびの入ったフロントガラス、車のフレーム、そして救出の妨げとなっている巨大なトラック。

すべてすり抜け、レクイエムはかろうじて形を残す男の胸に突き刺さる。

今回は刺さる感触があった。簡単に抜けない。

しばらくその状態を保ち、引き抜くのに抵抗がまったく無くなるまで待った。引き抜いてみると、以前やった時のように白かった刃は金色になっている。そして事故現場から離れて人通りの無いところに急いだ。一連の行動をとった後で忘れないうちにレクイエムを消し、その場を去った。

……

…

食事が喉を通らない。昼食を摂ろうと思ったが全然すすまない。

「裕也、どうしたよ。さつきからずーっとメンチカツばかりみてよ」

もちろんメンチカツを見てるわけじゃない。焦点もそこにはあっていない。さすがにあんな惨状を目にしてすぐに食べられるほど神経は太くない。

昨日だってその前の日の事を思い出さないようにしてやっと食べる気になったんだ。

「……よかつたら食う？」

「お、さんきゅうな。てか、どうした？」

「あ、さては事故現場見てきたんだろ！俺らも見てきたけど、ありやすげえな。めちゃくちゃってあのことだわ。でさ、噂じゃうちの学生なんだろ？誰なんだろな」

……まさかさつき同じ部屋で授業を受けてたアイツだなんて誰も思

つちやいない。

僕だつて後をつけて、YOUの言葉を聞いて、助手席に乗っていた彼女を見なかったら被害者がアイツだとは思えない。

……それほどぐしゃぐしゃだった。

YOUというのは死神の僕のことだ。いつまでも死神の僕、と言っているのは自分としても何だか気分が悪い。かといってアイツとか死神とかそのままでは、曲がりなりにも生命を救ってくれた恩人に対して失礼。

僕が「裕也」だから、それにちなんで「YOU」と呼ぶことにした。

偶然だけど、丁度いい。お前、あなた、とかそんな感じ。そこまです親近感を持つこともない。恩人とはいえ、もともとは厄介な同居人といったところなんだから。

「……気をつけような。あんな風に人生終わりになっちゃ適わんぜ、ホント。事故ったヤツ、バカだよな」

「ホントホント。あそこ危ないってわかってんだからさ、そんなとこくらい注意してなきゃどこで注意してたんだろな。遅かれ早かれなつてただろうよ」

……いや、まったくその通りなんだ。僕も、自分がこんな立場にな
ってなかったら同じことを思っ、思ったまま口になっている。だが
……

僕は事前にわかるようになってしまった。
どうい状況でそこに至るのかまでわからないが、そうなる事実
だけはわかる。

不意に訪れる死。まったく予期せぬ事実。
おそらく、絶望を感じることもできない。

それは一体どれほどのものだろう。
その人自身すら、生きてきたという事を自覚することもなく終わ
ってしまう。

……ものすごく怖い。

YOUと交わしたと言う契約。
こんな怖いことに、これからずっと立ち会っていかなくてはいけ
ないのか……？

「じゃ、ごちそーさん！ 行こうか」

高志の声にはっとする。いつの間にか僕の昼食になるはずだったものは全部食べられてしまっていた。彼らもあんな現場を見てきたばかりだと言うのに。ずいぶん健啖なもんだ。

「立会」

桜も開花し、満開まであと少し。

現在新しい学期。

つまり僕の大学生活最後の年。就職先は決まりません。

ですが、この冬から春の間にも三人分、僕は仕事をしました。

本当なら、僕のこの仕事なんてない方がいい。

人死にが起きたという事なんだから。

仕事を見つけたのは全部街に出て行った時だ。すでに街に行くのが嫌になっている。

だけど行くしかないじゃないか。就活だってそこを中心にしてい
るし、別件の用事だってあるんだ。どうしたって人が溢れる中に身
を投じなくてはいけない。まったく、煩わしい限りだ。

……一人目はショーウィンドウに映っていなかった人。この人は見
つけた時からなんだか暗い表情をしていたから、予感はしていた。

僕に見えなくなった状態なのだから何らかの形で亡くなる。この人はおそらく自殺だろう。

しばらく後をつけていったが、僕に気付く様子もなかった。暗い顔のまま口を開くことも無く、静かに自分の死に場所へと向かう。

……そうだと分かって僕はその後を尾行^{つけ}る。まったく、悪趣味なんてもんじゃない。気分がどんどん悪くなる。

……

結局最後まで僕は彼の言葉を聞くことは無かった。

揺らがなかった。

止めることなんて叶うはずがない。最期に顔を上げ、あざ笑うかのように周囲を見渡す。

そして踏み切りに飛び込んだ。

僕以外にも見ていた人たちは多数。絶叫が響き渡り、付近は混乱に満たされた。僕の他に動く人はなく、仕事をするには邪魔がなかったのが幸いだ。もちろん僕だって十分に混乱していたのだが、どんな形であれ必ず迎えるとわかっていたから動けただけだ。

轢かれた彼は存外踏切の近くに居た。跳ね飛ばされた直後に路線脇の柵を突き破るようにして引っかかっていた。よく聞くように五体が飛散して……ということは幸いなく、原型を留めてくれていた。

車輪とレールに挽き潰された左半身と、鳩尾から下以外は。

左腕と下半身はどこに行ったのだろう。
探す気なんて起きるわけがない。

ある人は路上のホームレスの人と口論になって、胸と腹を何ヶ所も刺された。前のように電車の窓に映っていなかった人だった。

……電車はホントにいけない。不特定多数を一度に、しかも確実に観察することができてしまう。僕も窓を見ないように見ないように努力しているのだが、元来の性質^{タチ}なのか違和感に気付いてしまう。気付いた後はYOUが必ず催促してくる。前回もそうだった。響くような声は本当に頭に痛い。それに耐えかね渋々足を向けている。

……

些細なことだったのに。

ワンカップ片手にフラフラ歩いていたホームレスのおじさんがぶつかってしまった。ぶつかった相手の服をワンカップにまだ入っていた酒で汚してしまった。

たったそれだけ。

殺し、殺されることに大きな理由なんて要らないらしい。

刺されたスーツ姿の男性につばを吐き、酔っ払ったままの浮浪者はほろ酔い加減でその場を去っていく。捕まえることもできそうだ

ったが、かつてと同じくそんな暇なんて無い。

そもそも僕まで刺されたら……。折角拾った命をまた粗末にするような行為は避けておきたいと言うが本心だ。

うつ伏せで倒れていた会社員を仰向けに起こして上着を脱がせる。着ていた白と青の細かいストライプのワイシャツは、もともとの生地柄の面積の方が小さくなっていた。慌ててシャツも脱がせたが傷が多すぎる。僕の手で押さえきれない。

「誰か！ 誰かお願いします！ 手伝ってください！」

……だけど誰も来てくれない。

時間と場所が悪い。道を挟んで向こうにはすぐ公園があつて、夜だというのに微妙に人影はある。僕の声が届いていないとは思えないが状況は見えないだろうし、面倒事そうなので関わりあいたくない、と言うのが一般的な反応なんだろう。

どうすることもできない僕はまた救急車を呼び、結局参考人として連れて行かれた。

……

……一番ショックだったのは就職活動で出て行った日。
帰りの時に乗ったエレベーターでの事だった。扉が閉まったときに気がついた。

「うへえ……」

思わず声が漏れる。扉が鏡のようにぴかぴかだ。入った時にも居たし、そして僕の後ろに気配はある。

だけど、前を見れば僕の後ろに誰もいない。

……最悪だ。

その人は降りた後しばらくは何ともなかった。だが、突然狭い路地に引きずり込まれた。

本当にびっくりした。まわりにも結構人がいるが、特に気付いていない。どうして気付かないんだ。

さすがに助けようと思って僕も追いかけたが、走り出すまでのほんのわずかな時間で見失った。大慌てで警察に連絡。やってきた警官に背格好や服装の特徴を伝え、僕の連絡先を教え、そこから先は警察に任せた。

……

午後三時には終わっていると言つのもう夕方だ。なんだか帰るに帰れない。そんな気持ちで街を歩いていると、YOUの声がする。方角を伝えると、また聞こえなくなった。

夕闇が足早に伸びていく。言われた方に結構歩いた。橋の下に放置されている車がある。上の橋は線路のようだ。

すごく嫌な確信とともにその車に近づく。

車の中に人の気配はない。鍵もかかっている。

薄暗いこの時間、さらに薄暗いこの場所で、もつと薄暗い車中をよく見ると、大きな何かが中にある。動かない。反対側にまわり込んで覗き込む。

……エレベーターの中で見た女性だ。

衣服は裂かれ、暴行を受けたあとの様だった。首に深い切傷（？）が見える。薄黄色だったはずのスカーフと、その上から首を絞めている布が赤黒くなっている。

……むごい。相当怖かっただろう。

こんな密閉空間だが、レクイエムにはまったく関係なくてよかった。向こうが一体どんな世界なのかは知る由もないが、少なくとも彼女をこんな恐ろしい現実に留めておくことの方が、よっぽど気の

毒だ。

僕が大きく振りかぶり、刃を振り下ろしたのとほぼ同時に、上から轟音が響き渡る。

……

……それにしてもとんでもない運命を背負ってしまった。自分が事故に遭ったことで、まさかこんなことになるうとは。

一人で全部やることになるかと思っていたが、少しはYOUが手助けしてくれるようだ。僕が見失った時は彼が方向を教えてください。……最初に僕が認識しないとダメのようだけど。

やはりあらかじめ僕が認識することが前提なのか、普通一般に老齢や病気で亡くなる人たちのことには、YOUはまったく関与しない。かなり近所で二件葬儀があったが、姿はおるか声もなかった。亡くなったということがわかっていないのに、催促されることもない。

……ひょっとして自然死の場合はやらなくてもいいのだろうか。

それなら初めての時から今日までの数ヶ月、全部で六人というのも少し納得だ。いくらなんでもこれだけの人口で六人分しか死神の仕事がないってことはおかしいだろう。安心だ。

……

……でも冷静に考えれば、そうなるとうち会わなくてはいけないのはすべて凄惨な現場。

いつまでやらなくてはいけないんだ

「牢獄」

ひと月ほどした頃。世間はもうすぐゴールデンウィーク。友人たちは旅行に出かけると意気込んでいた。アルバイトをしてもすぐに止めていたような僕は、いくらインドア派で出費が少ないとはいえお金がない。なので家にいることにした。卒業年次ということもあるし、今まで散々サボっていた卒業論文を形にしないと卒業できない。

幸い理系のような実験研究が必要ないのがせめてもの救い。ちょこちょこと集めてきた資料、文献を読んで、データをまとめて考察を。この疑問を僕が解決するんだ！ というほどの熱意はさすがにないので、完成してみんなが、

「ああ、そういうこともあるんだ」

とちよつと知識が増えるくらいのもになればいい。

ゴールデンウィークはそんな感じで大学と家にしかいなかった。街に出ることもしなかった。大学に行くには電車に乗らないといけないが、時間帯さえ間違わなければまず問題ない。おかげで憂鬱になってしまう体験もなく、平穩無事に過ごせた。

……

……はずだったのだが。

「裕也…… 裕也……」

休み最後の日。せつかく寝ていたのに起こされた。まだ暗い。YOUの声だった。

なんだなんだ。近頃まったく声も姿もなかったから、僕に任せきっていると思ったのに。

「すぐに出る。時間が経つと面倒なことになる……」

眠くて仕方なかった。明日じゃダメなのかな、と思ったが彼の今までにない言い方が気になる。とりあえず従う。こっそり家を抜け出し自転車に乗って、YOUの指示のあった方向に向かった。

……

だんだん気分が悪くなってくる……。吐き気ではない。悪寒に近い。周辺に何だか嫌な雰囲気漂っていた。この近くに何があったっけ……。

そうだ、確か……

僕がまだ高校生だった頃、強盗があつて放火された住宅がある。子供とその母親、祖母が犠牲になったそうだ。その土地に再び住宅が建て直されたのだが、最近住人がよく入れ替わるとか噂になっていた。

……母から聞いた話だが。

井戸端会議の議長を務めている（らしい）うちの母さん、日本語堪能すぎやしませんか？

そんな話を思い出していると、今は空き家になっている件くだんの家の前で止まれと言われた。

なんだか嫌な予感的中しそうだ。

「これからもうひとつの死神の仕事をしてもらおう……」

……

自転車を降り、鍵をかける。首筋に走るぞくぞくとした感覚は弱くなるどころか強くなる一方。確かにまだ初夏で、夜は若干冷えるとは言えこんな寒気を感じたことは一度もない。

「この家から何か感じるか？ ……その感覚を覚えておけ。この先には、死神と遭遇しなかった魂がいる。それを始末するのだ。気をつける……」

始末？ 始末と言ったか、今。おそらく何か危険があるということだ。

声は僕と同じだというのに、彼のトーンは否が応でも悪い方向ばかりを想像させる。ただど考えてばかりではこの気持ちの悪さは取れないし、それに彼としたという「契約」違反になったりしても困る。

まだ内容は思い出せないけど。

仕方ないのでその家の門をくぐった。玄関には鍵がかかっているので、回り込んで庭の方へと向かう。YOUが言うにはこの家のどこかに死神と遭遇できなかった魂、俗にいう亡霊だろうか、それがある。入れないと話にならない。建物の壁と生垣に挟まれた狭い通路を抜け、庭に足を踏み入れた。

一気に気味悪さが増大する。……周囲の音が、まったく聞こえなくなった。

あれ？ と思いきよろきよろしているとYOUが叫ぶ。

「伏せる！」

言われた瞬間に目の前に白い何かが現れ、薙ぎ払ってきた。急すぎて伏せることなんかできない。胸を強く打たれ、飛ばされる。そのまま受身も取れず庭の土に叩きつけられた。

息が出来ない。咳き込みながら上体を起こすと、思いもしなかった光景が頭上に広がっていた。

家の壁から白い、何かの触手みたいなのが生えていて、うねうねしている。

目を丸くしたまま僕が見ていると、それは僕めがけて振り下ろされた。慌てて転がってそれをかわして、立ち上がって入ってきた門に向かって駆け出す。足がもつれて転びそうになったが地面を舐めないように両手をついて、這うようにして必死に進む。

何とか再び二本足で立ち上がって門から出ようとしたが、目前でまた別の触手が現れ、道を塞ぐ。万事休す、だ。

僕の頭めがけて打ち下ろされる。どうしたらいいか、全然わからなかった。

しかし咄嗟にとった行動が僕を救った。僕の左手からレクイエムの柄が出て、右手でそれを掴み直撃を免れた。レクイエムで防げる？　ってことは、これは！

直感で悟り、僕はそのままレクイエムを引き抜いて全力で下から上へと振り上げた。生えていた触手が斬り飛ばされ、地面に落ちると煙のようなものがたち、壁へと吸い込まれていった。触手の付け根は逃げるように壁に溶けていき、眼前を塞ぐものはない。僕は急いで門から外に出た。

……

恐怖が再び襲ってくる。足が竦み、うまく立てない。膝に手をついて何とか立っている。

「気をつける、と言っただろう……」

YOUが呆れるように言う。

「そんなこと言っただって…… そっちがちゃんと言っておかないからじゃないか！」

思わず大声を上げてしまった。はっとして口を押さえ、今度はひそひそとYOUに問いかける。

「……あれが、死神に遭えなかった魂？」

「そうだ。成れの果てだ。……ほんの少し前だ、あんなったのは。それまで感知されなかったからな。幸い成ったばかりでまだ己の力の使い方を知らん。あの程度の単純な動きしかできぬ。今のうちに始末するのだ……」

そう言うともた黙り込んでしまった。

……

正直僕は死神に遭えなかった魂、と言うから人間の姿をしているものだと思っていた。それこそTV番組とかでよく見たことがあるような、白い死装束を来たテンプレートな幽霊の姿。まさかあんな化け物だなんて……。

逃げたい。逃げ出したい。だけど、やっぱりYOUとの「契約」が気になる。全然思い出せないままだから余計に。ここで諦めたら一体どうなるのだろう。放棄してそのまま死ぬ可能性があるくらいだったら、殺されてしまうかもしれないがまだ望みのある方を選ば

う。

一応の決心をして膝から手を離してレクイエムを両手に、再び突入していった。腰はまだ引けている。まだ触手は出てこない。角を曲がって庭に入った瞬間、再び無音の世界が広がった。

……来る。

三本一気に生えてきて、一度に全部が僕めがけて叩きつけられてくる。受け止められそうもないので庭の奥に走って逃げた。地面を叩いたそれらのうちの一本が向きを変えて僕の方へ突っ込む。先が尖ったそれを避けようとして身体を反らしたが、走りながらだったのでバランスを崩して尻餅をついてしまった。だけどおかげで刺さらなかった。僕に襲いかかった触手はそのまま空を斬った。

立ち上がって伸びきったそれを叩き切る。先と同様、斬られた部分は煙のようになって壁に吸い込まれ、壁から生えた残った部分はやっぱり逃げるように短くなってそのまま溶けていった。

残りの二本が僕を近づけまいとするようにぶんぶんと8の字を描くように振り回されている。タイミングを合わせてレクイエムを振る。こんなに巨大な凶器だというのに重さがないので扱いやすい。僕が普通に腕を振るのと同じ速さでついてくる。

YOUが言ったように動きが単純。両方ともを切り落とすのはそんなに難しいことではなかった。しかしまた新たに触手が壁から生えてくる。きりがない。

……壁から生えてくるってことはこの奥に触手の本体がいるのか？

その可能性はとても高い。憶測に過ぎずリスクも高いだろうが、

そう信じて単純な動きで襲いくる触手をかいくぐり、壁の奥に斬りつけた。

……驚いた。鈍く刺さる感覚がした。

レクイエムは車のフレームやガラスを容易に透過する。コンクリートや木の板にだって抵抗なく通り抜ける。それが今、ぐさりと音を立てるかのように家の壁に深々と爪を立てたのだ。

次の瞬間、すごい咆哮というか絶叫というか、えも言われぬ大きな音が響いた。壁という壁から一気に触手が生え、伸びきっている苦しんでいるようだ。ぶるぶる震えながらそのすべての先端が僕の方に向く。

……非常にまずい。

一気に切り裂いてその場を離れた。その時の感覚は何か固いような、それでいて柔軟な……。そう、分厚い皮を切った感触に似ていた。僕がさっきまで立っていた場所に何本も何本も触手が刺さる。

大きな切傷が壁に残っている。しかしその傷はコンクリートについた傷といった感じではない。そしてその傷は生き物が切傷をしたときのように開き、断端が収縮して内側へ巻き込んでいた。脈打っているようにも見える。弱々しくも触手がその傷を押さえ始めた。

別の壁に同じように斬りつけた。再び叫び声が上がる。

その声はとても痛々しかった。胸が潰されそうだ。

レクイエムを恐れ、もう止めてくれと懇願するかのような、悲しい鳴き声だった。

だが僕は両手に握る凶器をそのまま深く差し込み、そのまま横に薙ぐ。壁から生えた触手は僕を攻撃することもなく、自身に付けられた傷を癒すかのように押さえることに必死になっていた。一緒に切り裂かれたガラス戸がめくれる様になって、家屋の中に進入できるようになってる。

「さあ、入れ……。本体を始末するのだ……」

はつきり言って気持ち悪い。入りたいわけがない。YOUが言う本体がこの奥に居るだろうことは間違いない。だけど、そう言う問題じゃない。

これはもう家じゃない。僕には一つの生き物にしか見えなかった。それを引き裂き、その腹の中に入るなんて、常軌を逸した行為をさらに超越しているとしか思えない。死神って一体何なんだ？　こんなことまで僕の義務に課せられているのか？

僕が行き渋っていればいるほど、YOUの声が頭の中にガンガンと響く。両方ともが苦痛で仕方ない。きっとこのままで居れば頭痛ばかりが酷くなる。解消法は一つだけ。

YOUに誘われるまま化け物の中に足を踏み入れるしか、僕には
選択の余地は無かった。

「黒縄」

家の中はさらに音が無かった。完全に閉ざされた監獄の中、静かすぎて感じられる耳鳴りがより一層強くなる。何とも形容しがたい空気が漂っていた。淀んだ空気の流れまで目に見えるかのような、そんな不気味さに背筋が凍る。住む人がすぐに次々と変わってしまうのも納得だ。

各所にある窓から入るほのかな月明かりだけが頼りの中、嫌な感じのする方向へと進む。

耳をそばだて、肌から感じるその雰囲気をとどるとそれは二階から来ているようだった。すでに相手の腹の中なのだからそんなことは無駄だと分かっているのだが、極力足音を立てないように階段を慎重に上がってしまう。

階段を上り終わると扉が二つある。より首筋がひやりとする感じを受けるのは奥の部屋だった。

きいっと小さく軋む音に冷や冷やしながらドアを開け、そーっと覗き込む。正面に見える窓の下あたりにぼんやりと白く光るものがある。驚きはしたが、さっきまで散々あんな化け物を目にしているのもまだ平気だ。よくよく見ると、子供だ。男の子のように見える。ぶるぶると震え、膝を抱えて座っている。

「この子が……」

YOUに問いかける。いや、問いかけなくても分かっている。きっとこの子がYOUの言う本体。もう少し伸ばせば男の子の肩に手が届く。こんなに近付いたけれども何事もない。はじめは見下ろしていたが、いつしか僕は片膝について迷っていた。

本当にこれがあの化け物なのか？ 怯え、震え、泣いている。この手に持つ大きな凶器がしたことを思えばこの子を追い詰めているのは間違いなく僕だ。

「そうだ。さあ、貫け」

「できない……」

「何を言う…… お前も見ただろう。あの化け物の本体がこれだ。害以外何者でもないだろう……？ 早くしろ…… 目覚めるぞ」

わかっている。だが、僕はそんな簡単に動くことはできなかった。こんな子を害と断じて斬り裁く度胸が僕には無い。良心と言うか、常識と言うか、普通に暮らしていたらできるわけがない。

「……………」

何かぶつぶつと言っているのが聞こえる。じつとして耳を澄ましてみる。

「怖い…… 怖い…… 知らない人が…… 熱い…… 熱い……
怖い…… 熱い……」

まさか四年前の事件の時の……？

多分そうだ。僕に恐怖しているんじゃない。ずっとその時の悪意に怯え震えているんだ。

そう感じた僕はなおのことレクイエムを振り上げることなんて出来なくなっていた。

「怖い…… 怖い…… お母さん、怖いよ…… 入ってこないで……
…… 入ってこないで…… 来ないで……」

来るな…… 来るな…… 来るな、来るな、来るな来るな来るな来るくるくるクルクルウウウウ」

最後のほうは何を言っているのかわからなくなり、突然身の毛もよだつほどの悲鳴のような声をあげ立ち上がった。最後のチャンスだったかもしれないのに、それに驚いた僕は思わず後方に飛び退き、間合いを取ってしまった。

「……まったく。来るぞ、さっきとは別次元だ。集中しろ」

YOUが僕に警鐘を鳴らす。わかってるってさっきから何度も言ってるじゃないか。舌打ちをしてレクイエムを握りなおして正面に向き直る。その時、その子の顔をみた。

焼けただれた顔の右半分は皮がはがれてしまっている。同じ側の腕も黒こげて、だらんとしまっている。反射的に嘔吐しそうになったのを必死に堪えた。あまりに痛ましい。

そして、目が……

白目の部分は真っ黒で、黒目の部分が白かった。

決して出られぬ深い、深い闇の中に吸い込まれ、その底から見上げる月のよう……

その様はあまりに恐ろしかった。

起立し全身を硬直させた男の子は、突然脱力したかのように立たままうなだれた。だらんと垂れていたその子の腕が突然伸びた。さっきの触手のように。本体だけあってやっぱり同じような攻撃方法なんだ。その腕は床に溶け込み、その先端はどこにも見えなくなった。

突然左後方から現れ、僕の身体を引っ叩いた。かなり鋭い痛みがする。思わず苦痛の声がもれる。歯を食いしばって、叩かれた方向へ反射的にレクイエムを振るが空振り。今度は反対側から打たれた。移動速度がものすごく速い。上から、下から、自在に出入りする細くて黒い触手。月明かりも弱い暗い室内だから余計に判別しにくい。攻撃も速いからレクイエムで受けるのも上手くできない。たったの一本なのに、さっきまでの太くて白いものとはまったく違って相手に辛い。打たれっ放しだ。このままでは危ない。

体制を立て直すためにも開きっぱなしのドアから慌てて部屋の外に出る。だけど部屋の外にも黒い鞭が追ってくる。下の階に逃がさないつもりか、階段の最上段から現れ三、四発床を叩きつけた。

もう一つある部屋に飛び込んだが、その部屋の壁から現れて打ち付けた。すぐさま引っ込んで床から現れ打ち付ける。少しずつ目

が慣れてきた僕は何とか叩かれっぱなしになることを防ぐことができるようになってきたが、素早過ぎる黒い腕を捉えることは全くできない。

よく考えれば始めっからこの家の中はすべてあの男の子の体内同然。どこに居ようと関係なく僕を察知し、攻撃できるに決まっている。きつと腕の出現場所も任意だ。ここと思えば寸分違わぬところから現れる。端っ^{はな}から無理ゲーを強いられている状態。庭の白い触手と別次元なんてもんじゃない。

くそっ こんなことなら言われた通りにやっておけば良かった。

息を整える暇も、作戦を練る暇もなく、僕はまたその部屋を飛び出し奥の部屋に戻る。しかし相変わらず防戦一方で一向に反撃の糸口をつかめないまま、疲弊していく。何とかならないかと本体の男の子をちらちらと観察し続けた。

捉えきれない速さで右腕が動き回る一方、本体である男の子はその場から立ち上がりはしたが、壁を背にした状態でうなだれたまま一步も動かない。黒い触手を牽制するためにレクイエムを振り回しながら移動し、その子をさらによく観た。

背中から白い触手が何本も何本も生え、壁に縫い付けられている。

「動かないんじゃない……。動けないんだ！」

気が付いた僕は一気に男の子に走りよる。腕を相手にするんじゃない。狙うのは本体ただ一点。僕の狙いを察知した黒い触手がもの

すごい速さで移動し僕の目の前に現れた。

それぐらい読めている。打たれてからでは僕の腕の速さで追いつけないが、先読みして動いていれば制することくらい！ レクイエムの柄で触手を払い、本体の背中と壁の隙間にレクイエムの刃を滑り込ませ、そして彼から生える根を下から一気に刈り取った。

うなだれていたその子は目を見開いて反り返るようになり、同時に断末魔の叫び声上がる。黒い触手も痙攣を起こしたかのように伸びきって動かなくなった。僕は続けて体をひねり、刃も柄も天井を素通りした大鎌を持ち直して男の子の胸を貫いた。

……

ものすごい光が放たれた。部屋の隅々、床目の隙間に潜む影すら許さないほどの光。

そして周囲に響く、どこか物悲しくも、心の中に溶けこむ旋律。

その光と音の中、男の子がびくびくと身体を震わせているのがわかった。目から黒い涙が溢れている。

「……怖くない。怖くないから……。怖く……。ないよ、もう……」

左手はレクイエムを握ったまま、右手と身体で男の子を包んだ。

光が弱くなっていく。それに伴い、だんだんと男の子の爛れた姿がきれいで健康そうな姿に戻っていく。恐怖に満ちていた表情はだんだん穏やかになっていく。

光が完全に消え、静かになると、男の子はにこつと笑顔を見せた。その次の瞬間光の玉になって、レクイエムに吸い込まれた。

レクイエムの刃は、今までに見たことがないほど、美しい黄金色になっていた。

……

…

「……まあ、上出来だ。初めてのわりに、そして本体を相手にしても仕事を終えられたのだからな」

作業を最後まで終えたところでYOUが話しかけてきた。はつきり言って、ものすごくしんどい。体力もそうだけど、精神的にも。そんな状態なのにYOUのお説教がはじまる。さっきの誉め言葉はなんだったんだ、まったく。やめてほしい。

「同じことがあったら、今度こそためらうな……。今言ったことを

信じてな……」

そしてまたしても回線を切ってしまったかのように一言も言わなくなってしまった。

立ち上がって男の子が背にして座っていた壁の窓から外を見下ろす。ここから庭がよく見える。

……だからか。

知らない人が入ってきたのが怖かったんだ……。自分を守りたかっただけ……。

ただその思いが強すぎて……

……ありがとう。本当はとてもやさしいものだったんだ。

あんな凶器の姿だったから今まで実感はなかったけれど。

入ってきたところに戻る。驚いたことに切り裂いたはずのガラス戸は何ともなかったように閉まっていた。ひびも入っていないし、欠けもない。

……どうやって出たらいんだ？ あー、鍵開けて出たらいいのか。鍵は閉められないから開けっ放しになるけど。

外に出て庭から建物の外観を眺めた。どこにも欠損はない。まわりの音も聞こえる。それにあんな叫び声が上がったと言うのに近辺には騒ぎもないし、どこの住宅も電気がついてもない。ここに来た時のままだった。今晚のことが本当に幻だったみたいに見える。

腕時計を見ると、時間がちよつとも経っていない。到着した時から10分と経っていない。あの子の魂を導いてから、あそこで休んで外に出てくるまでの時間とほぼ一致しているんじゃないだろうか。戦っていた間は時間が流れていないようだった。ますますさっきまでのことが無かったことのように思える。

……だけど黒い触手に強打されたところが触ると痛い。

この世界には幻だったかもしれないが、僕自身にとってはまぎれもなく、現実だった。

「旅立つ命に捧ぐ歌」

こつそり家に戻って、今は玄関の前。自転車を止めて鍵をかける。音を立てないようにノブをひねって、左手をそえながら音を立てないようにゆーっくりドアを……

ごとん

……あれ？

ごとん、ごとん

そんな！ え？ 誰？！ 母さん？ それとも父さん？！
僕が家を出て戻ってくる、この世界の1時間程度の間、玄関が閉められてしまっている。入れない！

今まだ3時を少し回ったくらいだ。

「そんな…… あと4時間くらいこのまま……？」

裏の勝手口もダメだった。まさか自分の家で締め出されてしまうとは……。鍵持って出ればよかった。父は明日仕事だし、インターホンを押して起こすわけにもいかない。僕は授業もないし、ゼミに行って調べ物をしたりする程度だから今日一晩だけちょっと我慢す

るしかないか……。

……

…

玄関先で夜空を見ながらさっきの出来事を思い出していた。

YOUが言っていた。死神によって導かれなかった非業の魂は、その思いが強すぎるとこの世界に縛り付けられてしまう。肉体が残っていればそこに留まろうとする。肉体が無くなると、あるいはすでに無い場合、生への未練を断ち切れない原因に絡め取られてしまう。

それは場所や物にかぎらず、人の場合もあるそうだが。死んだことすら気づいていない魂の場合、肉体から離れたところに居続けてしまつか、生前と同じような過ごし方をしようとするという。

……それは漫画、テレビ、小説とかでよく目にする地縛霊、浮遊霊というものと同じ。本当のことだったんだ。信じてなかったけど。

まあ、自分がこんなことをしている時点で想像するか、気付いておくべきか。

放っておいても大丈夫なこともあるそうだが、早く解放する特別な方法があるという。

それが葬儀。

葬儀はそんな魂に死を自覚させ、自ら魂の世界へ行く扉を開かせ

るための手段なのだという。当然もともとそんなことを意識して行われてきたのではない。

かつて愛した者の魂を慰め、これからは安らかに見守ってもらいたいと願うため。

子々孫々の繁栄のためにその死を残された生へとつなげるため。あるいは死者を恐れ、生ある者に災いをもたらすことの無いよう懇願するため。

残された者達がその死を自覚し受け入れるためでもある。

地域地域の文化のひとつで形も多様。だが、結果的には同じことになっている。因果なものだ。

宗教などの諸事情で魂を認めていない人たちも、結局はその事実を目の当たりにして還っていく。むしろそう言った人たちの方がすんなりと逝くそうだ。

「はじまりのもと」

魂の世界を、YOUはそう言っていた。

その「はじまりのもと」へ行くことのできなかった魂は、次第に変性していく。そしてその取る姿は一樣ではなく、ひとつひとつが異なる。

変性する速度も一樣ではない。ただ今回の子はとてもスタンダードなパターンで、自分が死んでしまったことに気付いておらずただそこに居続けている場合、年単位をかけて変わっていくのだそう。ただし死してなおそれを否定し続け、強い怨念を残したような場合、変性は非常に急速に進む。以前導いた、車の中で暴行を受け殺

害された女性のような場合、早ければひと月しないで変わってしまうのだという。

……「シェイド」。

変性してしまった魂のことを、YOUはそう呼んだ。シェイドは自分がいる周辺すべてに影響を及ぼす。あの子は建物全体に根を張り、ひとつの怪物となった。その影響力は変性が強いほど、またその魂が自分の力の使い方を理解するほどに強くなる。

……つまりは時間が経つほど酷くなるということだ。だからYOUは早く行けと急かしたんだ。

影響を及ぼしているシェイドの本体は大抵眠っている状態にあり、起こすべきではない。あの子のように領域全体に分散させていた力が本体にすべて凝縮され、爆発的に強くなる。そうさせないよう領域に入り込んだら本体を発見次第押さえるのが鉄則。

つまり死神の仕事は二つ。

戻るべき世界を見失う前に、非業の魂を導くこと。
不運にもシェイドとなった魂を制し、導くこと。

だが悲しみ、苦しみに満ちた魂も、レクイエムがすべてを元に戻す。異形と化したシェイドと言えどレクイエムは彼らを霧散させた

りしない。たとえ一時的に傷つけ、苦しめているとはいえ、疲れ果てた魂を癒してくれる。

その名の通り、レクイエム鎮魂歌。

YOUが言っていたようにレクイエムに蓄えられた力を使って。
……自分自身を削って。

業の力、そう呼んでいた。
あの時の旋律は、自身に蓄えられた力を少しずつ削った時にこぼれる残響。

……思い出した。ひとつだけ。
僕は、このレクイエムの力を完全に戻すまで死神を続けなくてはいけない。彼が僕を生かすために身体を交換した。その時レクイエムの力すべてが初期化されてしまった。魂を導くことに蓄えられる業の力。それを十分集めるまで、僕はこのままではいけない。

「もう少し…… がんばろうか……」

月を見上げてつぶやいた。

目的がはつきりした。いつまでかもわかった。いやだいやだと思
っていたが、今しばらくやっていこう。まだ契約の細かい点もわか
らないし、一体どれほど集めたらいいのかもわからないが、永遠と
いう事ではないのだけは確かだ。それだけでも気持ちが楽になる。

ずっとこの世界に、辛い思いに縛られ続ける人たちに比べたら…
ずっと楽だ。

……眠くなってきた。今日はとても疲れた。連休最後の日に、ある
意味生きてきて一番疲れる経験をすることになるなんて。

武器を持って戦うなんて初めてだった。格闘技だつてやったこと
ないのに。ゲームがまさかこんなところで役に立つなんてな……。
持ち方とか振り方を無意識ながらずっと見てきてよかったよ。何度
も転んだりしたけど、何にも知らなかったらまた死んでただろうな
……。

シェイドの領域に触れた時の寒気はもう治まっているが、まだ初
夏の今の時期はちょっと冷えるし、ここじゃ寝にくい。ふと父の車
を見ると鍵が開いている。

よかった。今日はここで寝よう……。

「旅立つ命に捧ぐ歌」(後書き)

以上で「YOU - the song for death -」
のイントロダクションは終わります。

ここから裕也君の後悔と懺悔の物語が、運命の歯車の軋みとともに始まります。

それではようこそ、一人の青年の生きた非日常の世界へ……

「僕の都合」

近頃大分慣れてきた。もちろん、他人事たうじんとはいえ突然人生が終わってしまったことに対しては今だって胸が締め付けられるような気持ちができる。

……さすがにこれに慣れては困る。ただ、その姿を見ることには以前までのような恐怖を感じなくなってきた。

人としてこれでいいのか、と思わなくもない。でも、誰でも経験することだ。僕が違うのはそれを目の当たりにする回数が普通よりも多くて、しかもその姿が普通は目にしないような酷いものだということ。ゲームで言えばレアな敵を見つけて倒して、経験値をいっぱい稼いでレベル上げをしているような感覚に近い。

基本的に僕がすることは、自殺、他殺、事故死による、遺恨の深い魂を見つけて救っていくこと。見つけ方は相変わらず鏡に映っているかどうかでしか出来ない。

だからきつと、……言い方は悪いけれど、取りこぼした死が相当ある。そうなると変性してしまった魂、シェイドがここに現れる可能性がとても高い。だけどシェイドの相手をすることは、あの男の子以来一度もない。数は極端に少ないのだそうだ。

そりゃそうか。もしもあんなのがたくさんたくさん世の中にあるとしたらもつと大変な騒ぎになるし、僕だって安穩と生活できない。YOUに呼び出されてばかりだ。

……慣習、風習って、とっても重要だ。

「三岳…… 時間あるのか？ かなり厳しいぞ」

ゼミで先生に心配される。大学で僕がやっているのは文化学。卒業のためにこの地域の歴史に基づく慣習を勉強していた。自分の副業のこともあつて最近興味が強くなり、今までほぼノーチェックだった葬儀とその歴史をテーマの中心にしてやり直したいと、先生に言い出したのだ。

自分としてはかなりの成長だ。今までかなり無気力でやりたくないの一点張りだったのに、よもや自ら行動に出るようになるとは思ひもしなかった。

でも時間がないのは明白。就職活動もしないといけない。そんな中でほとんど新しく研究しなおせるような気はしない。わかつてはいるけど、やってみたい。思ったような完成度に達しなかった時は、誰かが後に続いてくれることを願い、それなりのものに仕上げよう。

……と格好付けてみたけれど、同時進行はやはり無理。卒業が優先だ。しばらくは就職活動を停止し、研究に時間を割くことにした。

「あ、お母さん？ 今日ゼミで泊まりでやってくから。晩ご飯はいいよ。お父さんの体重増やしてあげて。あははははは」

携帯電話で家に連絡を入れた後、夜更けまでまとめたり文献と照らし合わせたり、そこに自分の考えのメモを加えてといった作業を続ける。泊り込みも多くなった。ただでさえスタートが遅かったのだから、このくらいの努力をしないととてもできそうにない。

家にいられる時間がかなり減った。パソコンに向かっている時間はあまり減っていないが、パソコンのディスプレイには今までのようなインターネットのサイトだとかゲームとかではなく、いろんな表や、卒論の下書きが映っている。確かに辛いには辛いのだが、やってみたいと自分で行動を開始したのだから、これまでのケジメとしても投げ出さないようにしなくては。

減ったのは家に居る時間と、パソコンで遊んでいる時間だけではない。家から学校、街までの移動も減った。つまり外に出る時間が激減した。すなわち遭遇することが滅多になくなったわけだ。YOUには悪いけど、僕にだってもう時間がない。しばらくは常日頃から行われている葬儀に頼らせてもらおう。

そんな風に僕が二足目のわらじを脱いでいても、YOUは特に何も言っただけだった。何らかの形で僕を通じて彼が認識できないのなら、シェイドの発生以外、何も起こっていないのと同じなのだろう。

……申し訳ないが、うまいサボり方を覚えさせてもらいました。

なおせっかく時間を取られることがなくなったとはいえ卒論は情

報量が膨大で、一向にカタがつかない。まとめ終えた資料は紙袋に押し込んで机から撤去していつているのだが山が小さくなるだとか、スペースが空いていくようにはまるで見えない。果てしない。

頭が疲れてストレスが溜まってきたときは、最近は出番のないレクイエムを取り出してぼんやり眺めてみる。確かにとんでもない凶器ではあるが、その造形の美しさは、どこか心を落ち着かせてくれる。

武器オタクじゃない僕でもわかる。かなりの逸品だ。

派手過ぎない金色の長い柄には、全然読めないが文字のような紋が黒色で描かれ、僕の手にとてもしつくりと馴染む。

幅広の刃は美しく滑らかな弧を描き、鋭い刃先はぞっとするほど冷たく輝く。

見惚れて、時間を忘れてしまったことがあるくらいだ。

……他の誰にも見ることでできないこの大鎌を手に行けることを、誇らしくすら思うほど。

そういえばレクイエムにちょっと変化が出た。それまで純白と言うのが相応しかったその刃が、先端辺りがほんのり紅くなってきた。ひょっとして、導いてきたことで業の力が貯まってきたのだろうか。この刃が紅く染まりきったら終了なのかな。

でもこのペースだと、両方とも相当時間がかかる気がするんです

けど……

YOUに何の文句も言われることなく、自分の本業に力を入れて何週間か過ぎた。その間、めったとない外に出る機会にも対象と遭遇することが一度だけあった。その時はちゃんと自分の副業を果たした。

駅前で屯^{たむろ}していた男女が三人。三人とも待ち合わせに使っているピカピカの時計のオブジェに映っていない……。そりゃあため息の一つも出るというものだ。今何時だっけ、とふと見ただけなのに。仕方ないのでちょっと離れたところでその三人組を監視していた。10分くらい遅れて、もう一人来た。会話の内容は分からないが、どうやら四人とも初対面のようなだった。

……オフ会か。

四人ともにここにこと笑顔があふれていた。結構ネットで親しい間柄なんだろうな。そう言えばネットゲのオフ会に行ったことないな。最近やってないし、もし誘われるようだったら行ってみてもいいかもしれない。

だけどこんな風に折角友達と出会ったと言うのに、まさかすぐに別れることになるなんて、思ってもいないんだろう。運命って怖いものだ。

その四人は車で移動してしまったから僕では追いかけれなかった

た。以前のようにYOUが教えてくれ、僕の住む町のすぐ近くの丘の林の中でその車を見つけた。

……僕はきつと事故で亡くなるんだろうと思っていた。

僕はとんでもない楽道家だ。あんな笑顔だった人達が、こんなことを考えていたものなのか。確かに言われてみればよく聞く話ではある。反省しながらエンジンの止められた車の中を覗き込んだ。

……ひどいものだった。

運転手が一人と、後部座席に三人。四人とも死んでいる。

睡眠薬がはいっていたのだろうか。茶色い遮光の瓶が助手席に転がっているのが見えた。七輪が助手席の足元においてあった。

……以前よく聞いた、練炭と七輪を使った、例の集団自殺というやつか。

まさかこんなに近くで起きるなんて。

三人はそれこそ本当に寝ているうちに死亡した、というような感じだった。だが、一人は……

こんな死に方は絶対に御免だ。

途中で目が覚め、脱出しようにも麻痺した身体では叶わず、苦しむだけ苦しんだのだろう。ものすごい苦悶の表情を残したその様子は、この世のものとは思えなかった。

…… 本当にはかけている。

その一人の魂だけは、他の三人のものとは違った。すんなりと身体から引き離れなれず吸い上げるまで相当長い時間が必要だったうえに、その間何度もレクイエムに抵抗があった。レクイエムから離れようとする感覚とともに、ビクビクと震える。魚釣りにも似ているが、魚釣りに感じるようなちよつとした爽快感はまったくない。おぞましく、すぐにでも手を離したくなるような感触。

あのシェイドの男の子に近かった。……あの時は必死だったから自分の感覚に気を回している余裕なんてなかったが、今思えばそう
だ。きっと、この人もいずれそうになっていたに違いない。

……

こんなことになるなんて思っていなかったんだろう。

死ぬ、と決意したのに手段が間違っていた。それに気がついたというのに、もはや引き返すことを許さない運命。そして再び胸に湧いたはずの生への執着すら断たれた。いくら想像しても、それは絶した世界だろう。どうやったらこんな恐ろしい面を残せるんだ。

…… 絶対に御免だ。

久々に目を背けなくなる現場にあたって自分のしなくてはいけないことの恐ろしさ、重要さを実感したが、申し訳ないが自分の本来しなくてはならないことの前には風前の塵のごとく、すぐに頭の中

から飛んでいつてしまった。

……全然終わりそうもない。日本人として保証されているはずの、健康で文化的な最低限の生活を送れているのか疑問が残る日々のなか、自分の出来るだけの努力を尽くしやっっているはずなのだが。とつてもヤバイ。もう七月も終わろうというのに。方向転換した時期が悪すぎた。

そういうわけで前にも増して屋外に出ることが無くなった。連日夜はゼミの備蓄のカップ麺を食べ、終電、または始発で帰るという残念な生活だ。

唯一生活の質を保っているのは、昼食として母に頼んで作ってもらっているお弁当。

ごめんね、お母さん。面倒ばっかりかけてしまつて。

でも、これがなかったらホント、僕は近いうちに倒れてしまっていると思います。

「お、裕也！ 俺よ、ホントに就職決まつたぜ！ 念願の自動車会社！ いいだろ！ ちいっと遠いトコの支社だけどな！ お前よ、まだ決まんないって？ 事故以来ちよつとはマジメになったのはいいけどよ、遅いんだよ！ ははははは。んじゃ、また電話するわ」

高校からの悪友、高志からの留守電を聞いて焦る。就職活動を切つてまで卒論を行つてはいるが、多分終わってから就活しても就職先は無い。

でももう三カ月くらい前に就職活動に訪れた会社から、ついにた

どり着いた三次面接の結果の返答がなかったりもするから、希望が完全に失われているわけではない。

でも…… このままだとまず就職浪人だろうな……。

他の事に気を回してられない状況に追い込まれていくのが痛いほど感じられる。

そんな時に限ってどうしてこんな……

明日までに今できている分を先生に目を通してもらわなければいけない。僕がこれでいいと思っていても他の誰かからみたらもつとよい方向に変えることができるかもしれないし、不要なところ、詰めた方がいいところもわかる。それに何より、もっと早く完成させることができるだろう。

そう思って自分で先生に期日を指定してしまっていたものだから、変えるわけにもいかない。明日は土曜だから、本当なら先生は休み。そこを無理して来てもらうのだ。やらないといけない。

前日徹夜だったから始発で家に戻って、寝ておきたらもう夕方。当然慌てる。早めに夕飯を食べて、日も暮れる頃、またゼミに行くために電車に乗った。

……

……そう、電車に乗った。こんな時間に。

いやな感じがした。見たくないから乗ったらすぐに乗車口の脇に立ち、目を伏せた。自分の降りる駅までそうしているつもりだった。いつもならその駅で開くはずの扉の脇にいたのだが、追い越し列車の通過待ちがあつたらしく、反対側の扉が開いた。慌てて目を開いて、一緒に降りていく人たちの群れとともに移動する。

降りた直後だった。目の前は、アクリル張りの待合所。この時間、いい具合に半透明の鏡状になっていて、ある女性はそこを過ぎ去る一瞬で髪を直し、ある男性は歩きながらネクタイの曲がりを直していく。

しまった、と思うがすでに遅かった。

降りる僕の前を通過した一人の女の子が立ち止まり、待合室の方を見てやはり髪に手をやった。多分まだ高校生だろう。私服姿でちよっぴりオシャレをしたかわいい子だった。

少し短めのきれいな茶色の髪に、つばのない白い帽子が印象的だ。

僕の通う大学のあるこの町には遊ぶところは多くない。きっと僕らがよく遊びに行っていた街へ行くのだろう。友達、または彼氏との待ち合わせがあつてこの駅で降りたのだろう。

……だが、そこには誰も居ない。

皆が避けていくのだが、僕の目には何も無いところで人の流れがふたつに分かれているようにしか見えない。

まさか最後の最後でこんな……

だけど、申し訳ないが僕では彼女の運命を変えることはできない。そうなるのは避けられない。僕にだって時間がない。今この時間からその時が来るのを待っていたとしたら、明日までに仕上がるものも仕上がらない。

きっとYOUもうるさいだろう。だけどすべてを死神が行わなくても、普通に執り行われる葬儀でだって十分な役割を果たしているんだ。

今日は見過ごしちゃってまらねっ。

.....

この日の事を思い出す度、いつも僕はこう思う。

僕にも運命を分かつ道があつたと言ふのなら、きっとこの事だろう。

「あの日あの時こうしておけば」

そんな戯言は現実の前では力を持たず、僕の心を挽き潰し続ける。僕は、結局何もしてあげることができなかった。

だから、今も思ってしまう。

あの時僕が動いていたなら、どうなっていたんだろう……と。

「淵に眠る」(前書き)

今回は5000字オーバーの長文です。

「淵に眠る」

……

……こんなに後ろめたい気持ちになるのは初めてだ。

ゼミ室について資料の山の谷間で自分のパソコンを開き、現在進行している分をまとめはじめた。なかなか集中できないまま時間だけが過ぎていく。声をかけられても生返事しかできていない。

少しだけ残っていた学生もぼちぼちと帰っていき、まもなく僕一人になった。いつもの光景だ。

「裕也…… 裕也……」

YOUの声だ。電車を降りてからしばらく頭痛と戦いながら無視を決め込んでいたら、とうとう向こうが命令するのを諦めた。今の今までずっと黙ったままだったのだが、とうとう僕への催促が再開したようだ。だがあえて反応せず、聞こえていないふりをした。

「裕也…… 何故行かぬ。知ったのだろっ。ならば、行かねばなるまい」

さっきと違い、僕と対話するつもりらしい。こっちがどれだけYOUに聞きたいことがあったとしても、そっちはそれに応えなかつ

たじゃないか。確かにY O Uの体を譲り受け、生かしてもらった恩はある。だけどそれとこれとは別問題だ。そっちの都合だけで僕の体を利用しようなんて御免だ。

そもそも僕がしたと言う「契約」は案外ルーズな物のようで、レクイエムを元通りにするために死神の仕事を代わりに執行すれば十分なんだ。期限も特に無く、最終的にレクイエムさえ戻れば構わない契約。

もちろん僕としてもこんな怖くて気味の悪い仕事は早く終わらせて解放されたい。だけど並行して僕がなくてはいけないことも当然あるわけで、どちらを優先するかは裁量は特に問われていない。

……だったら、今はこっちをやらせてくれ。

でも言ったところで向こうの主張が曲がるわけがなく、押し問答を繰り返すだけ。

なので僕は聞こえない素振りを徹底した。

「聞こえぬはずが無かろう…… お前の意識に直接語りかけているのだ。何故、行かぬ」

それでも無視を続けた。折れたら出来ない。

「お前が判別できるものは特別なものだけなのだ。放置しておけぬ者ばかりなのだ。救いを求める悲しき魂なのだ」

……そう言われると、彼の声を無視していいものか、わからなくなる。

いや、結局こんな仕事を引き受けるような、お人好しの僕の心を揺るがせることが目的に違いない。

「お前はしなくてはならぬ。あの魂を導かねばいずれシェイドに……」

「……わかつてる、わかつてる！ だから、今だって落ち着かないままなんだ！ でも…… 僕にだって、やらなくちゃいけないことがあるんだ！ もともと曲げられないんだろ！？ それに、みんなだってやってくれるじゃないか！ どうして目に付くものすべてを、僕らだけでやらないといけないんだ！」

とうとう爆発だ。ゼミ室には誰も居なくて良かった。YOUが落ち着け、と諭すように穏やかに語りかけるが、ここまで邪魔されて黙っていられるほど心は寛くない。

「もし僕じゃなきゃできないことなら、明日にしてくれよ！ YOUNならわかるんだろ、何処にいるのかが！ 明日だっていいじゃないか！」

「……」

「だから、明日にしろよ！ 今日はどうしてもしなくちゃいけないんだ！」

そう怒鳴ると、YOUの声はしなくなった。レクイエムと一緒に僕の中に完全に住み着いているのだから居なくなったわけではない。叫んだ後咎められるかと思っていたが、それもない。彼なりに一応理解してくれたのだろうか。

落ち着かない気持ちのままだったが、続けなくてはいけない。部屋にある音はかちゃかちゃと僕がキーボードを叩く音とマウスをクリックする音、がさがさと資料を漁る音、そして時々ふう、と僕がつく溜め息だけ。

明日行く。明日行くから。

いつもYOUが教えてくれていた。たとえ見失っても方角と距離さえわかればどれだけ時間がかかろうとも行つてあげるから。だから……

……

だんだん夜も更け、気がつけば三時を回っている。

「もうちょっとやったら少し寝ようかな……」

先生には昼、見せることになっている。大分目処が立ってきたので、ちよつと休憩しようか。

左の掌から出た柄を握った。その時だ。

「うつ……わ」

すごい耳鳴り。頭が痛くなるほどの。抜きかけたレクイエムから手を離すと耳鳴りが治まった。

もう一度握ってみた。一瞬耳鳴りがしたが、すぐ治まった。

……今度は泣き声が聞こえる。

「痛い…… 痛い…… なんて…… どうして……」

エコーがかかったように、部屋中に響いている。一体どこから……いや違う。これが直接響いているのは僕の頭の中？ 静かなのに、ものすごい音量で頭が割れそうだ。

「許せない…… 許せない…… ゆるサナイ……」

心を引き裂くかのような、悲痛な声。たまらずレクイエムから手を離れた僕は、冷や汗をかき息が乱れていた。左手から飛び出していた金色の柄に描かれた黒色の紋が、ゆっくりと穏やかに赤色に点滅している。

……いかにもマズイ状況を示していた。

「急げ…… 異常だ、早過ぎる……」

YOUの声がする。この声の感じからして、シェイドが出たのだろう。シェイドが発生したというのなら、僕にとっても話は別だ。放っておいたら大変なことになる。

だが、行く手段が無い。徒歩や自転車だったら相当遠い可能性もある。……戻ってきて続きをやらないといけないし。車……いや、せめて原付なら……

！ そうだ、高志の！

あいつは特に一人暮らしする必要のない距離に実家があるのにもかかわらず、三年のときから大学に近いところにある安アパートに住んでいる。都合のいいことに原付も持っている。あれを借りよう！

……

…

深夜も深夜にたたき起こされ、相当機嫌が悪かっただろう。申し訳ない。それにうまく説明できず、ただ慌てた状態だけの僕を見て腹が立っただろう。だけど、そんな慌てた僕を見て特に何も聞かず鍵を渡してくれたことに感謝だ。本当に高校の時からいざとなつた時僕が頼れる友達はいっただけ。ありがたいことだ。

高志の原付に乗って、YOUの声に従い目的の場所をめざした。結構遠い。原付で少々飛ばして20分はかかった。ずいぶん広い範囲を感知している。力を無くしたと言つてなおこれだ。

……もしかしたらYOUはとてつもない死神なのではないか。

場所は林に囲まれた大きな用水池だった。林の脇道に原付を止めて鍵をかけ、池に近づく。前の反省を生かしてあらかじめレクイエムを手にし前に進む。風にざわついていた木々の葉擦れの音がなくなり、あの独特の感覚が僕の身を包む。

池に近付いていくが特に攻撃されない。林の中は死角が多いのでどのタイミングで攻撃されてもいいように、頭から指先、爪先まで

すべての感覚を集中させる。かなりの精神力を持つていかれるが、あの男の子の例を考えればやり過ぎと言うことは無い。

拍子抜けするほど何も無いまま林を抜け、岸边にまで来れてしまった。池の中心に白っぽく光るものが浮かんでいる。あれが本体だろう。いつまでたっても攻撃される様子はないので、その辺にあった小石をつかんで中心に向かって軽く投げてみた。

ちゃぼん、と音を立てて小石は水面に落ち、波紋を作った。……何も起きない。

思い切って波際に立ち、水面を覗いた。レクイエムを持った僕が映る。その途端、池がざわついた。

突然水面が立ち上がり、僕の眼前を塞いだ。そしてそれが勢いよく倒れこむ。透明な壁を反射的に切り裂くと、水風船のようにぱしゅんとはじけた。はじけた時に溢れた水が僕を直撃する。ダメージにはならないが結構な水量で押し流されてしまった。

シェイドの影響を受けた物はやはりレクイエムの刃で斬れる。以前あの家の壁が切り裂けたのも、男の子が根を張って家屋全体に影響を及ぼしていたからだ。頭を振って、びしょ濡れになった髪をかき上げて立ち上がる。池のほうを見ると、水面からモヤシのようなものが何本も生えていた。頭の部分は巨大な水球で、それが池と細い茎でつながっている。それがスイングしてきた。一撃でも直撃したら危ないことがすぐにわかる。だがこれもまるで風船のようで、レクイエムの鋭い先端、柄尻を強くぶつけると破裂する。その度に僕も押し流されてしまう。お互いにダメージはないがどうにも埒が明かない。

池の岸は主から離れた水でグシャグシャにぬかるんでいた。そこ

に池から一本茎が生え突き刺さる。直後ぬかるみが盛り上がりハエトリグサのような、虫の口のような形となってこちらに向かって来た。結構素早い。

後ろに飛んでかわすのと同時にレクイエムを薙ぐ。鮮やかに半分口に口を切り裂かれた泥細工は風船のようににはじけることなく、断面が合わさり元通りになると再び僕に襲いかかってきた。走って林の木の陰に逃げ込んだが、その木に噛み付きバキバキと音を立てて噛み碎いてしまった。こんなものに捕まったらひとたまりもない。泥細工が木をまるであられのように噛み碎いている間に僕は林の中を通りながら様子を伺った。

……出来上がった後も泥細工は池と一本の水の茎でつながっている。なんとなく理解し、泥細工の背後に飛び出し連結を切った。次の瞬間茎は池に吸い込まれていき泥細工はその場で崩れ落ちた。だが再び水の茎が生え、ぬかるみからいろいろと創造していく。やはり本体のいる池が問題だ。

今度は棘付きの球と、滑らかな輪が造られた。さつきから襲ってくる物はどれも単純な形だが発想は面白い。本体は生前どんな人だったんだろう。

さつきの水球のように遠心力を使ってスパイクボールを振り回す。勢いがついたところで僕の方に向かって放たれた。泥細工の操作は池との連結が必要。なのであの球で殴りつけてくると決めつけていた僕は反応が遅れた。

速い。避けられない。

だが向こうが扱いに慣れていないからか、僕に当たることなく脇の木にぶつかった。棘は木に深々と突き刺さり、重たい泥の塊を勢いよくぶつけられた木は折れてしまっている。形状を保っていたのはわずかな時間で、すぐに大量の土砂となって崩れ落ちた。相変わ

らずひとたまりもない。冷や汗をかきながら当たらなかったことに胸をなでおろしていると、高速回転した輪が飛んできた。思わずしゃがんで避ける。そのまま輪っかは飛んでいき、直線上にあった木を切断して崩れた。あの輪は巨大なチャクラムだ。

冗談じゃない。どの攻撃も一撃で致命傷だ。しかもどうやってら池の真ん中に居る本体に近づけるのかすらわからない。それに攻撃方法は無限で多彩。今後も僕の予測のつかない何かをしてくるだろう。このままでは体力を消耗し、いつか避けきれなくなって攻撃を受けてしまう。

あの触手と違ってかなり手強い。

「間合いを取るな、近づけ。大振りのあれらは接近戦では役に立たん」

有効と認識したのだろう。茎が再びボールと輪っかを造りはじめた時、YOUが話しかけてきた。YOUはずっとこんなのを相手にしてきているんだ。彼の指示に従った方がいい。走って近寄る。僕の接近に合わせてスパイクボールが振り回されたが、十分なスピードが乗っていない。放たれる前に茎を切断された球体は明後日の方向に飛んでいき、空中で溶けるように崩れ池の水を淀ませた。輪も回転を始めたところで切断するとそのまま落下し、ぬかるみと区別できなくなった。

対処法を得て一安心していたが、またしても池から茎が何本も生えてきて泥細工を造りはじめた。だが造らせる前に茎を切断したら何と言っこともない。

問題はどうかやって本体を捉えるか、だ。茎を切り伏せながら考える。

ちつとも妙案が浮かばない。素人の僕がレクイエムを投げつけて見事に本体に命中！　なんてご都合主義な展開は現実には期待できるはずがない。単純なボールだって多分難しい。よりによってレクイエムは鎌。それも大きな、大きな鎌。真っ直ぐ飛んだと仮定しても巧く刺さるとは限らず、投げた後素手になってしまふ僕の危険性が極めて高い。泳いで行って斬りつけるなんてことも時間的に無理だ。接近する間にやられてしまふ。そもそも水そのものが今回の敵で、中に入ろうものならどうなってしまうか分かったものではない。YOUが薦めたとしても却下だ。飛び道具は無いのか、飛び道具は

伸びては斬られて、また伸びて。
斬っては生えてまた切って。

これを延々と繰り返していく。レクイエムを振ること自体に体力を奪われないので疲労は全くないのだが、単純作業を反復して行い続けてきたことで頭の中に靄もやがかかったような感じがしてきた。

突然僕の足元から何か現れたと思った次の瞬間、僕は鳥籠のようなものの中にいた。思考を奪われていたが水面の様子には細心の注意を払っていたつもりだ。池から伸びる腕はすべて残らず切り落としてきた。何かを造り出すような素振りは無かったはずだ。

それに用心してぬかるみから離れてレクイエムを振っていた。岸からも離れているのにいつの間にか足元は水気を含み、檻は僕の立っていたぬかるみから造られている。その檻には池の水がよく見なくては見分らないくらいの薄い膜となって繋がっている。

「いかん！　すぐ出る！」

当然だ。YOUの叫びに応じて目の前の格子を切り取り、蹴倒す。作った窓から外に飛び出した。

だが、少し遅かった。

鳥籠の中に向かって、格子から無数の針が伸びる。逃げ出すのが遅れた左足に何本か突き刺さった。針自体は太くなく、そして脆かった。外に飛び出した勢いで刺さった針は折れ、そして崩れた。

痛い。すごく痛い。血は流れ、僕のはいていた白いジーンズが染まっていく。

悲鳴を上げ、足を押さえている時気がついた。僕が倒れ、のた打ち回っているのは水面だ。ぶよぶよとしていて、ウォーターベッドの上に転がっているような感じに似ている。

何だ、簡単に本体に近づけるじゃないか……。

激痛と、ああだこうだと思案していたことが全くの無駄だったと言っ事実には自嘲の笑いが漏れる。

無理をすれば立てないことはない。あの時の骨折に比べたらまだいける。痛いのを堪え、歯を食いしばる。左足を庇って立ち上がり、本体の眠る池の中央を目指した。

「涙」

下っ腹に力を込め、無意識だと荒くなる呼吸を精一杯抑え、大きく呼吸をしながら前に進む。足を引き摺りながらも、レクイエムを杖に使うことは出来ない。今立っている場所は水の上。レクイエムの力でこのシェイドの力を打ち崩したらどうなるか、何となく想像がつく。まだ導く前に相手の腹の中にもしも落ちてしまうような事になれば、それは僕の命が尽きる事を意味している。

僕が近づく間中ずっと、水面から次々に現れ襲いくる水の塊。数は多かったが、そのどれもが泥細工に比べたらとても脆い。レクイエムで簡単に凌げる。本体に近づくのは容易だ。死に物狂いのその場しのぎの行動なのか、それとも眠っている間は単純な自動防御くらいしかできないのか、それは分からない。僕だったら距離はあっても絶対にさっきの泥細工をメインに使う。確かに水面から現れる水塊が瞬間的に形を成すのに比べ、泥細工自体は作り出すまでに時間がかかっている。だが効果を考えればどう考えても後者の方が強力だ。

……それに足を負傷した今、背後からあの泥細工に襲われたらひとたまりもない。幸運だ。

中央の水面直下に浮かんでいる本体は裸にされた女性だ。顔を下にして、膝を抱えて浮かんでいる。背中しか見えないため体つきから男性ではないと推察。その背中には皮膚の裂けた傷が無数にあった。それも新しい。生きている間に、絶命する直前につけられたのだろう。

あの男の子の焼け爛れた右半身。あれも死亡する直前に負った火傷だと思う。それがそのままあの子の魂の形になったものに違いない。

……とても痛々しい。

このシェイドはまだ眠っている。目覚める前からこれほどの力を持ったシェイドがもし目覚めてしまったら、僕には手の打ちようがない。かつて言われたように、躊躇うことなく貫くしかない。左足の踏ん張りが利かないが、レクイエムを左肩に担ぐように振りかぶった時だった。

ゴムのような水面が激しく波打つ。ほぼ右足のみで体を支えている僕は為す術なく膝が折れ、尻餅についてしまった。次の瞬間水面から生えた鞭に払われ、岸の方に弾き飛ばされた。ゴムのような水面で何度かバウンドしたおかげで、払われた勢いのまま陸地に叩きつけられることはなかったのは幸運だろう。

再び激痛が走る足を押さえて身体を起こし、池の方へ頭を向ける。ちょうど本体の女性が膝を抱えたまま浮かび上がり、彼女を覆っていた水の膜を破って出てきたところだった。轟音を立てて池から水が巻き上げられ、再び彼女を包んでいく。

大量の水が押し固められていく。荒れる景色の中でよく見えないが、巨大な水球の中で女性は手足を伸ばした。押し固められて体積を小さくしていく水は甲冑になり、四肢と胴を覆った。月を背にした彼女の身体の周辺には昔話の挿絵でみたことがあるような羽衣が漂っている。

……きれいだった。言葉を失うほどに。

だが、月明かりを時々反射し輝く、透き通った鎧の奥に見える彼女の腹部には痛々しいほどの大穴が開き、臓器がうごめいていた。生前にこれほどの傷を付けられただなんて…… 一体何があったと言うんだ。ここまでの損壊を受け、歪むなと言う方がどうかしている。狂ってしまったのは本当に彼女の方なのだろうか。

「なるほど、やはりブレイズか…… 変性も早く、著しく強力なわけだ。裕也、逃げるぞ。今勝てるはずがない。この者を導くことは諦める」

言われなくたってすぐにでもその場を去らなくてはいけないことぐらいわかる。これは非常に危険な存在だ。理屈じゃない。何か、こっ…… 腹の底から込み上げてくるような、そんな絶対的な畏怖、どうにかできるものじゃない。

だけど、何かが胸に引っかかり立ち去ることができない。何より、その美しさに目を奪われてしまっていた。

シェイドでなくブレイズと呼ばれたそれが目を開く。以前見たシェイドの男の子とは異なり、瞳が金色だった。

色彩は違うが、その目にわずかに見覚えがある。

そしてすこし短めの、きれいな茶色の髪。

……

…

僕の血の気が一気に引く。

気がついた。これは、さっき駅で見た少女だ。

たったの数時間の間にあれほどの酷い傷を付けられ、そして死神によって導かれるまでさまよい続ける悲劇の存在になってしまった。

僕が見捨てたがために……？ 違う、見捨てたんじゃ…… ない

……

少女が口をわずかに開く。

許サナイ…… 許サナイ……

才前モ私ヲ殺スノカ……？ アイツノヨウニ私ヲ……

ナラ、ソノ前ニ殺シテヤル……

静かに呟くようなのに、この領域すべてに響き渡る声。
僕があまりのプレッシャーの前に、つばを飲み込んだ次の瞬間だった。

一瞬で姿を見失った。

だが、背後に何かがいる。反射的にレクイエムの柄で防御したが、ものすごい力で吹き飛ばされた。今までの泥細工や水の塊による攻

撃とは比較にならない。左足が無傷だったとしても堪えようの無い力だ。

小さく呻き、倒れ伏した状態で僕がさっきまで立っていただろうところを見る。そこには甲冑を纏う少女がいた。動いたことを全く視認できなかった。そして彼女の後ろを見て愕然とした。

泥細工が噛み砕いたり、スパイクボールが命中したり、チャクラムに切断されたりした木々があるのはこの場所じゃない。なのに木々の何本かがへし折れている。その木々の辺りに漂うゆらりとした物が彼女のもとに戻る。

羽衣による一撃。僕を吹き飛ばしただけでなく、そのまま振りぬいた羽衣は後ろに立っていた木々を割り箸を折るかのように無造作に、何でもないかのように碎き散らした。

……殺される。

絶望的なほど圧倒的過ぎる力の差。もしかしたら完全な死神の力を持っているYOUなら勝てるのかもしれない。だけど僕は人間だ。それにレクイエムだって力を失い、失われた力を取り戻す作業をしている段階だ。どうやったってこんな化け物に勝てるはずがない。

あまりに軽々と吹き飛ばしてしまった僕を見失ったブレイズはしばらくきよろきよろとしていた。この隙にこの場から逃げ出そう。たくさんの針に貫かれた左足が痛み、身体も恐怖で震えているから立ち上がれない。声も上げられない。

……どちらかと言えば、都合がいい。このまま見つからなければ……。林の方に這いつくばったまま進んでいく。

だが結局見つかった。彼女と目が合い僕が息を呑んだ時には、もう目の前にいた。

……どうしようもない。抗うこともできず、首をつかまれ吊り上げられた。相手は僕よりも小さな女の子の姿だというのに、僕の足が地面についていないほど高々と。そして放り捨てられた。受け身を取ることもなんて出来ない僕は、頭を打たないようにと両手を後頭部に組んで頭を起こし、背中に入力して衝撃に備える。

ざばん！ と大きい音と共に全身を冷感が包む。幸い池の浅いところへ落下した。強いダメージの無かった僕が息を吸おうと水から身体を起こした時にはもう隣にいて胸を踏みつけられた。速過ぎる顔はまた水の中だ。息が出来ない。必死にもがくが、だめだ。レクイエムも最初の一撃の時に僕の両手から離れ、彼方に転がっている。

「呼べ！」

YOUが端的に叫ぶ。何と呼ぶのか問う余裕はない。

「レクイエム！」

右腕を上げ、水中で必死に声を出す。胸を押し付ける力が急に緩んで身体を起こせた次の瞬間、右手がしつくりと馴染むものを掴んだ。飛んで戻ってきたのか、もう何でもありだな。

レクイエムを杖にし、水中から身体を引き起こし、咳き込みながら息をした。絶体絶命は逃れたが、いつまたその瞬間が来るかわからない。

逃げなくては……。だがもう、逃げることはできない。

背中を見せたらその瞬間にきつともう死んでいる。

接近を許さないようにしてなんとかこのブレイズの作っている領域から逃げなくては。レクイエムを両手に握り、懸命に意識を保とうとしていなければそのまま倒れてしまいそうな緊張感の中、相手から目を離さないようにずっと気を張り、少しずつ後ろの林へとにじり寄っていく。

……様子が変だ。

さっきまでなら僕がわずかでも動こうものなら一瞬で詰め寄られ、とてつもない力で僕を攻撃してきたはずだ。

それが今は僕がレクイエムを構え気を張っているのに、何かもの言いたげな目をして僕をみているだけだった。そのことが気になり、構えと意識を緩めることはしなかったが、警戒心に満ち溢れていただろう表情だけ緩めて彼女の目を見た。

……泣いている。

ドウシテ…… ドウシテ殺ソウトスルノ……

何モシテナイ…… 何モシナカタノニ……

おかしい。彼女は僕を殺すと宣言した。それに十分すぎる程の力がある。なのに僕にわずかではあるが慈悲をかけている。まるで、何もするな、と脅しているだけ。シェイド（いやブレイズか）は理性を失い狂暴化した、生者に害のある存在じゃなかったのか？

ナンデミンナ、私ヲ殺スノ…？

死ニタクナイヨ…… 死ニタクナカタヨ……

モウ信ジラレナイ… ミンナ… モウ、ミンナ死ンデシマエバ良
イノニ……

……

この子は一体どんな地獄を見たんだ。

僕は…… それを……

「何が…… あつたんだ？」

あれだけの力を持つてさっきまで僕を殺そうとしていた存在が、とても弱いものに見える。僕はたまらず聞いていた。僕が聞く資格を持っているはずがない。だけど僕が何をしてしまったのか…… 知りたくない。だけど、彼女の声はまるで誰かに縋^{すが}り付きたい一心で、喉の奥から懸命に、懸命に出されているようにしか聞こえなかった。YOUがうるさいくらい僕に構えろと言ってくる。だけど僕はレクイエムをおろし、一步一步、恐ろしくてたまらなかったものに近づいていった。

……近付かずにはいられなかった。

ブレイズの少女は動かなかった。口だけが動いた。

裏切ラレタ…… 信ジテタノニ……

イツモアンナニ優シクテ…… 安心デキタノニ……

痛クテ……

痛クテ……

怖クテ……

怖クテ……

私ガ……

私ガ何ヲ……

モウ……

モウ信ジナイ……

僕の問いに答えた。コミュニケーションがとれると言うことだ。

「意思が保たれている…… 珍しいな。戦わなくて済むかもしれないが油断するな、一つ間違えば死ぬぞ」

言っている内容は怖いけど、YOUが少しだけ安心したように言っただ。それこそ珍しい。

ところがレクイエムを構えていないのに、さらに一歩近付くと彼女の表情が険しくなり、雲行きがにわかになんげなりました。僕もそれに反応して一歩退いた。

彼女が睨んでいるのは僕ではない。レクイエムだ。

……なるほど。暴力を振るわれるかもしれないことに怯え、過剰なまでに反応しているのか。確証は無いがこのまま対峙しているよりも危険は無いだろう。僕はレクイエムを消した。YOUが頭の中でずっと叫んでいる。

……

だけど、ほら、大丈夫だ。

途端に目つきが戻っているだろうか？ 僕が歩み寄るのを許しているじゃないか。

「ゆーちゃん」

「……少し早かったかな」

つばのない白い帽子を被った、少し短めの茶色の髪をした少女がつぶやく。左手につけた小さな腕時計に目をやって、その後きよろきよろとあたりを見渡した。

「ひさしぶりだもんね。それにちょっときめてこいって。あはは、どこに行くのかな」

「う。独り言が少し多い。それだけ待ち人に会えるのがうれしいのだから。」

「はい、おっはよ!」
「うわあっ!」

背後から突然肩を叩かれ、少女は思わず背筋をのばした。

「感心感心。時間通り……んー、ちょっと早めの到着ごくろう」

少女の肩を叩いたのは背の高い女性だった。日本の平均的な成人男性と見比べても遜色ない。もしかしたら、彼女の方が高いかもしれない。

「お、おおお驚かさないでくださいよ、声裏返っちゃったし！
……でも来たばかりなのによくわかりましたね」

「ゆーちゃん可愛いもん。オーラが違うからすぐわかるって」

ここは大きめの街の駅。日も落ちた今の時間、帰宅を急ぐ人々で
ごったがえしている。雑踏の中で長身の女性と会話している少女は
本当に嬉しそうな顔をしていた。

「って言うのは、ウ・ソ！ 三十分くらい前から居たんだよー、
降りてくる人がみーんな分かる位置にずっと。ゆーちゃんに会える
のが楽しみでさっ！ で、ゆーちゃんが出てきたのを見つけてこっ
そり後ろに回ったってわけ」

長い髪をなびかせ明るく笑う。すらつとした長身に、比較的小さ
な顔。いわゆるモデル体型の女性だった。美女と美少女が戯れるそ
の絵に、行き交う人々の視線がよく向けられていく。

「えー…… 嘘ですか……」

「勘ねない勘ねない。可愛いって所は嘘じゃないから！」

そう言っ自分よりもずっと背の低い少女を抱き寄せ、頭を撫で
た。二人とも笑顔だ。特に包まれている少女の方はとても穏やかに
嬉しそうで、再会を心から喜んでいることが見て取れる。

「ひあっ?!」

急に裏返った声を出し、長身の女性から離れる。両腕を交差し胸
部を防御。顔から火を噴かんばかりに真っ赤になってどう反応した
らいいのか分からず混乱しきっている。

「あれ？ 成長した？ 意外にあるね」

ワキワキと右手を動かし、なめるような眼つきで少女の体を見回す。

「それじゃ、まだちょっと早いから少しうろついてから行こっか」

女同士のじゃれあい程度のつもりなのだろう。そのまま何事も無かったかのように背の高い女性は少女の背後に回り、両肩に手をやって少女を押すようにして足を進めた。そんなことしなくてもちゃんと歩く、という少女の申し出を断り、しばらく押しながら歩いていく。

……背中を押す女の顔から、それまでの笑顔が消える。帽子を被った頭を見下ろし、不気味に口元をゆがめた。

……

だんだん明らかになっていく夜の街は昼間とは違った明かりに満たされて、闇と光のグラデーションが美しい。太陽の下では隠されていたイルミネーションに彩られるショーケースの世界に少女は目を惹かれた。

駅で待ち合わせた女性がよく行くと言うブティックに立ち寄り衣装を物色する。少女はその華麗さに心躍らせた。連れの女性は店員に、推薦などせず粗相しない限り好きに見せてやってほしいと頼み、気ままに彼女が商品を選んでいく姿に顔を綻ばせている。

少女が心惹かれた服を手に取り体に合わせ、笑顔で鏡を見ていた。そしてやはり気になったのだろう。四、五枚連なるタグの中から値札を探し出し、確認する。そして肩を落とした。彼女の使う店と比較することさえおこがましい。気を取り直して、ほかの商品を見ていく。服のほかにも少数だがショールや靴、プレスレットなども置かれている。しかしそのどれもが彼女の想像通りの価格。

「今のバイト、倍やったとしても無理……です」

そうぼやく少女の姿を見守っていた女性はけらけらと笑いながら近寄っていく。

「あたしだってそうそうはいはいと買わないわよ。結構吟味して、無理してんの、こっぴどく見えてもね」

苦笑いを浮かべる女性をみて少女も安心したような笑顔を見せた。

「……折角だから、何か買ってあげようか？」

その申し出に少女は嬉しそうに返事をした。しかしすぐに、それじゃあ、と物を選び出した女性を呼び止め、気持ちだけで嬉しい、と満面の笑顔で断った。

「私にはまだ早すぎるかな、って。また今度、もうちょっと大人になっただらお願い。ね」

そう甘える少女の笑顔に、助かった――と女性は正直な声を漏らした。

……

…

「ねね、ゆーちゃんってやっぱまだカレシいないの？」

店を出て唐突に尋ねる。突然の質問に少々驚いて、答えるまでにちょっと間が空いた。首を縦に振る。

「もったいないねえ」

並んで歩いていた女性は少女の前に出て、両手を少女の肩に乗せ、目を輝かせまじまじと少女の瞳を見つめて言った。

「どーだね、オジサンにその純潔を任せてみては！」

一瞬きよとした。その後どうしても押さえ切れなかったため、大きな声でお腹を抱えるようにして笑った。それを見て背の高い女性にもへら、と顔を崩した。

しばらく談笑しながら街中を歩く。道行く男に声をかけられる事があったが、長身の女性が適当にあしらひ追い払う。夜に私服姿で街を歩くことのない少女は、初めての経験に戸惑いながらもこの時

間を楽しんでいるようだった。

「はい、ここね。そろそろ人も入ってきてるから、より雰囲気あるんじゃないかな」

「……私、入っても大丈夫なんですか？」

「だーいじょうぶ大丈夫。平然としてたらわっかんないから。……それにオトコに連れられたゆーちゃんくらいのコ、結構来てるのよ？」

背の高い女性がそう案内したのは、あるビルの地下にある少し広いバーだった。今日はここで月に一、二度開かれる会員制のパーティーがあるのだと言う。奥のテーブルで向かい合わせて席についた。

「……大人なムードでしょ？」

素直に頷く。薄暗がりの屋内で、カウンターの後ろのグラスや瓶の並べられている棚が、周囲よりも少しだけ明るい照明に少し下から照らされて輝く。椅子もテーブルも店内の空気に相応しいように深い色をした木製の物に統一されていた。落ち着いた大人の雰囲気、好奇心あふれる目つきで店内を見渡していた。連れの女性が飲み物を注文する。少女が耳にしたことの無い名前。おそらくアルコールが入っているだろう。

「まだ私未成年ですけど……」

そんな少女の良識は却下され、そのまま注文が通された。却下されたがしばらくこねた。だがそれも根拠の無い自信で押し通されそうになる。そんな押し問答を繰り返しているうちに注文した物が届く。自分の前にあったコースターの上に置かれた。

「でも……」

最後の抵抗。

「いーって、いーって！　きれいでしょ？　飲んだことないっしょ？　黙ってたらわかんないって。だから、ほら！　ほっとんどジュースみたいなもんよ、おいしいから！」

強引に勧める。受け取るしかなかった。無色透明な底からだんだんと色を濃くしていく赤紫の層が鮮やかなカクテル。グラスに注がれたその美しい景色を前に、興味はあるのだがなかなか前に進めない。

「なーんてね。こんな可愛いコ、ここで酔わせてどーすんのよ。あたしが席外したりなんかしたらあつという間にこわーいお兄さん達の餌食&オカズにされちゃうって。だから、はいこっち」

そうおどけながら少女に自分の前に置かれたグラスを手渡す。だが、それも訝しんでしまい飲もうとしない。

「信用無いなー。マスター、これ入ってないって言うてあげてよ」

カウンター奥で客をもてなしているのはまだ若く、背の高い女性とほとんど変わらない年齢と思われる男性だった。彼がノンアルコールであることを保証する。多少苦味があるが、使っている柑橘類のソースに加えられた皮の風味だとのことだ。

連れの女性は最初に渡したカクテルのグラスの中身をすっかり飲み干していた。その姿と人当たりの良さそうなマスターの笑顔を見てある程度安心した少女も自分の分をおそろおそろ口にした。

……確かにこれはノンアルコールのソフトドリンク。それも爽さわや

かで、おいしい。わずかな苦味もこの程度なら気にならない。これならば遠慮は要らない。一気に飲みこしなかったが、グラスの半分くらいがやや渴いていた彼女の喉を潤していく。

「あ…… あれ？ ふらふら、して……」

そのままテーブルの上に突っ伏した。コースターに置いたグラスがコトンと軽く音を立てて倒れ、残っていた飲み物がテーブルに広がる。体を起こそうとしてもうまくいかない。戸惑いと混乱のみがそこにある。

「あ…… れ？」

そんな少女の様子を見て、向かいの席の者が口元を歪めながらゆっくりと立ち上がった。

「ようこそ。あたし主催のパーティーに……」

それを合図とするかのように、周囲の男女が全員立ち上がり彼女達を囲む。

少女の意識は深い沼に沈むかのように薄れていった。

「狂渦」(前書き)

この回には極めて具体的な暴力表現がございます。
ですがそれを推奨するものではないことをご理解ください。

また、この回から初めて読まれる方、そして暴力表現が苦手な方は読み進めないことをお勧めします。

「狂渦」

……

…

少女が目を覚ました。天井から吊り下げられた手枷てかせをはめられている。腕が痛み、顔をしかめた。長時間その姿勢で吊るされていたようだ。

「やっとお目覚めね」

「これ…… 一体？」

今の状態がまったく理解できずあたりを見渡す。場所は意識を失ったバーのようだ。

「何が……」

尋ねる少女を無視し、冷たい笑顔のまま背の高い女性は顎で一人の男に指示を出す。途端にその男は変ににやけた顔をして、少女の背後に回った。

「あ、あの…… 私どうして ぎっ！やあああああああああ
あああああ！！」

突然上がる悲鳴。そして少女の足元に広がる赤い跡。一瞬で呼吸

が荒れ、心拍が跳ね上がる。大きく見開かれた瞳からは涙があふれ出た。

背中が熱い。何が起きているのかまったく理解できない。

まるで息をすればするほど広がるかのような痛み。痛みをこらえ、答えと助けを求めて、彼女をここに連れてきた女性を見る。まるでこの瞬間を長年待ちわびたかのようないやらしい笑顔を浮かべていた。その表情に刹那痛みを忘れ、恐怖を覚えた少女は別の人間の顔を見る。全員同じ顔をしていた。

「だ、誰かおねが、——っ！！！」

再び激痛が走る。今回は一度では済まず、何度も何度も連続した。後ろを振り向こうとしても首がそれ以上まわらない。あまりの痛みから少女はまたしても意識を失ってしまった。

……

少女が意識を取り戻した時、まだ彼女の両手から枷は解かれていなかった。裂けた衣服が彼女の足元に散っている。十代の柔肌を隠し守るような状態のものは残っていない。背中から始まる赤い筋が

彼女の腰、腿、ふく脹脛と伝わって床に小さな小さな泉を作っていた。痺れきって感覚の無い腕はまるで別の生き物のようで、むしろ無い方が楽ではないかと感じていた。

そんな彼女の目の前で足を組んで椅子に腰かけているのは、彼女をここに連れてきた、幼いころから彼女が慕ってきた女。これは何かの悪い夢、そう信じたい。なのに背中走る激痛がそれを否定する。

憔悴しきった力の無い目で正面を見ると、椅子に腰かけたままの女が顎で指図する。それとともににやにやといやらしい笑みを浮かべた男が三人少女の前に立った。

「顔は傷つけないでちょうだい。あたしの大事な大事なゆーちゃんなんだから」

再び何をされるのか分からない恐怖に晒された少女の全身に緊張が走る。今ですら十分すぎる羞恥の極みにあると言うのに、ここから先に更なる凌辱を受けるのではないか。未だ経験したことの無い男を無理に受け入れさせられるだろう恐怖に身が竦み、すく恐れから見開いた両眼には大きく涙が蓄えられていた。

じりつ、と一人の男が近付く。反射的に後ろに下がろうとするが足も立たずブランコのように、きい、きいと鉄鎖を軋ませただけだった。わずかに後ろに流れた少女の体が再び前に戻って来るのに合わせ、男の右足が鞭のようにしなり少女の柔らかな腹部に突き刺さる。

ばすんっ！ と響く音が室内に満ちる。何をされたのかさっぱり理解できない少女は、自分の腹の底から酸味のある物が込み上げてくることを抑えられず、その場にまき散らした。荒い息が整う間もなく、次の一撃が襲う。二人の男に順繰りに何度も腹を蹴られるう

ちに彼女の腹部は赤く腫れ、一部に浅黒い痣を作った。

「やめて……っ も、う…… やめて……」

腹に力が入らず息を吐くことで精一杯の少女の声が聞き入られることは無く、彼女に降り注ぐ無慈悲は止まらない。その内に吐き出すものに血が混じるようになっていた。

「レイプの方がよっぽど良かったかしら？ でもそれはあたしが許さないわ、ゆーちゃんはあたしの物だからね」

聞こえてくる声は、連れてきた女の物だろうか。もはや少女はその判断も出来なかった。

突如背後から首に何かが巻き付いた。三人居た男の一人の太い腕だ。少女の細首に巻き付き、一気に締め上げる。裸絞めされた少女の喉からげうつ、と空気が絞り出された音が立ち、僅かな抵抗をすることもできない少女の意識は数秒と持たずに途切れてしまった。

……

…

「……っ、ううっ」

次に目を覚ました時は手枷を外され、床の上に転がされていた。

少しでも動けば襲ってくる、焼けるような背中痛み。そして息を吸うことも吐くことも困難にする腹の痣。それが夢でなかったことを実感させる。

着ていた服はすべて取り払われ、下着も下の物だけしか残されていない。蹂躪じゅうろうされきつた少女の小さな背中から作られた小さな赤い泉はまだ、大きさを少しずつ増していた。小さく声を上げることもできないほど弱ってしまっている。臍よりも上は傷を与えられておらず、とても美しい女性の体を衆目に晒していた。

徹底的に凌辱を刻み込まれた彼女を数人の男達が泉から起こし、両手を後ろで縛り上げた。一人が少女の細いウエストにバツクルの部分が大きなベルトを巻く。それを巻き終わると、彼女を支えていた男達は再び泉の上に少女を放り捨てた。

何が自分の身に起きているのか理解できないままの少女の目は泳ぎ続けていた。何かを求めるように。

だが彼女が求めている何かは決してこの空間の中には無いことを、悟っていた。

弱っていく彼女の呼吸。そして突然部屋全体に響き渡る破裂音。

少女は一瞬身体を反らせ、また動かなくなった。呼吸もほとんどしなくなった。

「きもちわるい……」

戻ってきた静寂の中で小さく一言だけ漏らした。彼女の目線の先にはピンク色をして表面に少し艶を持った、やわらかい管のようなものが広がっている。時々収縮し、蛇や蚯蚓みみずのようにくねくねと動く。それをたどると、出てきている元は彼女の腹部に大きくあいた

穴だった。泉が大きくなる速度を速めている。

絶望とも、失望ともつかない顔をした少女の正面に、背の高い女性が立つ。片膝について少女の顔を間近で見つめた。気味が悪いほど満足気だ。

「たすけ　て……」

「だーめ」

即答。

「おねが……　お姉　ちゃ　……」

瞳は虚ろになり、涙を浮かべている。もう、理解していた。

「な　……で　……　たし……　の……？」

何で私なの？　そう聞いたのだろうか。少女の目の前に居る少女の髪を撫で、少女の顔を優しく引き上げて唇を合わせていく。無抵抗の少女の唇を強く吸い、口腔に舌を這わせる。口の中に入ってきた異物感も、彼女にとってもうどうでも良くなっていた。

問われたことを理解したのか、それとももともと伝えるつもりだったのか、それは分からない。一通り少女を味わった女は再び満足そうな笑顔を見せて語り始めた。

「ねー、ゆーちゃん……　教えてあげよっか。どうしてあたしがゆーちゃん選んだか……」

それはね、あたしがゆーちゃんのこと、すごくすごく好きだから

よ。

ちいさな頃からあたしのことをお姉ちゃん、お姉ちゃんって言うて、何をするにもついてきてたよね。

可愛くて、可愛くて。……もう仕方なかった。

どんどん大きくなって行って、大人に近付いて行って。本当にあ
たし好みの女の子になって……

もったまらない…… 我慢できない……

大好きな物が、どんな声を上げるんだろう。

大好きな物が、どんな風に顔を歪めて苦しむんだろう。

どんな風に涙を流して、命乞いをするんだろう。

それを無下にした時、どんな顔を残すんだろう。

……

[illegible]

153

「狂渦」(後書き)

この回を最後まで読み切れなかった方もいらっしゃるかと思います。

作者にはこのような嗜好はありませんが、彼女が数時間のうちに世界を呪うに至るほどの絶望をわたしの想像が及ぶ限りに表させていただいたところ、このようになりました。

いつだって人の運命を捻じ曲げるのは生ける者の狂気。

このような愛の形なんか存在しない。歪んでいて、死神でも救うことができないのは生者の方ではないかと思うのです。

気分を害された方々には謝罪申し上げます。

「呪言」

大好きダッタ……ズット信ジテタ……ソレナノニ……

ドウシテ私ガコンナ目ニ遭ワナクチャイケナイノ……？

ドウシテ誰も止メナイノ……？

ドウシテ助けテクレナイノ……？

…

…

ドウシテ大好キダッタアノ人が、コンナ奴等ノ真ン中デ誉メラレ
テルノ……？

ドウシテ私ハ死ナクチャイケナイノ……？

ドウシテ、コイツラハ生キテルノ……？

許セナイ……

許サナイ……

スベテノ人ヲ許サナイ……！

……

ミンナが言ツテタ。パパモ、ママモ、先生モ。私ノ周りニイタ人全員ガ。

誰ニデモ、イツデモ優シクシナサイ。ソウスレバ誰モガ私が苦シイ時ニ助ケテクレル。

……デモ、誰モ助ケテナンカクレナカッタヨ？

全員ガ私ヲ見下ロシテ…… 痛クテ怖クテ泣イテイルノニ、誰一人手ヲ差シ伸ベテクレナイ……

みんな嘘ツイテタ…… 私ノ信ジテタ人達全員ガ……

信ジテタカラ…… コンナニ苦シイ……

ダッタラモウ信ジナイ……

信ジナイ……

なんてことだ。こんな娘が……　こんな……

……涙を流し続ける、ブレイズと呼ばれたシェイドの亜種の少女は
とても優しく、純粹。人を信じると言うことに、一片の疑いを持つ
ことも無く……。

とても優しく、純粹。そして人を、信じていた。

信じて、いたんだ……

声質はくぐもった、やや呻くかのようなものだ。あの男の子も同じ
ようだった。きつとこれはシェイドとなった者に共通するものな

のだろう。

彼女の声は人の心を怖^おじさせる。人の本能に訴える、この場に居てはいけないと言うサイン。だが、敵意のない彼女からは恐怖を感じることはまったくない。憐れみを覚えることはあれど、無下になんてできない。

僕があの時、少しでも……

悲痛。あまりに恐ろしい情景に、彼女が信じていたすべてが崩れ、すべてが歪んだ。だけどこれほどまでの狂気にさらされ、本人も狂気に身を委ねたはずだというのに、彼女の意思ははっきりしている。

「ひょつとして、信じたいんじゃないのか、それでもまだ……。誰か、手を差し伸べてくれるんじゃないかって……」

狂気の中にありながら、僕とコミュニケーションが取れるということとはそう言う事ではないのだろうか。

深い、深い淵の底に眠りながらも、ほんの少しでも明りが見えないかと必死に手を伸ばす女の子。彼女を何とか引き上げられないか。自然と左手を差し出していた。

ところがものすごい目つきで睨みつけられる。足が竦み、動けない。

ダツタラアナタハ信ジラレルノ……？

ドウヤツテ助けテクレルトイウノ……？

大キナ鎌デ、私ヲ傷ツケヨウトシテイタアナタヲ信ジロト言ウノ
……？

コレ以上私ヲ傷ツケルツモリナノ……？

ダツタラ殺ス……

死ンデシマエ…… ミンナ死ンデシマエ……

彼女の静かで巨大な怒りに呼応するように水がざわつきだしている。直後彼女の背後の池の水が巻き上げられた。いかん、逆効果だ。今ここで彼女に力を振るわれたらそれこそ水の泡だ。手を引くしかない。

「仕事、なんだ。……臨時だけど。
あの大鎌じゃないとできないんだ。確かに傷つけてしまう……。でも、それが目的じゃない。助けてあげられるんだ。……信じられないだろうけど」

僕の言葉に彼女は無反応に見えた。実際巻き上げられた大量の力は水源に戻ることなく彼女の背後で僕を飲み込まんと渦巻き続けている。今の僕では何もできない。諦めるしか……。ないのか……。

……僕はきつと信じてもらえない。こんな嘘つきの僕が、信じてもらえるとは思えない。

僕は自分のことしか考えなかった。

彼女だけじゃない。今まで何人もの人達を見殺しにしてきた。

最終的に導ければ、結果さえ一緒なら、いつやつても同じじゃないか。

……

そんな風に考えている僕を信じてもらえるなんて虫が良すぎる。反吐が出る。

「信じなくてもいいよ。今日はこのまま帰る。……本当は君もやたらに人を傷つけたくは無いんだろ？ そんな姿になってしまったけれど……」

……それじゃ、また来るよ。その時はまた少し話を聞いてくれよ。

それまでは静かに、おやすみ」

少し申し訳なさそうに笑顔を見せた後、背を向けた。

……よかった。彼女は攻撃してこない。

背を向ける、ただそれだけのことがすごく怖かった。内心かなりビクついていて、かなり勇気を振り絞らないとできなかった。

彼女と対峙している間中、ずっと恐ろしかった。声も震えた。

彼女自身への畏怖だけじゃない。僕がしてきたことを知ってしまったから。

僕の胸中に絶望とも嫌悪ともつかぬ感情が、じわりと微かな音を立てて広がるのがわかる。

……

足を庇いながら雑木林の中に入る途中、異変に気付いた。木々のざわめきが聞こえる。彼女の領域が解かれたのだろう。ひとまず安心だ。なるべく急いでここから離れよう。

……命がいくつあっても足りない。

「懺悔」

「うお！？ 何だお前その足！ 救急車だろ！」

高志に原付を返しに行ったら、そのまま救急車で病院送りにされた。左足だけ赤いジーンズの上から、ずぶぬれになった上着を引き裂いて作った布切れで思いつき縛ってある姿は当然異常だ。友人の高志でなくても誰もが同じことをしただろう。

なじみのある病院で奥まで泥が入っている傷を診てもらった。たまたま宿直だったなじみのある医師に何が刺さったんだと聞かれた。いやちよつと、と答えるしかない。

誰も信じない。泥で出来た檻の中で、泥でできた針に串刺しにされたなんて言っても、誰一人として信じるわけが無い。

本当ならこれだけたくさんの汚染された傷を治療するには、硬膜外麻酔とか言う脊髄に麻酔をかけて痛覚を取り払った上でやらないといけないのだそうだが、入院しないといけないと言われた。脊髄に麻酔をかけるのだから、意識はあるが薬が切れるまで足腰もふらついて立たなくなるとのこと。半日はベッドの上になる。とんでもない！ これからやらないといけないのに！

……と言っことで痛みが取りきれないかも、と言われたが即日退院

できる局所麻酔を選んだ。事前に痛み止めの注射をされて、さらに傷の周りにも薬を垂らされる。表面を消毒されている時は全然感じなかったから、薬スゲーと思っていたが、奥の方はすごい痛かった。

先生、待つて！ やっぱりもうちよつと麻酔！

……とも言えず、無くなりかけの根性を振り絞る。

丁寧に傷の奥まで洗浄してもらい、また注射を打たれ、包帯を巻かれ、薬をもらって時間外診察、処置の会計を済ませる。……財布だとかの持ち物は全部ゼミにおいて行つてたから、会計は高志に立替えてもらった。金がないのに、とばやかれた。ホントにすみません。保険証は今月すでに提示済みだから、保険適用分は下がっているので勘弁してください。

松葉杖について、明け方ようやくゼミに戻ることができた。ずぶぬれになってたし、引き裂いてボロ切れになってしまったから高志のスウェットを借りている。僕の方が身長があるのでちよつと小さいが気にしたら負けかな、と思つている。ケータイを持つていかなくて正解だった。これからも気をつけよう。しかしこれだけ疲れる思いをして、またこの上さらにやらないといけないのか……。はつきり言つて辛い。でも、途中経過報告できるまでならあとちよつとだがんばらないと……

そんな最後のやる気とは裏腹に、病院にて使い果たされた根性と極度にまで疲労した心身は無情に僕の意識を奪い、気がついた時はもう日が高くなつていた。再び血の気が引く。冷や汗をかきながらのスパートだ。

……だからどうしてこつ言う時に限つて、あんなとてつもなく厄介なものを相手にしなきゃいけないんだ！

「お前が見つけてすぐに行かなかったからだろっ……」

呆れ果てたYOUの声が聞こえたような気がする。

あーもう、どうとでも言うてください。とりあえず死力を尽くし締め切りに間に合わせ、ふらふらのまま先生のところへ行く。

ざっと目を通され、ふむふむと頷かれる。いいんじゃないか、との第一印象。詳細は次の週末までに見ておくと言われた。長い長い戦いに幕を引き、やはりふらふらのまま帰途に着く。父も母も居たのだが帰宅の挨拶もそこそこに、自室に戻ってベッドの上に突っ伏した。二人とも僕の服が変わったのに何も言わなかったなあ、何てことを考えていたが、極限に至った疲労はそのまま簡単に意識を向こうの世界に持っていく。

…

…

目を覚ましたのは次の日の早朝だった。全身がギシギシ言っている。爽快な目覚めからは程遠い。

母は夕飯の時にも起こさなかったようだ。大変助かります。多分起きて何も食べたくなかっただろう。それより寝たかったし。家族で母の作ってくれた朝ご飯を食べていた時、朝のニュースが耳に入る。

……この近辺の女子学生が行方不明になっている事件。

顔写真と名前が出ていたみたいだが、僕がテレビに視線を移した次の瞬間には消えてしまい、読めなかった。

……いくらなんでもそこまでニュースは早くないだろう、と思いいながらもやはり気になる。

ひょっとしてあの子の事じゃないのか、と。

「……このあたりも物騒になったわね。裕ちゃん、あなたも気をつけるのよ」

「何言ってる。どっちかっていうと、裕也が何か事件を起こす側だろう?」

「なんだそれ! お母さんもなんで笑ってるんだよ!」

……たわいもない家族のコミュニケーション。当たり前前にできていることって、本当に幸せなことなんだな……。

朝食を食べた後自分の部屋に戻って、再び転がった。

「……ふ」

久しぶりに休めているような気がする。体を預けなれたベッドに横になって、文字通りごろごろしているとY O Uの説教が始まった。

……反論の仕様がなない。

確かに僕にとっては重要で、優先したいことだった。けどそのことが呼び込んだ現実。

そしてそれが僕の力では解決することが出来ないほどのものとなっていること。

何を優先することが真に重要であるかの見極めができていない者の無責任な行動の結果が何を意味するのか。

実体験したから痛いほどわかる。と言うか、本当に痛い。

一通り僕が真摯に警告を聞いた後だった。

「……あれはブレイズと言う。シェイドの亜種だが、極めて稀な存在だ」

ある程度想像していた。ブレイズもシェイドと基本的には同じで、目覚めた時に分散させていた力を凝集させることで爆発的に強くなる。だがブレイズにおいてはそれだけではなく、その際影響下にある自然現象の力をも自身に集め、それを己の武器、鎧として自身の強化を行う。

彼女は水の流動性と莫大な質量を自分の力として扱っていた。だがまだ目覚めたばかりだったので、操れたのはそのような単純な力だけらしい。このまま時間が経てば、次第に複雑な現象も自在に操れるようになる可能性があると言う。

……いわば、ブレイズとは僕たち日本人の感覚で言う、神。

ただし恵みを与えるのではない。常に荒ぶる、畏れの対象。崇りそのもの、とでも言うのだろうか。

死神と言えど退かねばならないほど強力なこともあると言う。

だがそうなる魂は、シェイドよりもさらにずっと少ない。死者がシェイドになるかブレイズになるかは正直なところわからない。彼女のように性質が極端から極端に移行し、そして変性して影響を及ぼすようになった時にその魂が存在していた環境によって分岐している可能性が強いというが、個体数があまりに少ないため、仮説の段階を抜けることはないだろう。

特徴的なのはブレイズとなる魂の変性は著しく早いということ。なぜかは分らない。ただ今回の彼女はその中でも特に早く、あれほどの速度で起こったのは例を見なかったという。

そして一番気をつけなくてはいけないのは、ブレイズは移動が可能であると言うことだった。シェイドは自身がシェイドとなった場所、その思いを縛り付けているものから離れることは出来ない。だが目覚めたブレイズはその場を離れ、自分の属性と同じ場所ならば定着が可能。遭遇した時に導かなくては、二度と行方を掴むことができないかもしれない。

「ゆえに、ブレイズに関しては我らも必死だ。非業の者を残さぬた

めにな」

今回は特別だった。僕と、あまりに不完全なレクイエムの力ではどう足掻こうが不可能で、逃げ出すしかなかった。

……つまり、今度あの用水池に行ったとしてもあの娘が居るとは限らない。

夕方。気になった僕は父に車を借りて、二日前に彼女を発見した用水池に向かった。曜日感覚が崩れているから、本当に二日前なのかわからない。もつと前のような気もする。

到着した時、丁度日が沈んでいい具合に暗くなっていた。林に入り池を目指す。前来た時に感じた、シェイドの広げている領域特有の感覚が感じられない。

……もう居ないのか？

いや、そう言えばあの時、まだ池の傍にいたのに領域が解かれたような感じがあった。ひよっとしたらあの娘は領域の展開を自由にできるのかもしれない。今はあえて自分の領域を抑えているのかもしれない。シェイドの領域は自分を守るための物。侵入した者を自動的に攻撃する。

「本当は君もやたらと人を傷つけたくは無いんだろ？」

あの時の僕の言葉を耳にした彼女はわずかに動揺したようにも見えた。きつと……

希望的観測を胸に水際にまで近づいて声を上げてみる。

……反応は無い。

レクイエムを引き抜き水面に映してみる。

……池の水は静かなものだ。

彼女はレクイエムを本能的に恐れた。レクイエムを見て反応した。それなのに今日は動かない。

思い切ってレクイエムを池の中央めがけて投げつける。

……命がけの賭けだった。勘違いされて攻撃されたら僕は死ぬ。

レクイエムは小さな波紋を立てて池の底に向かっていった。……

飛沫は上がらなかったけど、波紋は立つんだ。どういう事だろう。ますますレクイエムへの謎が深まる。

しばらくして池の中に潜り込んでいったレクイエムを呼び戻す。これだけのことをしたのに、姿を見ないどころか領域が展開される感じもない。

「…………。離れたか」

僕の中で、もうひとつの僕の声が響く。

……

僕は本当にとんでもないことをしてしまった。
あの少女を永遠に彷徨さまよわせてしまった。

どうすれば償えるのだろう。かなりの範囲を感知しているYOU
ですら何処に行ったのかわからないと言うのだ。僕ではどうするこ
とも……

届くはずが無い。でもそれしかできない。
ただひたすらに心の中で謝罪し続けるしか……

誓おう。

もう二度と、僕がわかる範囲で見捨てはしない。

「懺悔」(後書き)

第四章、終演です。

本当に恐ろしいのは死者の祟りか、生者の狂気か。

一人の少女の命を永遠に解かれない環の中に放り込んでしまった裕也君の後悔が、これから一つでも多くの鎖を断ち切る力になることを……

それではこれからもよろしくお願いいたします。

「発起」(前書き)

第五章のはじまりです。

じわりと、すぐそばにある怪奇をどっぞ……

「発起」

十日くらい過ぎた日の朝。まだ左足はちよつと痛むが特に気になるほどでもない。幸い化膿することもなく、傷の治りもかなり良い。途中で一回再診に伺ったが、その時先生もいいねいいねと好感触だった。病院でもらった消毒用コットンで日々きれいに拭いて薬を塗って、言われたように飲み薬も内服してきたおかげだ。こんなに出されたのを見た瞬間は、過剰医療じゃないのか、と思ひもしたけど、速やかに回復したのを体感した以上これが適切なんだと言っしかな

い。
ベッドから降りて伸びをする。寝相があまり良くない僕は時々寝違えることがあるが、今朝は別に問題無さそうだ。爽やかに目覚めて気分がいい。よし、今日はゼミに行つて先生のアドバイスを受けてよう。大学はまだまだ夏休みだけど平日は朝から部屋にいて仕事をしているので、昼前までに先生のところに行けばいいだろう。朝食を食べに下階に下りるとすでに身支度を整えた父がテーブルについて新聞を読んでいた。テレビのニュースも流れている。

おはよう、と挨拶して顔を洗つて食卓へ。椅子を引いていつものところに座る。

いつもの朝。

僕が席に着くのを待つていた母が、今日はブレックファーストよ、と言つてお皿を並べていく。僕の家では「朝ごはん」といえば和食、「ブレックファースト」といえば洋食が出る。朝は母の独断で決まってくるが、昼時、夕食は僕たちも選択できる。具体的に料理品目が頭に浮かばなくても、洋がいいなと思えばランチ、ディナーと言えばいいわけだ。小さな頃からそれが普通なのだが、よそ様からし

てみたらちよつと変わっている。

オーブントースターでいい感じに焼かれたクロワッサンに、ジャムを付けてかじる。ちよつと朝の幸せを感じながら、ニュースをキヤスターが読み上げているのに耳を傾ける。

「……昨夜、三須浪市みすなみのビル地下にある飲食店で爆発事故が起こり、中に居た十四名のうち十三名が死亡する事件が起きました」

なんかとんでもない事件が起こったんだな。っていうか僕らがよく遊びに行く街じゃん。行かなきゃ行けないだろうなあ。

「この飲食店では不定期に貸切のパーティーが開かれ、昨日はそのパーティーが行われていたようです。現場にはガスなど火の気はなく、人為的に爆発物が仕掛けられていたものと考えられ、殺人の容疑で捜査が進められています。遺体には損傷の激しい者も多く、また店内のコンクリート壁が広範囲に崩れている事からも、相当量の爆発物が仕掛けられていたと思われます。爆発に伴い配水管、下水管から大量の水があふれ火災などの被害はありませんでしたが、溺水による被害者もあり、そのすさまじさを物語っています。無差別テロの可能性もあると警察からの見解が発表されていますが、詳しいことは現在も捜査中とのことです。」

……次は夏真つ盛りの今、都内のある川に現れたかわいい珍客による騒動の話題です」

ふーん、世も末だなあ。世紀末でもないのに。こんな死亡事故が起きたらきつとシェイドが現れてしまうに違いない。現場が落ち着いたらやっぱり行ってみた方がいいだろう。

それにしても、万が一この事件の犠牲者と遭遇していたら、僕もこの無差別テロに巻き込まれていたのかもしれないのか。そう思う

とかなり恐ろしい。

ところで僕の卒業論文はゴールが見えて、と言うより目標地点の設定ができて、そこを目指してせこせこ地道に積み重ねていつているところだ。指針ができたから前のような焦りは大分なくなつた。余裕が出てきたら就職活動も再開しなくてはいけない。……返事のなかつた会社からやつと通知が来た、と思つたら残念な知らせだつたのだ。三次面接にまでこぎつけられただけでも奇跡だつた、と慰めておこう。

……それにしてもどうせダメならもつと早くに言つてほしいものだ。今からがんばつても期待は持てない。ああ……、どうしたものか……。

ゼミで先生の指導を受けたあと、実際調査してきたことを今までまとめてきたことに付け加え、考察を深めていく。今までは主に図書館で取り寄せた資料を中心にまとめてきた。だけど集まつた資料の中には思ったようなものは少なかったように感じる。目を通して見て、僕が知りたい事とは何か違うと言うことも多かった。文献を集めてまとめることも大事だ。しかし郷土史料館やお寺とかの方が直接聞けて参考になった。何より、早い。

……前までは指針がうまく定まっていなかったから机の上でしかできなかつた。でもこれからは違うぞ。やることが見定まつたのだから行動に移せばいいんだ。

ここのところほとんど毎日外に出ている。まるでそれまでずっとこもりっぱなしだった分を取り返すかのようだ。だけどまだまだ回り足りない。夏の間は調査を進めよう。

……外に出る、と言うことはつまり。

……

…

「いいですから、そう言うの」

「でも、少しでも良いんです。少しだけ……」

「やめろって言うてんだろ！ 話なんて聞く事ねえよ。高橋、行く遅れちまうぞ」

スーツ姿の二人の男が去っていく後姿を見送る。……これに慣れる日は来るんだろうか。だけど恥や外聞を気にしてはいけない。遠ざかっていく高橋と呼ばれた人に向かって大きく声を張った。

「お願いです！ すぐ近いうちに何かがあると、それだけでも意識していてください！ お願いします！」

僕の声なんか全く聞こえない素振りで、上司と思われる男性の少し後ろについて、駅のトイレの姿見に映っていなかった高橋さんは足早に遠ざかっていく。どうしたらいいんだろう。これ以上積極的につきまとったとしたら、多分体格のいい隣の男性にボコボコにされる。それじゃあ結局見失ってしまうし、何もできないままになっってしまう。仕方がないので距離を置いて二人の後ろを行こう。

あの少女と出会ってから、僕は対象者を見捨てたりしていない。

……変えることができる運命ならば、痛ましい想いが減るのならば。

そう思い始めて、対象者に直接接触することを試みだした。

だけど受けるのはさんざんの罵倒が無視。そりやそうだ。僕が対象者なら、絶対に取り合わない。どうせそのまま宗教やセミナーの勧誘になるんだろ？ そう考えるのが一般的だ。前は殴られそうになった。僕自身が不信に思っているのだから、そう言う対応が返ってくることも想定済み。なので直接拳をもらうことは無かったが、いつか手痛い思いをすることになるだろう。

もっと具体的に分かれば聞く耳を持つてもらえると思うのだが、僕には共通した結果しか分らない。YOUならわかるのだろうか。だけど彼は僕のこの行動に協力的ではない。YOUには無駄な努力をすると言われた。「律」を曲げることは出来ない。

生も死も、すべてが決められた「律」の中にある。だけど僕の死はYOU自身が曲げたじゃないか。それならば可能性が極めて小さくとしても、僕の努力が「律」に一太刀入れて曲げることができるかもしれない。

死神としてだけでなく、人として救いたい。

あの少女のような存在を、もう残さないために。

……僕がしているのは所詮は贖罪。僕自身のための楔。みそぎ

それでもいいじゃないか。僕の苦しみを和らげるための行いが、誰か知らない人達の魂の安らぎを守ることに繋がるのなら。

YOUがかつて言っていた「俺をも救え」と言う言葉。それはこの事を言っていたのかもしれない。だとすると、本当に苦しんでいるのは死者でもシェイドでもなく、死神なのだろうか？

……

自身の苦しみから逃れるために人の死が必要なのか？

……いや、よそう。そんな思考は。YOUが何を知っていて何を隠しているのかは、今の僕の与り知るところではない。

「そこに居たはず」

「なーな、ミッキー」

その名で呼ぶな。僕が呼ばれたくないニックネームNo.1でいつも呼んでくる女子学生。初めのうちは呼ばれることに抵抗があったがもう慣れた。首だけで振り返る。

「あんな、ミッキーって最近卒論でお寺とか行つとるんやろ？」

うんうんと首だけで返事する。

「……でな」

なんだ、今の溜め。ちょっとやな予感がする。

「これ……やけど」

椅子を引いて身体ごと彼女に向き直る。僕に一枚の紙切れを手渡してきた。

……はいはい。仲がよろしいことで。

そこには彼女の肩に腕を回し、その回された腕に手を添え、満面の笑顔を見せる二人が写っていた。

「現像が終わった写真を高志に渡せばいいの？」

「や、よーく見やあ……」

とぼけてみたが彼女は意外と真剣そうで若干青ざめて見える。僕が最近寺院によく行っていると聞いてやってきた。きっと持ってきたのは心靈写真だろう。今現在一般的に見て気味の悪い仕事を兼務している僕だって、心靈写真や心靈ビデオの類は気味が悪いと感じている。むしろ、以前の方が平気だった。だが今ではそれらのすべてをトリックだと断じれなくなってしまった。この世には、向こうに行けない魂が実際に存在しているのだから。

正直あんまり関わりたくないけれど、そうも言えない状況だ。その写真をよくよく見る。……特に何か写っているわけではないような気がする。でもこの違和感は……

「二人以外写ってないけど？」

「そうなんよ……。よーく左端の方見てみい」

言われたところをじっくり見る。……風景が歪に白く抜けている。見様によつては、人影……？

「現像ミス？ それとも指が入ったの？」

あえて自分の直感に触れないように話を聞く。

「そこな、人が写ったんよ……」

ですよ。

「あたしらの他にも人が居^おったから写^おつとつても別に疑問に思わなかったんやけど……」

「OK、把握した。その話聞くとさすがに気味悪いなあ。今日これから行くところで頼んでみるよ」

「やった！　で、あんま言わんどいてな。このテの話気にするみたいやし……」

それも把握している。あいつ高校の時から怪談話の類をしていると止めようとするし、その場から自然といなくなってたんだよな。苦手なのかな。そういう話をしている場には集まってくるって言うし。

ちよつと気味の悪い写真を手近な封筒に収めて鞆の中へしまい込む。

「お礼はまた今度な。それじゃあお願い」

用事が済んだらそそくさと出て行ってしまった。そろそろ僕の方も時間だ。さて、と掛け声をかけて椅子から立ち上がり、荷物をまとめ始めるとまたゼミ室の扉が開いた。そこに居たのはさっきの子。

「終わったら電話してな。メールは気付かんかもしれんで。な？」

扉から半身乗り出すような感じで顔を出し、小首をかしげるように頼み込む。そしてまた用件が済んだら扉の陰にひょいと引っ込んでしまつて、そのまま扉も閉められた。人懐っこい感じで結構可愛い容姿の彼女。普段の行動も含めていわゆる萌え系だ。キモヲタ系だけじゃなく男なら大抵がちゃほやしそうな感じ。……狙ってるのか？　僕が高志に怒られるよ。

いつものように荷物をまとめた鞆を持って、僕もゼミ室を後にした。今日行くお寺はちょっと遠くにある。電車とバスを乗り継いで行くし、それぞれの待ち時間も合わせたら多分帰ってこれるのは夕方遅い頃合い。今日はこのままゼミ室に戻らず直帰にしよう。

……

…

「YOU、どっちだい？」

本来降りるつもりが無いバス停で下車。約束の時間に遅れてしまう。……でも仕方ない。連絡を入れておこう。しかも次のバスを待つよりも歩いた方が早く着きそうだ。

「今来た道をそのまま戻れ。まだ何も起きていない」

言われたようにバスが去っていくのとは反対の方へ足を運ぶ。外に出るようになった、ということは仕事をする機会が増えると言うことに等しい。

何の気なしにバスのサイドミラーに目をやったおかげで見つけた。老婆だった。……と思う。徒歩だとしても多分十分に追いつく。

「YOU……か。俺に呼び名をつけた者はお前が初めてだ、裕也。」

……もとより入れ替わる以前の死神のことを知っている者など居はしないのだがな」

「そっか、寂しいもんだ、死神って」

「そんな感情とは無縁だ。しかしどれほど前からだったかな、お前が俺のことをYOUと呼び出したのは……」

「迷惑かい？」

「……悪い気はせぬ」

ここは山の中腹辺り。車通りも多くない。意外とセミの声が少なく、思ったよりも静かだった。なぜかYOUとの会話が弾む。こんなことは初めてだ。そもそもYOUから仕事の内容以外で話かけてくることなんて無かった。少し嬉しい。

だけど、ふとこの前の思考が脳裏をよぎる。

「……なあYOU。寂しくないとしても、苦しいって思うことはないのか？」

ストレート過ぎないように尋ねる。あわよくば僕の欲しい回答が得られるように。YOUはかなり頭がいい。僕の愚策なんて見透かされるに決まっている。下手に回りくどく、核心にだんだん近づくような聞き方はしない。断られたなら、その話をするつもりはないと言っ事だ。臨時の代理が知るようなことではないと言っのなら、それに従っしかない。僕が未来永劫死神を続けることなんて出来ないんだから。

「苦しい？ 何がだ？ もどかしいことならいくらでもあるぞ。お前が思うように仕事をできないことを中心としてな」

「いや、手元にレクイエムがないこととか、僕の体と交換してその副作用が出てるとか……」

「む…… レクイエムを直接俺が管理できないことは不安だが、特に身体や魂に支障が出るようなことはないぞ」

……そうですか。いろいろ考えてた僕がバカでした。それじゃあ、「俺をも救え」と言うのは一体どう言う意味なのだろう。

「……いずれ思い出す。レクイエムが何なのか、それを考えれば自然と行き着く。死神の思想に繋がる。それが分かれば、俺の言葉も分かるだろう」

あくまで答えは得られない。あの少女の時のような後悔をしたくないから、少しでもヒントが欲しいんだ。僕がその答えに行きつかなかった時、しなくてもいい、させなくてもいい憂いを作ってしまった。そうしたくないから……

「今は考え、思い出す時だ。自らたどり着かずこの先続けるならば、お前の精神はいずれ蝕まれ人として居られなくなるかもしれぬ。それはしたくない。お前の『律』を曲げたのはその為ではないのだから。お前を俺の手に負えぬモノにするわけにはいかぬ」

「え？ それってどう言う……」

僕のすぐ脇をスクーターが一台通っていった音にはつとめる。意外と歩道からはみ出して歩いていた。慌てて道路脇の白線の内側に戻る。数十秒くらいしてトラックが一台、乗用車がそれに続いて二台通っていった。

夏の日差しは青々とした木々の葉に遮られ、風は涼やか。思い出したかのように賑やかになってきた虫の声を伴奏に、木漏れ日がアスファルトの上を踊る。のどかなものだ。そんな中で軽く響くエンジンの音が小気味いい。軽い催眠状態のようになってもおかしくない。

平静を取り戻して再びYOUに問いかけようとした、まさにその時。

「あつっ！ …… だ、誰か！ 待つ がぎっ！」

同時にどむっと、やわらかい物が固い物にぶつけられた時のような音が鈍く……

さらに続いて響く急ブレーキの音。

……少し急ごう。聞きたいことは後にして、僕は駆け出した。

「おい！ なに真ん中で止まってんだよ！」

山道だと言うのに街中のようにクラクションが響いている。さっきまでの長閑さがぶち壊した。ゆるいカーブを抜けるとさっき通過した2台の乗用車が道のど真ん中で止まっているトラックの後ろで立ち往生していた。トラックの運転手は降りていないようだ。そのまま走ってトラックの前に出る。

……何も無い。あの声の感じだと多分おばあさんがはねられたはず。道路を見渡すと黄色と白の花束が転がっている。菊のようだ。お墓参りに行く途中だったのだろう。

トラックの下を覗き込むが、居ない。この道路のカーブの外側は林だが、急な坂になっている。もしかして……

ガードレールを乗り越えてその林に足を踏み入れる。一本の木に手をかけて下を見下ろす。

……居た。

一部が白い、人間くらいのサイズのものが見える。動かない。おそらく……

結構急な坂だ。自分も転がり落ちてしまいかねない。慎重に木々を伝って下に行く。

「お、おい、大丈夫か！」

声に反応して道路の方を見上げてみる。白いランニングシャツに角刈りの頭、深緑色の作業用ズボンの男がすこし裏返ったような感じの声をかける。多分トラックの運転手だ。そわそわと落ち着かない様子で、片足だけ乗り越えたガードレールを右手で掴み、左手は何もない宙をかいている。あと一歩でパニック寸前な感じだ。やっとのことで車から降りてきたのだろう。

彼のかけた大丈夫か、という言葉。当然それは僕に対してではない。

時間がかかったが、やつとのことでたどり着いた。その姿は血みどろではなかったが、何かおかしい。

膝が地面の方を向いているのに、首が空のほうを向いている。

そして肘が逆に曲がって、折れた骨が突き破って出ている。

血は骨が裂いた所からしか出ていなかったが、すでに止まっている。じわつと垂れているが、その滴はすべて山が飲み込んでいった。

「ダメです……。救急車、警察を呼んでください」

上に戻り、そう報告する。呆然とするトラックの運転手。そのままへたりこんでしまった。取っ組み合いになったらかなり強そうなその体つきからは想像できない。他の車の運転手がケータイを手にした。

僕は再び下に行く。誰も覗き込んでこない。今のうちに済ませ、立ち去ろう。多分この事件、ローカルのニュースになる。細かいことはそのニュースで知ればいい。

……

…

立ち去る前、もう一度トラックの運転手に目を向ける。未だ立ち上がれない様子だ。ぶつぶつと呟いている。よくよく集中して聴き取った。

「そんな…… ち、違っんだ…… 前のスクーターが…… カバン

をひつたくられて転んだばーさんが道に出てきて…… よけ よけ
ら、避けられなくて……」

……

殺すつもりなんて無かった、ただの事故。あなたは悪くない。
だが、覚悟も無いのに奪ってしまった。それが永遠に苦しめる。

殺されるのも、殺すのも……

決して背負いきれるようなものではない。

やっぱり怖い。できることなら関わりたくない。

だけど、もう逃げない。

もし見つけたら責務を果たす。僕が役目を終えるまではこの覚悟
を貫くんだ。

「何かいる」

お婆さんを導いた後、そつとその場を離れた僕はそのまま歩いてバス停に戻る。

……次のバスが来るまで五十分。いや、あの事故があつたのだから多分来ないと考えた方がいい。このバス停に降りた時に決めたように歩いてお寺に行くことにしよう。今は昼の二時前。到着するのは三時を過ぎるだろう。もう一度連絡を入れ、遅れる旨を伝えたところ快く受け入れてくださった。

汗を拭いながら到着したのは蝉時雨の山の中、竹林に囲まれる不思議な雰囲気の寺院だった。蒸し暑い夏なのに笹の葉が立てる爽やかな音がとても心地よく、自然と心が落ち着いてゆくのを感じる。自分を見つめなおすのにすごく良さそうだ。

そんな中でちよつと気味の悪い写真をカバンに忍ばせ今日も取材お話を伺った最後に写真を渡す。予定よりも一時間以上遅れた上に、こんな仕事も頼むだなんて重ね重ね失礼な人間だ。それなのに嫌な顔一つせず、おくびにも出さず、丁寧に受けていただいた。下げた頭があげられない。

「不躰^{ぶしつけ}で本当に申し訳ないのですが……」

「いえ、いいんですよ。でもまあこう言つた相談にいらつしやる方、少ないもので……。普通にお焚き上げによるご供養をさせていただくことしか出来ませんが、それでもよろしいですか？」

もちろん構わない。少し興味があつたので見せてもらえるかと頼んでみたのだが、この場でお経を詠んですぐ焼いてしまふ、というスピード作業ではないようで後日になるそうだ。今日のところは、

と丁重にお断りされた。それなら仕方ない。僕のようにその場で導くことは状況が違うのだろう。二、三日後連絡をすれば見せてくれると言う。それならそうさせてもらおうことにしよう。

「あ、三岳さん。それから……」

帰る直前に呼び止められる。

……

…

境内を出て、ケータイを手に取る。マナーモードを解除しようと画面を開くと留守番電話のアイコンがついていた。誰だろう、と思いつつケータイを操作する。

2件の新しいメッセージがあります、1件目のメッセージです、とテンプレートな案内があった後再生が始まった。

「……あ、ミッキー。今お寺？ 後でかけなおすわ。ごめんな」

保存するか、と聞かれたが当然NO。

……2件目のメッセージです

「……あ、み、ミツキー。あ、あ……な、……かん、うま……
言……ん。……い気……ち悪……と……く……わ
……ら来……くれ……かな。ほ……むわ。こ……」

ぶつつ 保存する場合は、1を……

何だ今の。ものすごくノイズが走っていてよく聞き取れなかった。
もう一度再生して聞き直そうとしたが、次はすべてがノイズに置き
換えられてしまっている。

なんて言っていたのかさっぱりわからなかったが、放っておくわ
けにはいかなさそうだ。
……それだけは間違いない。

……

…

「ここだけだよ……」

「ん、さんきゅー」

「何で俺じゃなくてお前に電話いくんだよ」

「気にしない気にしない」

「なるつつーの」

「直接お前に言えないことなんじゃね？ もともと僕を経由するつもりだったとか」

釈然としない感じのままカレシが呼び鈴を鳴らした。

我ながら苦しい言い訳だ。彼女の住まいを僕は知らない。約束していたが高志を頼らざるをえなかった。写真の話は伏せてある。

「アキ」。俺だよ、開けるよー」

がちゃんと鍵が開けられ、少しだけ軋む音を立てて戸が開かれた。扉の向こうには長い日々病気に苛さいまれていたかのような彼女がいた。顔は青ざめ、少しやつれたようにもみえる。今日の午前中ゼミ室にいた僕のところを訪れた時はあんなにけられと能天気な様子を見せていたのに。

「何でタカシさんが来とるの……？」

「俺が来ちゃいけないえつつーの？ 何かあったのか、てかなんで毛布被ってるんだ？」

夏だというのに彼女は頭から毛布を被って縮こまっている。……

あの写真がらみの何かがあったのだろうか。……嫌な感じはある。だが領域に踏み込んだ気配は無い。シェイドやブレイズによるものではなさそうだ。それだけで少し安心だ。

目の前にいるのが高志で、一番信じている者に抱えられてほんの少しだけ気が抜けたのだらう。ふらつとして身体を預けてしまった。

……高志の顔つきがなんだか陰しい。

「な、車いこ。ここじゃお前キツいだろ。……よくここに一人で居られたな」

小さく頷く彼女を抱えるようにして部屋から引きずり出す。高志は彼女の背後、つまり屋内をずっと睨み続けている。毛布の中身がしっかり出てきた後、僕に頷き扉を閉めさせた。

あのメッセージを聞いた後、時間の猶予はあまりないと感じた僕はお寺でタクシーを呼んでもらい、最寄駅まで戻った。そして急いで自分の家に帰って父の車を借りてきた。現在夕方六時前。もともと帰ってくる予定の時間よりもちよつと早い。その代わり費用はかった。お金で時間を買う、そんなことをお父さんが言っていたと思うが、どういふことなのかちよつと理解できた気がする。

僕が運転席に座る父の車の後部座席で、高志はずっと大丈夫だったかと彼女の体をさすって気遣い続けている。その間中もずっと彼女の部屋の方への警戒は怠る様子が無い。僕としてはそっちの方が気味が悪い……。それに、何があったのか、それが一番気になるはずなのに聞く素振りが無い。まるで知っているかのようなのだ。

聞かれていないがアキちゃんにはぼつりぼつりと話した。

ゼミ室に来て僕に会った後、帰宅してから彼女の部屋がどうもおかしいらしい。ずっと誰かに見られているような感覚があったり、得体の知れない音が頻繁に立ったり、一人しか居ないのに耳元で何かに囁かれるといった怪現象に見舞われていたそうだ。拳句少し

でもベッドの上から離れようとすると寒気が襲い、足が竦^{すく}んでしま
ってその場に縛り続けられてしまった。

「怖かったんやもん…… 動けんかったもん……」

可哀想なことにずっと震えている。がんばって部屋を出たらよか
ったのに、という空気を読まない事を言わなくて正解だった。

そして高志を連れてきたことは、間違いなく正しかった。高志じ
やなかったら彼女をあそこから引つ張り出すことは出来なかっただ
ろう。すがりついて嗚咽をこぼしている。

「悪い、裕也。今日コイツ俺んちに泊めるわ。送ってもらえねえか
な」

お安い御用だ。二人を乗せたままギアを入れた。

……

…

相変わらず部屋がちらからないように心がけている高志の部屋の
ベッドの上で、今もカタカタ震えている。相変わらず顔面蒼白で、

せつかくのかわいい顔が台無しだ。高志がずっと付きっきりでなだめていた。日も沈みきって闇が深くなった頃、比較的落ち着いてきた。彼が僕に話がある、と彼女の傍らから立ち上がるつとすると無言で服の裾を引いて傍に居ることを要請する。

…… ったく、高志にはもったいないかわいい子ですよ、ええ。

「……ここまで憑いてこなかったから安心しろって」

今、何て言いました？

高志がため息をついて僕の方を見る。

「見えるんだわ、俺」

「へ？ 何言つてんの？」

即座に聞き返してしまった。

「だから、みえる人なんです」

五年も付き合ってきて初めて聞きました。今の僕もみえる人の一種ではありますけど……

困惑する僕をみて、ちよっと自嘲するような顔をした。

「でさ、居るんだわ、コイツの部屋に。すぐに引き払った方がいいんだけど、一度戻ったら今度は憑いてくるかもしれないだろ？ 俺が行って何とかしてくるべきなんだろうけど……。どうしたらいいんだろうな……」

本当に困ったようにつぶやく。僕らはまだ何も言っていない。二人の写っていた写真に起きた不可解な事象も、そのことについて僕が彼女から相談を受けていたことも。

嘘や見栄から来る台詞とは思えない。……この五年の間、今まで口にしなかったと言う事実が更に僕を納得させる。

「僕が行ってこようか？　そう言うことにはめっきり鈍いもんだしさ。確認とか、物を運び出すだけだったら向こうもあんまり相手にしてこないんじゃないかな」

似た様な立場にあるとはいえ、あまりに特殊すぎて信じてもらえないだろう。混乱させるだけだ。だから僕は嘘をつく。

原因を取り除いてきてやる。今の僕は誰よりも死に近い。YOUも居るし力もある。多分高志が行くよりも有効に対処ができる。ただ、高志に見えていたモノが僕には見えていない。シェイドではないが、危害の度合いを測れないのが非常に危険だ。

「……いや、いい。アキがもっと落ち着いたら俺が何とかするわ」

わずかに思考を巡らせたようだが、どうやら彼の中では答えが決まっている。まったく、こう言う性格なのはわかってはいるけど、少しは頼れよ。……今までの僕を見てるから、余計に頼れないのかもしれないけど。

それに、僕がしようとしていることを高志に見られるわけにはいかない。教室でレクイエムを出していた時も何も言わなかったから、レクイエムは高志にも見えないはずだ。だけど何か不測の事態があっても困る。あえて僕一人で行かなくてはいけない。

「だーいじょうぶだって。気にすんな。着替えとか要るだろ？」

……あ、お前彼女にワイシャツ貸したりとかして、ちょっと萌えなシチュ作ろうとかしてんじゃないね？」

「一人じゃ危ねえって言ってたんだよ！」

わざとおどけて大したことない印象付けようとした僕に対して怒声を上げる。その様子に彼女だけでなく僕も驚いてしまった。…こんな風に声を荒げるのは本当に久しぶりだ。高志の態度が、今僕たちが居る状況に冗談が通じないことを教える。

「……ごめん。はじめてなんだ、こんな身近な人に憑いてるの……。俺にだったら何とかなるけど。どうしたらいいのかわかんねえんだわ。焦ってもイラついててもどうしようもないのにな……」

「だったら、余計ここに居ろつて。僕に任せとけ」

態度を改め、真正面から彼ら二人を受け止める。なおの事退けない。ここは僕が行く。確実に魂を導く力のある僕ならば……

「何かいる」(後書き)

高志さんの彼女の名前は「千秋」です。彼女の友達が「『チアキ』は言いにくい!」と言いだして、みんなから「アキ」と呼ばれるようになった。で、高志さんはそのまま呼びなれた「アキ」で通しています。

「安芸」じゃないです、念のため。怒られる前に the 言い訳。ご迷惑おかけいたします。

「境に棲まうモノ」

「不思議なもんだ…… ああ言うのが憑いていく相手もないのに
自分からどこかに行くなんてこともあるんだな」

「不思議って言われても初めっからさっぱりわからないんだけど？
ホントに居たのか？」

惚^{とぼ}けてみる。

「間違いねえって。……そりやお前、みえる人に見てみたら、だけ
だよ」

だから言いたくなかったんだよ、とぼそつと付け足したのを聞き
逃さない。だけど僕もあえて聞こえなかった振りをする。彼が言う
ように間違いはない。確かに居た。終始僕の目に映ることはなかった
が。

僕は再び、先日訪ねた寺で頂いた香に火をつけた。

…

…

いい具合に夜中だ。彼女の部屋のあるアパートは郊外に位置していて、喧騒とは縁遠い静寂な空気が支配する。寝静まったわけではない。周囲の家々の明かりは未だ灯ったままのところが多く、耳を澄ませばその明かりのどこから暖かな談笑が聞こえてくる。

今僕は扉の前に立っている。この向こうにあるのは、このまま闇に飲み込まれて戻って来れなくなる者が住まう世界。ここに来るまで大きな変化は感じなかった。あの首筋が冷やりとするような感覚だけが僕を包む。シェイドの領域に入り込んだ独特の雰囲気はここにはない。

「YOU、どうだろう？」

「現在はシェイドの類ではない。いずれ成るだろうがな」
「どうすれば？」

「本来これは我々の仕事ではない。魂だけになった者を変性させぬようにするのは同属たる人間の務めだ」

何もできないから傍観しておけ、ということだろうか。僕が憤りを感じるのは間違っていることだと知っている。かつて同じ事を、僕はしたのだから。

だから尚更、捨て置くことなどではしない。

「変性しシェイド、ブレイズと成れば我々の管轄だ。それまで待つのもよかるう？」

「……」

「特に大きく害となつてはないのだ。お前の友人も言っていたように、あの女がこの部屋を引き払いこの地を不可侵としておけばよい。そうすればいずれシェイドと成ったときも被害が及ばず、そして俺達が動くことが容易になる」

「……それはできない」

「何故だ？」

「結局、成るんだろう？　だったら放つておくわけにもいかないじゃないか。別の場所に移つてしまふかもしれないだろ？　今ここに居るつてわかつてるんだから、今やらないと」

「……だが、俺が言う理由をすぐに知ることになるぞ。俺達の管轄ではない、と言う意味をな」

彼の言うことに無駄なこと、意味の無いことなど今まで無かった。必ず何か重要なことを含んでいる。そのことを十分に受け止め、僕は彼女から借りた鍵を取り出し、異形となる者が住まう世界の扉を開けた。

……

今は夏季。湿気を含み肌にまとわり付くような重い外気と、ある程度下がりはしたが日がどれほど強かったか思い知らせるようになる時間になつても地面に残り立ち上る熱気。それは本来屋内にも届き、息苦しささえ覚える時もある。

この部屋にも流れる息苦しさ。それはまったく異質のものだった。空気は冷たくまとわり付いて、僕の身体を内側へ内側へと押し潰そ

うとする。電気がついていなかったことから隣の部屋の住人は留守にしているか、もう寝ているのだろう。だがこの静けさはそれだけから来るものではない。冷蔵庫だけが小さく無機的に唸^{うな}っている。生ある者は微かに音を立てることさえ危険と感じ、すべてが息を殺して潜むことを選んでいるのかもしれない。そんな錯覚すら覚える。

何事も無ければ、と淡い期待をしていたがそれは所詮僕の甘い空想でしかなかった。ここにある雰囲気を発するのは異質の者。やはりシエイドとは異なる感じだが、確実に何かがここに居る。だがこの部屋の隅々まで見渡すが、どこかに居るはずの何かを目にすることは無かった。

靴を脱ぎ、そのまま部屋に上がる。暗がりの中電気のスイッチを探して付けてみると、意外なことに電気はついた。その明かりの中でベッドの下やタンス、本棚、机の隙間を覗き込んだ。

……特に何か潜んではいはしない。

一つ大きく息をついて、赤と白の大きなチェック模様のベッドの上に腰掛けた。直後、ぱぱと電気が瞬^{またた}いたかと思うと、周囲が闇に包まれた。

きい

……きしっ

きい

……きしっ

板目が擦れ合う音がちいさく、しかし確実に部屋を満たす。僕を中心に部屋の中を行ったり来たりするように音の出処でところが移動している。音の方へ目をやるが、ぼんやりともその音の主を目にすることは無かった。

……これが、YOUの言っていた「管轄外」ということか。
見えないんだ、死神ほくたちには。

これをどうすればいいのだろう。闇雲に振り回したとしても当たらなければ吸い上げられない。もしも縛り付けられる前である今、あの子のようにレクイエムに恐怖を感じたのならば、ここから居なくなってしまうとも考えられる。部屋の主にしてみたらそれで十分かもしれない。だがそうなればまた違うところでシェイドになるのを待っただけだ。何も変わっていない。遭遇すれば確実に導ける力だと思っていたのに。

気が付けば僕の様子を覗^{うかが}つように響いていた音が止んでいる。

目にすることは無くても、居ると言う気配だけはわかる。
ふう、ふう、と息遣いのような音を微かに感じる。

間違いない。まだこの部屋のどこかに居る。

意識を集中して、少しでも違和感があるところはないかと周囲を
探る。

どれくらい時間が経っただろう。

びるるるるるるっ びるるるるるるっ

唐突に電子音が鳴る。心臓が飛び出すかと思った。あえて車に置いてきたから僕のケータイではない。机の上に折りたたみ式の携帯電話が置き去りにされて、液晶画面が明るく光っている。彼女のケータイだろう。一向に電話が切れる様子がない。開いて誰からの着信が確認する。

「タカシさん」

登録の仕方があの子らしい。やはりあの子の持ち物だ。そして電話の主は僕の親友だ。現場は油断できる状況ではないが、電話を取

って少しでも安心させてやろう。

「もしもし、こちら裕也」

「……は……こ……わた……ど……だ……」

「もしもし？ もしもし？」

「どうし……ね……い……前は……ん……」

ノイズが酷すぎる。

「おい高志！ もう一度言ってくれよ、聞こえてるかー？」

「はや……やく行か……どこ……ここ……い……まで……うして……」

……違う、これは高志じゃない。あいつの彼女でもない。この声の主は誰だ？ 言葉を失い生唾を飲み込んだ。

オマエハ、誰ダ

はつきりと耳元で声がした。直後喉元にひやりとしたものがまとわり付く。はっとして反射的に電話を手にしていない右手を喉に当てたが、何かが触れているわけでもない。しかし確実に、喉にまとわり付く何かに力が込められた。右腕で思いっきり振り払う。僕の腕に何かが当たるとはなかったが、力を込めた何かは僕の喉から離れていった。

つー、つー、と音が響く。電話はいつの間にか切れている。通話をオフにしてさらに電源を落とし、状況に精一杯の意識を向ける。

僕に危害を及ぼし始めているが、迂闊なことでレクイエムを抜くことは出来ない。この見えない相手を確実に導くことができる状況に誘い込むまで、決して手の内を見せてはいけない。……そうだ。今日行ってきたお寺でもらった物を、今使えばいいんじゃないだろうか。使うことがあるかもしれない、と思ってナツプザックに入れたきたんだ。それに高志に一応持っていけと言われたあれも使おう。

……

まずは部屋の角に向かう。ナツプザックを開いて薬包紙のようなちいさくきれいな白い紙を敷く。そして粉のようにきれいな小さな粒の清め塩を盛った。すべての角と窓、玄関に同様にする。本当にどれだけ効果があるのか知れたものではないが、昔からよく言われているようだし、魂をシェイドにさせないようにしてきた人々の知恵と歴史と経験を信じてやるしかない。

ずっと部屋の中には何かがゆっくりと歩き回る気配と微かだがうめき声のような音が響いていた。隙間風が入ってくる時のような音にも似ているが、今夜の外は無風で、不快指数が非常に高い。それに空いている隙間などない。不意にふうつと耳から首筋のあたりに何かが通り抜け、時折僕の背中に冷たいものが走る。服の上からではなく、直接肌に触れられるような感覚。

シェイドと対峙するのとは全く異なる不気味さと恐怖が僕を襲い続ける。手が震え、息をするのが苦しい。

だけど、今僕がやらなくてはいけない。

塩を設置し終えた後、僕は袋の中から箱を一つ取り出した。

……

…

「これは？」

「お焼香用の抹香と、それと線香になります。取り立てて特別なものではありませんけれど。お葬式などでご覧になったことは？」

「ああ、これが。実際に手に取ったことはないですけど」

「はは、そうですか。……ぜひこれをその写真をお撮りになったところであげていただけたら、と思ひまして。気付かれたお二方と一

緒にどうぞ。少しでもご供養になりますから。写真に写ってしまわれた方も、心慰められることでしょう」

唐突な申し出だったにもかかわらず快く引き受けてくれただけでなく、丁寧な気遣いも非常にありがたかった。お礼を言って立ち去る直前だった。

「ただし、一つだけ気をつけて下さい。

われわれには、これ以上のことは出来ない。

あなたはこれから、次の世界へ行かなくてはいけない。

生ける者への未練は理解できても、ここに引き止めることは決して出来ない。

だからせめて、心安らかに向こうに旅立ってください。

……そう心を強く持つて、霊に向き合うこと。これだけは忘れないでください。そうでなければ、彼らはあなたたちに憑き、永遠にさまよってしまうでしょう。お互いここで決別するのだ、と私たちが強く意識しなくてはいけないのです。それでは……」

かつてYOUが言っていた葬儀の役目が今では感覚的に理解できる。生ける人がしなくてはいけない、死者との付き合い方。

袋から出した箱の中に一緒に入っていた香炉の代わりの小瓶。灰もその四分の三くらい入って蓋をされていた。その蓋を開け、火種となる炭にマツチで火をつけその上に抹香を盛る。線香にも火をつけ先端が赤く燦くすぶるくらいにしたところですぐに炎を消し、盛られた抹香の周りに立てた。決して多くはないが少しずつ香の煙が部屋の中をたゆたい始めた。

明かりのない部屋の中も、完全なる闇ではない。目のなれた僕は再びベッドの上に腰掛け、煙の漂う先をなんとなく見ていた。その間もずっと怪しい気配は僕に付きまとっていた。僕の心が折られるのを待っているかのように。ふと気がついた。

……煙がある一帯に強く留まっているような気がする。

もしかしてそこにいるのだろうか。だが、今確信のないままレクイエムを使うわけにいかない。思案を重ねていた。

闇の中でもある程度物がどこにあるのか把握できている今、本棚に何か本とは違うものが置いてあることに気づいた。煙の動きに注意しながら少し立ち上がり、その異物を手にとって再び戻った。

カメラだ、使い捨てのフィルムタイプ。

写真から出てきたんだ。また写真に収めてしまえば捕らえられるんじゃないのか？

理屈なんてない。なんとなくの直感だがそのまま行動に移す。フィルムはまだある。煙が濃くなっているその場所にファインダーを向けシャッターを切った。切ったのと同時に瞬いたフラッシュ。僕

もその光に一瞬目が眩んで周囲がわからなくなった。再び目が慣れるのを待ち、カメラを向けたほうを見る。あたかも強いフラッシュがかき消してしまったかのように、濃かったはずの煙が薄く広がっていた。

うまくいったのだろうか。

確証も自信も無いままカメラを舐めるように見ていた。

「……居るな」

頭の中に声が響く。……ありがとう、教えてくれて。

僕は棺となった小さな箱を床に置き、左の掌からレクイエムを引き抜いた。

……

…

「あいつさ、やっぱりこの部屋からは出すわ。もう居ないけど、怖いだろうしさ」

蝉がうるさい。備え付けのエアコンなしでは厳しい暑気が流れ込む。もうここは、生ある者のための世界。だけど次の住人には何も知らない人が良い。

「……そうだな。あんな短時間に異常にやつれたもんねえ。トラウマだよ、PTSDってやつだよ。……って言うか、もしかして」

「……ああ、そう言う事」

ちつ。人がちよつと苦勞してる間にそんなことを考えていやがつたとは。半ば呆れ顔でベッドの上に腰掛けた。部屋を見渡した。まだ角には清めの塩を供えたままだ。アキちゃんの荷物を高志の部屋に移す時に片付けるのを手伝ってあげようか。

本棚に戻したカメラを見遣り、昨日の事と、和尚さんに言われたことを思い出していた。

……われわれには、これ以上のことは出来ない。

あなたはこれから、次の世界へ行かなくてはいけない。

生ける者への未練は理解できても、ここに引き止めることは決して出来ない。

だからせめて、心安らかに向こうに旅立ってください……

……

本当ならば、お経の一つでも詠んであげられたらより良いのだろう。だけど残念なことに僕にはそんなたしなみがなかった。ただ手を合わせ、祈るだけ。

この部屋中に漂う香のかおり。これがせめてもの手向け^{たむ}とならんことを……

「境に棲まうモノ」（後書き）

第五章、終演。

このあと第五章のおまけをお送りします。おまけが終わりましたら「YOU」もいよいよ後半に入ります。

「みえる人」(前書き)

第五章のおまけです。三年前に投稿していた「YOU」には入れていなかったエピソードです。いつか「YOU」シリーズとして投稿しようかな、と思っていたのですが、挿話としてこのタイミングで。

それではどうぞ。

「みえる人」

「シャワー浴びてる時にさ、いや別にお風呂で頭洗ってる時とかでもいいんだけど、……なんか後ろが気になることって、無い？」

あるある

いんや。あーでも……ないことは、ないか

「大抵そついうのって気のせいに決まってるんだけど、うちのお兄いの時はそうじゃなかったのよね……」

まったく、こいつらいつものん気だよな。夏場に怪談話ってそれはスタンダードで結構なことだ。だけど俺は嫌いだ。

「その日、特に何か特別な日ってことでもなくて、むしろ大安でさ。すっかり油断してたらしいの」

別に仏滅とか赤口の時でも氣い張らないんじゃないかね？

「ゆう君はそついうことと言って話の腰を折らないの。そんなだから…… 止めとく」

ナイスアシスト。さすがは裕也。空気読めよ。俺が止められた続きを言ってる。そんなだからもてないんだぜ、お前。

「……で、続きね。その日お風呂でシャンプーしてる時にやっぱり

後ろが気になつたらしいの。まあ、私が脱衣所兼洗面所に入りますし、覗いたりすることがあるからまた香奈かな、くらいにしか思つてなかつたらしいんだけど」

「つてお前、その歳になつて兄貴風呂覗きつて…… 全員気付いてるが何も言わない。」

それにしても何度目だ。今年に入ってから性懲りもなく怪談話に花が咲くのは。

俺は嫌いだ。怖いから、とか自分の身に置き換えてしまうほど想像力が豊かだから、とかそういう理由じゃない。もっと複雑だ。

関係ないものまで来るからだ。

話の続きも気になることは気になる。だが巻き込まれたら面倒だ。止めさせようとしても結局隙を見て再開される。もう諦めている俺はそつと退席する。

「……で、気付いたの。背中を流れるのはシャンプーの泡じゃない。もっとヌルつとした…… それにしっかりした形のあるものだ、つて。」

それが何なのか確かめよう、つて背中に手を回したら丁度背中を伝う物とぶつかったんだ。お兄いよりもむしろそのぶつかった物の方が驚いたみたいで、勢いよく背中から離れたんだつて。バツてお兄いが振り向いたらね……」

「お風呂場のタイル壁から、肌色の蛇みtainのがぬるうって生えてて、その先に付いた人の手がお兄いの背中をずつと撫でてたんだ……。見られたことに気付いてすごい勢いで付け根の染みに吸い込まれて、その染みはすーって移動して消えちゃったらしい。」

以来家のお風呂場はお兄いがきれいにするから染みが一切ありません。ちゃんちゃん」

……

…

「帰ってきたな」

さっきの怪談話の、俺の退席後の要点を裕也が話す。裕也はアタマがいくせに使う方向をいつも間違えている。マジメに正規のルートで考えようとするよりも、どこか違うポイントを探す。もうこれはクセと言った方がいいかもしれない。その洞察力を、空気を読むことに向けるべきだ。少しでいいんだ。

それに数学が出来ないから文系で行く、とか言っていたが、こいつの根っこは理系だ。理系の俺が言っただから間違いない。数学の成績が低迷するのはお前が変なルートで答えに行こうとするからだ。ぐちゃぐちゃになるんだ。王道で行けよ、普通に。

どうやらさっきの風呂場云々のことでこの近くに何か来た、という事はないようだ。至って平静。気にしすぎるのも良くないと思う。だけど、そういう体質なので完全に気にしないでいられないのが現実だ。

夕暮れの帰り道。剣道部に入っている俺は稽古後の汗をさっさと落としたくて足早に家に向かっていった。そう言えば昼間の話の舞台は風呂場、だったな。想像したりする程度で同じケースに出会って事は今まで一度もなかったから今日も平気だろう。それにしても知らない腕に背中を流されるなんて気味が悪いなんてものじゃないな。

そんなことを考えながら交差点で信号待ちをしていた。向こう側にも一人、小学生の女の子が信号待ちをしている。

青。

当然一步を踏み出す。女の子はそこから足を踏み出さない。どうしてだろう。気にするな、という方が無理だ。横断歩道の真ん中辺りまで来たとき、女の子がこっちを見た。にたあつと口角を上げる。

途端に冷や汗が噴き出す。

……気付くのが遅れた。この子、厚手の長袖を着ている。

……

…

足早に家を目指す。くそ、嫌な汗だ。前出くわしたのがかなり前だから警戒していなかった。昼間感じたのは虫の知らせ、とでも言ったところか。無視するんじゃないかった。足早に家を目指しているが、その道筋はいつもよりも遠回り且つ複雑だ。

おそらく無駄だと思う。どうしたわけかあいう連中は俺がどこに居るのかわかるらしく、捲くことができた例はない。ためし

「おかえり、タツ君。ご飯の前にシャワー浴びちゃいなさいー」

母さんが台所の方から声をかける。しっかりと扉を閉めた俺はなるべく平静を装って適当に返事をする。

「タツ君は止めてくれて言ってるだろう……タオルある？」

「乾かしたのが畳んであるわよー。まだしまっていないから縁側においてあるからー」

相変わらず間延びした語尾。いつもと変わらない家。ちょっと落ち着いた。

タオルを取りに縁側へ向かう。そこから外を見渡してみるが、小学生くらいの女の子はどこにもいなかった。逃げ切れた、なんて甘い。今日これからしばらく油断できない。

……くそ、本当に嫌な汗だ。

例えこれからしばらく嫌な感じが広がると分かっていても、風呂上りはやはり気持ち良い。新しいシャツとトランク스에着替えて扇風機の前で転がっていた。

「タツ君。お風呂の窓、ちゃんと開けておかないとダメでしょー。湿気が逃げないわよー」

……しまった。開けてなかったな。夏場はただでさえムシムシして、カビがるんるんする季節だと言うのに。

「こんな中途半端にあげて！。覗きでもするつもりだったのー？」

……。なんだって？ 開いてる？ 俺は開けてない。開けてないぞ。

この日の晩も、前と同じでほとんど眠ることが出来なかった。

「そこに居る」

……カーテンをあけ、道路を見遣る。

俺の部屋は二階で、家の前を通る道路に面している。昨日のように縁側から見るよりも広い範囲を一望できる。……見える範囲には居ない。

気にしすぎるのは却^{かえ}って良くない。俺が向こうを認識していることを教えているようなものだ。そうなると憑き纏い方が激しくなり、実害を伴うことさえある。そう言う事を知らなかったガキの頃はよくうなされたり熱を出したりした。酷い時は連れて行かれそうになった。

それはまだ小学校に上がったばかりの頃だった。偶然目を合わせてしまった老婆の霊が昼も夜も俺の後ろにずっと居るようになって、体調を害してしばらく学校を休んでいたある日の真夜中だった。それまで見渡せば必ず俺の視界に入ってきたはずのそれが姿を消し、ああよかった、と一息ついていたときだった。

これでやつと熱も退く。明日からは安心して学校に行ける。

ガキとはかわいいものだ。勉強なんてイヤだと思っていたはずなのに、いざ行けなくなるとそこが恋しくなる。そんなほのぼのとしたことを考えていた。

横になっている布団の枕元から突如手が現れ、頭をつかまれた。そして一気に下の方へ引きずりこまれる。決してありえないはずの

感覚。あれは今でも背筋が凍る。子供ながらに、死ぬと思った。確実に殺されると。必死にもがいて身体から離れてたまるかとムキになって堪えていた。

ところが再び目が覚めた時には普通の朝だった。消耗しきって寝ていたらしい。どうして助かったのか、良く覚えていない。今でも分からない。

母さんもオヤジも俺のように「みえる人」ではないから、身内が助けてくれたのではないだろう。実力行使で連れて行こうとする奴が、ガキ一人抵抗した程度で諦めて離れていつてくれるなんて虫のいい話もない。今思い出しても思う。ああ言う連中は見えるだけの俺じゃ手に負いきれない。

ところであの夜の出来事で、一つだけ強く印象に残ったことがある。

なぜ最も強く印象に残ったのが「色」なのか、さっぱり覚えていない。

「紅」

周囲は完全な闇。目も堅く瞑り、俺の目に映るものなんてなかったはずなのに。

紅なんて、俺の周りに一切なかったはずなのに。
それなのに、俺の脳裏には強く真紅が焼き付けられていた。

ガキの頃は今よりももっと色々なモノが見えていた。きっとその色も霊的な何かなのだろぅが、それと同じ色を二度と目にすることは無かった。

ひとまず俺の近くに居ないことに胸をなでおろし、朝飯をいただいて登校する。昨日通った交差点、そこに昨日見た小学生の女の子はいなかった。

……

…

夏の校舎はムシムシと暑い。たまらないほどやる気を奪う。風が吹き込めばまだ頑張れないこともないが、大抵無風。エアコンを備え付けてくれ、と切に願う。扇風機でもいい。なんとかしてくれ、この不快指数を。席によってはプリントが風に舞ったりしてイラっとするにもなりそうだが、それは贅沢な悩みと言うことで黙殺してやる。だから、せめて……

叶わないに決まっている妄想をしながらふつと窓の外をみる。俺の席は窓側から二列目。座ったままでもグラウンドが見える位置だ。今の時間体育をしているクラスはない。女の子達が体操着姿で授業に臨んでいるのが見えたらちよつと得した気分になれたんだが……。ふつと鼻から息をついた、その直後。俺は人知れず凍りついた。

……居る。長袖を着た少女が、校庭に一人。

窓際の学生の何人かが俺と同じように外を見ていたが、首を傾げたりする奴はいなかった。

それから四日。家でさつきまで閉まっていたはずの窓が開いていたり、遠くにその姿を見かけたりすることが頻繁になった。そして遠くで見かけていたはずのそれは、少しずつだが確実に近づいてきている。気が重い。

前の日の晩、ただでさえ雰囲気が悪い上に非常に蒸し暑かったのでエアコンを28 設定でつけていた。ここ数日睡眠不足が続いていたので贅沢だと思いながらも決行。タイマーセットしておいたのでさらにエコには配慮している。十分に身体を休めるためには少しくらい贅沢させてもらわないと叶わない。

おかげで今朝は、とても快適な目覚めだった。そよそよと心地いい風が吹き込み、さわやかにまどろみから覚めた。

柔らかな風。カーテンがそれに揺れる布擦れの音が気持ちいい。

……
風？

……
開いている。

…

…

気付いた次の日から高校へ行く道筋、帰宅する道筋は一度として同じルートをとどつていない。この近隣の住人でも、俺がこの道を通って登下校するとは思ってもいないはずだ。

それなのに俺の進路の前にそれが居た。突然引き返したり、ルートを変えたりはしない。可能な限り無関心を装い、横を通過し学校を目指す。

行く上で必ず通らなくてはいけない橋の上、校門の前でもすれ違った。全て先回りされている。今のところは何とか平静を保っているが、いよいよ危ないかもしれない。

内心落ち着かないまま授業を受ける。先生に指され、答えるとき声が裏返った。教室は笑いに包まれたが、俺はそんなことでは和みきれない。

「高志。最近疲れてないか？」

おお、裕也が少し気を遣った。という事は傍目はためから見て俺は相当に疲労しているように見えていたということか。……そうだ。

「まあな…… いろいろ思うところが在るわけよ。

……おつし！ 金はまだあるから何人か誘ってカラオケにでも行こう！ お前もストレス解消に付き合えよ！」

今日は一人でいるのは危ない。朝、ついに俺の部屋の窓までが開いていた。自室でもあいつらはお構い無しに入ってくる。仲間と一緒に居れば多少は手を出してこなくなるはずだ。

-
-
-

今は友達に囲まれて、これくらいうるさくてかなわないくらいが丁度いい。連中の事に気を病まなくても済む。

ひとしきり全員が歌い盛り上がってきたところで俺はお手洗いに失礼した。部屋を出た廊下から先はさっきまでの喧騒が嘘みたいで、違う世界の出来事のように感じる。僅かに漏れる音がすこし気持ちいい。

233

……俺はなんで一人になった？

あの女の子が目の前に居る。無表情に目を見開いて。背筋に冷たいものが走る。息を忘れた。後ずさりすることもままならなかった。

手洗い場前の鏡にも映っている。この子から放たれている雰囲気と、季節はずれの長袖に気を取られなければまったく普通の人間としてみてしまうほどのリアル。だがこいつはもうすでに彼岸の住人だ。

俺を凝視したまま近づく。歩くことなくそのまま平行移動。一歩下がろうとした瞬間、手が届くほどの距離に一瞬で詰め寄せられた。俺は完全に凍りついた。

眼下の少女の顔の前に頭を引き寄せられる。力で抵抗することが全く出来なかった。生きた心地がしない。無理やり合わせさせられた視線を外すこともできない。表情のない見開かれた目と、これほどにない待ち侘びたと言わんばかりに上げられた口元のあまりのギヤップに、唾を飲み込むのが精一杯なほどに俺の体は疎^{すく}んでしまっていた。

生きた心地がしないまま、どれだけ時間が経っただろう。

オマエジャナイ…… オマエジャ……

落胆したようにそう言つて、両手で掴んで強引に引き寄せた俺の顔を離して、消えていった。

俺じゃない……？ それじゃあお前は一体何を探しているんだ。

もうお前に気付く人間なんてほとんどいないこの世界で、何を求めているんだ。

掴まれた顔を離された途端に後ろに倒れ、腰が碎けてしまつていた俺は息を乱し、答えのない眼前の虚空を見ていることしかできなかった。

「そこに居る」(後書き)

第五章おまけ、終了です。

高志さんを襲った少女の霊は一体何者で、何を探していて、どこに行ったんでしょう。まったく「みえない」れいちえるには理解の外。いつかこの子どもどこかでシェイドになって、死神に導かれるまで人に仇なすことになるのでしょうか。

それまでに探しているモノに出会って、救われると良いのですが

……

「邂逅」（前書き）

お待たせしました。第六章のはじまりです。

軋みながらも動きを止めない運命の歯車。裕也君の懺悔はいつまでも続きます。

「邂逅」

近頃本当によく外に出かけている。こんなことを言っているとまるで僕が引きこもりのように思われてしまう。まあ確かに部屋に籠ってPCの前に座らせていれば何時間だって平気だ。別に退屈することもないし、実際に数日家の外に出なかったことだってある。お母さんがご飯に呼ぶ時だけダイニングに降りて、ご飯の後は部屋に直行。そんな僕に仕事から帰って来たお父さんが「いい加減にしろ」と怒ったことがあった。……そりゃ当たり前前だ。今になれば分かる。あの時は反省の一つもなかったけど、本当にあの頃は僕の中の黒歴史だ……。実際のところ、外出することは嫌いじゃあない。雑踏の中に行くのは辟易してしまうこともあるけれど。

去年事故に遭って髪が黒くなるまでは、外出は別に苦行ではなかった。しかし僕の人生は一変。人ごみの中に入ることがこんなに怖い事だなんて、思いもしなかった。

遭遇したらどうしよう。

それが正視に耐えない事だったらどうしよう。

僕が手を下すところを見られないようにできるだろうか。

それに僕が巻き込まれたら？

万が一、それが知り合いだったとしたら……？

正直今だってすべてが僕の中で解決したわけじゃない。特に最後の項目。僕の最大の懸案事項はこれだった。

……だけど、考えていたってしょうがない。起きてしまったら、それに向き合うしか僕にはできないんだ。

運命を変えようとした。出来る限り回避出来はしないか、と。だけど今まで十件以上やって回避できた事例はない。一度として聞き入れてもらったことはない。そして、一つとしてどのようにその時を迎えるのか微かにでも分かった人は居なかった。

僕には分らない。運命を変える手立てが。YOUは相変わらず無駄なことだから止めろと諭す。「律」を変えるには莫大な「業」の力が必要なのだと。それこそ僕とYOUを入れ替え、レクイエムが初期化されてしまうほどの「業」の力が。僕一人の力でどうこう出来るような物では無い。そう言っ僕を説得する。

だけど対象者が運命に気付くことで僅かずつの変化が起こり、その小さな粒が大きな流れとなっ行き着く河口は初めと大きく異なる場所になる事があるかもしれない。

それを期待して、僕は無駄な努力を続ける。僕には無駄でいい。いつかどこかで誰かのために何か予測のつかないプラスの出来事に繋がれば。

そんな風に吹っ切ったところから外に出るのも大分気持ち軽い。今日も電車の窓から景色を見ていた。見慣れた看板がたくさん目に飛び込んでくるにつれ、最近ぜんぜん行ってなかったな、と懐かしさが胸に湧く。帰宅を急ぐ必要もないので途中下車。

ここはよく遊びに行っっていた街。ふらふらとあてもなく歩いているうちにふと思出した。十人以上もの死者が出た事件があったはずだ。ニュースで聞いて以来僕は一つその続報を見なかったのて詳細はまったく不明だ。けどいずれそこにシェイドが現れるかもしれない。下見を兼ねてそのビルがどこにあるか調べておこう。もうすぐ日も沈むから少しだけ急ごうか。

…

…

そんなに時間はかからなかった。結構派手な事件だったからいろいろ話題に上るらしく、運試しもかねて立ち寄った宝くじ売り場でちょっと聞いただけでわかった。ところがどこにあるかだけ教えてくれるだけではなくて、やたらと売り場のおばさんが僕に話しかけてくるからたじたじだ。飲食店とニユースでは言っていたと思うが、そこはバーだったそうだ。

「まーねー、その店長さんがお若いのにずいぶんとしつかりしてみえて。物腰丁寧で親切な人だったのよ。若い人も、年配の人も、男も女も関係なしに人気だったのにもったいなかったわあ……。ホツツントに残念。え？ 詳しいな、って？ やーねー。イケメンのいる人気店にいかないなんて、損としか言えないわよあ。……そうだ、何ならお兄さんにもお兄さんが向いてそうなお店紹介してあげようか？ そしたらお姉さん（笑）も常連になってもいいわよあ？」

い、いえ、結構です。大分友達以外との接し方に慣れてきたとは言え、ここまでのレベルに達せるかと言われるととても自信ないです。それに接し方と言っても就職活動での受け答えがメインだから、純粹に接客となると厳しいと思う。引きつった笑顔を向けたまま、何かやたらと残念そうにしているお姉さん（笑）とお別れして教えてもらったビルへと向かう。

そこは雑居ビルだった。地上の部分にも他の事務所やら店やらが入っているのでビルの中に入ること自体は禁止されていなかった。地下への階段にはテープが張られ、立ち入り禁止にされている。今日の調査が終わったのか、それともはじめからなのか、見張りや警備の人はいなかった。

事故にしろ事件にしろ、ここではたくさんの非業の死があった。その魂がここに閉じ込められていたとしても、僕には見えない。居ることまでしかわからない。きっとYOUなら徒労に終わる無駄なことはするな、と忠告するだろう。だけど、この前みたいに何かできるかもしれない。

……それだけじゃない。何か、僕を引き寄せるものがこの奥にある。胸騒ぎにも似た不思議な感覚。テープをくぐって階段に足を踏み入れた。

瞬間、あの感覚が広がる。音が消え、妙な緊張感が漂うシェイドの領域。

まさかここで起きた事件は、シェイドによるものなのか？
だがここは僕達が大学帰りに寄っていく程度のあるところにある街だ。YOUが感知できる範囲内だと思う。ここ二、三週間の間も頻繁に大学に足を運んでいたのだ。なのにこれまでわからなかったとでもいうのか。それは考えがたい。

ならば答えは一つ。事故に巻き込まれた人の魂がたった今シェイドになったのだ。僕が今感じていたのは、その変性の瞬間なのか。

「違う……。気をつける、これは今発生したものではない。成ったばかりの不安定さが無い。俺にも今までわからなかった。俺達に気付き、領域を広げたのだろう。こんなことが…… あると言っのか」

YOUの感知を免れてきた何かがこの先で待っているだって？

つまりここに居た人間を貪^{むさぼ}ったのは同じ人間ではなく、彼岸の住人が相手にしなくてはいけないモノはただでさえ怪物だと言っのに、この先に居るのは僕の乏しい想像を上回る何か。背筋が凍る。だけど、逃げるわけにいかない。被害を広げることとはできない。まして、僕たちなら救うことができる魂がいるというのなら放っておけない。

……そう決めたんだ。

広げた左掌に右手を添える。左手から現れた黒色の紋の刻まれた金色の柄を握り、腕を広げるようにして引き抜く。先端から中程までの辺りまでが桃色に染まった巨大な刃を持つレクイエム、僕の決意。持ち物である鞆に財布とケータイを放り込み、階段を下りたところにある店内入り口のドアの前に置いて、異界への門を押し開ける。……鍵がかかっていない。そのまま足を踏み入れた。

……

：

ものすごい湿気と異臭。あふれ出したと言う水は汲み出されていたが、まだ水溜りがたくさん残っている。確かあの事件から二十日近く経つと言うのにこんなに残っているものなのか。換気の悪い地下のせいか、この空間にはカビの臭いと何か腐ったような臭いが入り混じり、吐き気をもよおす。非常口の照明以外明かりがないのでほとんど真っ暗だ。こんなこともあるうかと、途中の百円ショップで買った小さな懐中電灯で照らして見ると壁に大穴があき、奥の配管がむき出しになっている。かなりの範囲だ。ニユースで言っていたように酷い有様。店内に居たほぼ全員が死亡したと言うのも肯ける。一体どんなシェイドがここに……？

歩みを進める。水溜りに足を踏み入れる度にぴちゃ、ぴちゃと足音が響き一層に不気味さが増す。耳を澄ませ、肌感覚を尖らせる。何かのマンガで見たことがある。光がほとんどないのだから空気の動きだけでも感じなければ。

……そんな達人技、できるとは思わない。だがそんなこと言っている場合ではない。部屋中に意識を張り巡らせ、ここにいるはずのシェイドの襲撃に備えた。気を張り詰めたまま奥まで進む。広いホールの真ん中まで行ったあたりで一度足を止めた。常識が通用しない相手だ。背にしたその壁から襲われる事だつてある。中央から全体を把握していた方が幾分か対処しやすいだろう。

どこだ……？ どこに居る……？

本当二…… 来テクレタ……

不意に声がした。ビックリして懐中電灯を落としてしまった。だが、拾っている場合ではない。正面には何も見えないので急いで後ろを振り返る。レクイエムはしっかり構えた状態だ。今僕とYOU以外の声があるとすれば、その出处はこの空間の主。だが、声に敵意がない。

振り返った僕の目に映る声の主の姿。

うつすらと光った、透き通った鎧をまとい羽衣を漂わせる姿。

恐ろしいはずなのに、美しいと感じる神秘。

闇に浮かぶ金色の瞳をした、少し短めのきれいな茶色の髪の少女。

ついに見つけた。……こんなところに、居たんだ。

何故ここに居るのだろうと言う疑問が浮かぶ。そして同時に理解されるこの現場に彼女が居ると言うことの意味。僕が聞こうとすることがわかっていたのだろう。自分から話し始めた。

……

復讐を果たしたのだ。彼女を殺した者たちに。
ここが、彼女の命が奪われた場所。

この子はこの場で行われていたという不定期開催殺人パーティーの犠牲者。男女問わず、メンバーが連れてきた人を数々の方法で傷つけ、苦しみ、絶望しながら息絶えるのを観て楽しむ。警察に押収されていた物品にはそのための道具が多数あったという。水で小さなモデルを作って僕に見せる。その名称のほとんどを知らないが、使い方は想像できる。

……身の毛もよだつ。余りの不快感に内臓のすべてが反転するかのような感覚を受ける。

彼女の腹部に大きく開いたままの穴。これが本当に血の通った人間のすることなのか？

僕の怒りとも失望ともつかない葛藤を他所に、少女はどこをみているのかよく分からない目線のまま話を続けた。

彼女の空虚な両目にあるのは、人間と言う存在への失望、世界への呪い。

彼女の口から紡がれる出来事は、地獄の宴の終焉と、はじまりを告げる唄声だった。

「禍神（まがかみ）」

少女は眼下の人の群れを見下ろしていた。

この中にいるはずの者を探していた。

この街のどこかに存在するあの人間に対する生前の彼女の記憶。
それすらあの者によって築かれた虚構でないのなら。

今の彼女を、宙を漂い羽衣をなびかせるその姿を、彼女が失った
日常に生ける者は見ることができない。誰にも気付かれること無く
彼女は飛び続けた。頭上を舞い、雑踏の間を縫っていく。

……その姿に、誰一人、気付くこと無く。

どれほど飛んだだろう。時折彼女を襲う抗いがたい眠気。河川や
公園の噴水、そういつた所は彼女にこれほどにない安息を与えた。
ただ、一度眠りにつくと目覚めた時一体どれほどの時が過ぎたのか
彼女に教えるものがない。

日が出ているのか、月が出ているのか。それしかわからない。

今日のように今日ではなく、明日のように明日ではない。

彼女の居るところは全く異なる時間が流れ、彼女に残った人とし
ての理性をやわらかく溶かしていく。

金色に変わった、闇夜に浮かぶ彼女の瞳は無機質なものだ。温かくも、冷たくもない。果たして初めからそうだっただろうか。眠りにつくまでずっと監視カメラの如く眼下を捉え続けていた。彼女が独り漂うようになってから幾度の日、幾度の月が昇ったのだろう。もうすぐ日の光の前にその姿を晒すのを恥じていた月が、その姿を堂々と現す頃。彼女の目は見開かれ、動揺を映し出していた。

見つけた。ついに見つけた。

即座にそうする、と心に決めていた。魂に誓っていた。

……それなのに、できない。

自分はこのようになる必要などなかった。すべて押し付けられた痛み。それに復讐するはずだった。いや、せねばならない。

それなのに……

しばらく迷い、彼女は決めた。見失いかけた人物の後を宙から追いかけて、その者のやや後方の頭上を憑いていく。

……

あれは何かの間違い。

幼い頃から姉と慕った者がそんなことをするはずがない。

自分をこのような姿にした張本人は、きつと別に居る。

……そんなありもしないわずかな期待を捨てきれなかったがために、苦しむ道をあえて選んだ。

だがそれは所詮、彼女が見たかった夢。
夢は醒めてしまうものだった。

その日その人間の傍^{かたわ}らには誰も居なかった。一人で通りを歩いていく。口元を少し上げたその顔はそこそこ上機嫌に見えた。いつも見てきて、憧れた。こんな風に胸を張って笑顔で生きていきたい。その姿は今も変わらず、そしてそれ故彼女の心を締め上げる。溶けきることなく残っていた理性。人の証。初めから無ければ痛みを知ることなかっただろうに。それが何よりも哀れであった。

彼女が憑いた人間はそのまましばらく歩き、笑顔のままある建物の中に入ってしまった。彼女は狼狽した。この建物に、そしてその人間が入っていった先に見覚えがある。

止まって動いていないはずの彼女の鼓動。そして呼吸。しかしそれが乱れた。

間違い、あれは間違い。そう言い聞かせ彼女も地下へと潜る。

入っていった空間にはあの時のように大勢の大人たちが居た。その中に居る自分と同じくらいの歳の一人の少女。傍らに居るのはスーツ姿の若い男性だった。言葉巧みに少女を和ませ、優しい微笑が笑顔を誘う。安心して少女が飲み物に口をつけると、間もなくテーブルの上に崩れた。テーブルに突っ伏す少女の姿にかつての自分の姿が重なる。にわかにはわづき、大人たちに動きが出た。

ある者はいそいそとテーブル、椅子を片付けはじめ、ある者は奥の部屋に行く。そして奥の部屋から持ち出された多数の道具を組んでいく。眠った少女と同じテーブルに着いていた男は少女を抱え起こして中央へと運び、手枷をつけた。

この空間に居る大人たちの年齢は多様。若い者も、そうでない者も、男も、女も居る。その全員に共通していたのが、これからの事を待ち焦がれる満面の笑み。

あの日の自分を見ているかのように錯覚する。宙に浮いたまま座り込み、両手で頭を抱えて髪を掻き毟り始めた。彼女の喉の奥から発せられる混乱の極みに達した叫びがこの空間に響き渡るが、誰一人として気が付かない。

ようやく彼女は確信した。

それを認めるしかなかった。

自分の痛みは、自分の死は、この空間では単なる娯楽。

嗚咽とともに憂いた目から涙をこぼし、うなだれたまま立ち上がる。再び顔を上げた彼女の瞳には怒りの炎だけが宿されていた。どれだけ苦しみ、悲しもうと、その一切はここにいる物には届かない。彼女の結論が実行に移される。

これらは生きている必要がない。

力を持つ彼女にとって、破壊ほど簡単なものはなかった。彼女の感覚は知っていた。感じる方向に向かって羽衣を振る。突如として響き渡る轟音とともに壁が崩れ落ち、コンクリートに守られていた水の通路がむき出しになった。瓦礫の方へ左腕を伸ばし、^{てのひら}掌を向ける。同時に金属製の管がすべてはじけた。

あふれ出る大量の水。今この空間を満たすのは彼女の怒りと、そこから津波の如く押し寄せる混沌。

何が起きたのか誰一人理解できるはずがない。唯一理解できるのは、この場に居てはいけないと言う生命の持つ本能からの訴え。だがそれを彼女は決して許さない。

入り口を封鎖し、そこから始まるのは殺戮。

溺死、圧殺にとどまらない数々の死。ある物は飲み込ませられた水によって身体を内側から食い破られた。ある物は気化熱で体温を一瞬にして奪い取られた。徐々に生命活動が低下し、時間をかけて死に至っていく。必死に扉を開けようとする物がいた。瓦礫の一つ

に水を纏わせそれで殴りつけて腕を潰し、水の縄で足を括りそのまま振り回して壁にぶつけた。二三度続けるとすぐに動かなくなった。それでも諦めない別の物が鍵と戦っている。今度は逆さ吊りにし、巻きつけた羽衣で手足を紙細工の如く一本一本引き千切っていく。失血しきるまで悲鳴をあげさせられた挙げ句、縊^{くも}り殺された。

彼女を見ることのできない彼らには、死に逝く者が水とダンスに興じているようにしか見えなかっただろう。ここにいた物が間際に発狂したとしても、何ら不思議はない。

次々と作られる陰惨な姿を目にしても、それでもなお生き延びようと足掻き続ける物共。

どうしてその気持ちを私に向けてくれなかったの？

同じように怖かったんだよ？

自分は怖いと思わないから、私に手を差し伸べなかったんじゃないのか？

……いや、いい。もうこれらとは思考を重ねるだけ無駄だ。

彼女は考えることを止め、ただ機械的に掃除をし続けた。

外への出口の前に水の壁を作り出し、近寄る物は水の槍で蜂の巣にする。

すべてに与えられる惨たらしい死。

ただ一人、違う物があつた。それは一人冷静で、無駄に動くことなく突破口がどこかにないか集中して探していた。初めはその物も何がこの怪異の原因になっていたのか全く見えていなかった。最後の一つとして残された時、いよいよ自分の番となっても絶望せず、

むしろその状況に悦を見出し始めてきた時、それは何かに気が付いた。惨劇の中心にぼんやりと人影が見え始め、姿をはつきりとさせていく。

短めのきれいな茶色の髪をした少女が羽衣を漂わせ、輝く鎧を身に纏う。

見覚えのあるその在り得ない存在に意識をとられ、動きが止まる。闇夜に浮かぶ金色の瞳こころに変わった彼女と目が合った。

「ゆーちゃん……？ まさ」

言い終わる前に、ぐちゃん、と潰れた音が鳴る。羽衣と共に壁に叩きつけられた女は鎖骨から下、臍へその辺りまでが平らになり壁に塗りつけられ、まったく動くことはなかった。

……すべてを終えた彼女は狂気に満ちたさわやかな笑顔を湛えていた。

……

…

その光景を想像するだけで恐ろしかった。

ただ一人生き残ったのは、連れてこられた少女だけ。だが薬が切れ目を覚ましたその娘は、目の前に広がった光景を見て心が壊れてしまったという。しかしその事実すら僕の目の前に居る少女には何の後悔も与えていない。……連れてこられた少女は、彼女と違って生きているのだから。

深い沼に沈み込んだ彼女の心は満たされていた。彼女が味わった恐怖、苦しみを、与えた物に分けてあげることができたのだ。

……私、コウナレテ嬉シイ。

……裏切ツタアノ女ニ復讐スルコトガデキタ。

タクサンノゴミモ片付ケラレタ。

ソレニ……同ジ目ニ遭ウ子ヲ、モウ出サナクテ良クナッタ。

ダケド、コレカラハドウシタイノ……？

ソレヲ聞キタクテ、アナタヲ待ツテイタ……。

この子はもうこれ以上力を無闇に振るうことは無い。理由や理屈なんてないが、確信できる。

ならば、もうこれ以上この悲しい世界に居ない方がいい。

……だったら僕にできることは、これしかない。

「もう、力を使っちゃ駄目だ。君のその力は、あつてはいけない力なんだ。僕が……僕達が導いてあげる。本来君が行くべきだった、魂の還るところへ」

レクイエムを構える。途端に彼女の顔色が変わる。

イヤ！ 絶対ニイヤ！

来ナイデ…… モウ痛イノハ…… 苦シイノハ、絶対ニイヤ！

「苦しくない！ 大丈夫だよ！」

信ジナイ…… ヤッパリ本当ハアイツラト同ジナノ……？

アンナ風ニ優シク聞イテクレタノハ、嘘ダッタノ……？ ソレ以
上来ナイデ……

ダメか……。この子は相当怯えている。不信感の塊だ。今導くこ
とは不可能だ。もし強引に行ったとしたら、逆に僕が殺されてしま
いかねない。それだけは避けないと。

「……わかった、しない」

目を閉じたままかぶりを振って、レクイエムを消した。目を開け
て彼女を見たが、不信感は拭われていそうにない。一体どうしたら
導いてあげられるだろう。

信ジナイ…… モウ誰も信ジナイ……

ダケド、私ニ氣付イテクレルノハ……

パパモ、ママモ…… キットモウ誰も……

泣き出してしまった。そんなつもりは無かったのだが。あー、本当に扱いにくいな……。どうして欲しいんだろう。

「ならば、憑いてこい。お前が見定めればいい」

この閉ざされた空間に声が響く。

僕は言っていない。彼女の声でもない。YOUだ。っていうか、僕以外にYOUの声が届くのか？ 少女が顔を上げたところを見ると、聞こえているようだった。いや、僕の中にいるYOUの声が聞こえているんじゃない。気付いて手を当てると口が勝手に動いている。僕の口からYOUの言葉が出ているのか。

「この男が言っているのは本当だ。だがどうしても信じられぬというのなら、お前自身がこの男の行いを見て、判断すればいい」

「な、何言ってるんだ！ この子、ブレイズなんだろう？！」

おかしい、僕の声が出ない。口はパクパクと僕の意に反して動いている。おいおいYOU、いつの間にこんなことが出来るようになったんだよ！ 念じまくって必死に抗議するが、YOUの結論は曲がらない。

「関係ない。幸い理性は保たれ、己から力を振るうことはない。も

しもこのまま放っておき理性はおろか意思まで消失した場合、本当に手に負えなくなる……。俺達の管理下にあるのが最良だ」

—そうかもしれないけど…… でも—

やはり声は出ず、YOUには念で語りかけるしかない。

一人の人間から発せられている言葉なのだが、言葉と違って身体や表情は明らかに狼狽^{うろた}えた様子で、意志と行動が伴わずちぐはぐでとても滑稽なことになっている。少女も気付いたようだ。

アナタ…… 一人ナノニ、二人……？

……説明がややこしいことになりそうだ。頭をかきながらため息を一つつくしかない。とりあえずこの場所が行われていたことだけでなく、今では臭い自体で気分が悪い。

「場所…… 変えよっか」

良かった、ようやく僕の思った通りに舌が動きだした。両手を上にあげて危害を加えるつもりはない事を示しながら非常口のランプがついた出入り口に向かって歩を進める。

「……それから、お願いだからYOUも僕の口を使って変なことを
言わないでくれよ」

わかった、と言う一言は結局得られなかった。心配事項が一つ追加だ。ため息が止まるところを知らない。

「無言」

困ったことになった。決意したことに揺るぎはない。この手で導けるもの、救えるものに対しては僕の出来る限りの努力をする。だけれど……

「死神憑きのうえ、崇り神憑きか……」

本来共存しそうにないものが一緒に居る。一体なんだ。何なんだ。敵視しあっているわけではないので、二人とも普段はとももおとなしい。まあ死神の力を持たないYOUはもとも姿を現すことはまずないし、必要でなければ僕にだって話しかけてくることもない。優奈はたいていは休眠状態にあり、姿を消して水に溶け込んでいる。目覚めた時も彼女は僕の中に入り込んでいるわけではないので、僕の傍に浮いていたり後ろについて歩いていたり、結構自由な状態だ。優奈がいつ休眠状態、あるいは覚醒状態になってもいいように水を入れたペットボトルを必ず持ち歩いている。うっかり飲んでしまいそうだ。

「優奈」とはあのブレイズの少女の名前だ。「ユウ」が三人になってしまった。奇妙なことだ。僕に憑いてきてから通常優奈は水を押し固めて造った鎧を身に着けていない。普段は水の羽衣だけを漂わせている。

彼女は僕のところに来るまでのおおよそ一か月の間、鏡を見る機会が無かったという。なので家の姿見の前に連れて行って見たが、やはり僕には鏡に映る彼女の姿は見えなかった。だが優奈には自分の姿が見えているらしい。自分の姿を見て、改めて涙した。その時鎧を解いて羽衣だけとなり、自分に付けられた痛ましい傷を覆っていた。すると驚くことに、生前のような傷のない姿に戻ってしまった。

……屈折を利用し傷を見えないようにしたようだ。気づけば彼女は簡単な衣服を身に纏っている。白地なのだが、時々虹色に輝く。水の羽衣の一部を加工し、光を細かく乱反射させてそうしたと言う。自分が裸の状態だったことを気にしたらしい。

扱える現象がどんどん複雑化している。シェイド、ブレイズとしての成長の証。しかし……
傷が消えて痛々しくなく、きれいな状態の彼女の姿を見た僕にとってはちよつと残念だ。

こんなかわいい子のきれいな姿を、男だったら見たくないはずがないじゃないか……

……でも当たり前ですね。ごめんなさい。

「ねえ、裕也さん。やっぱり私、自分の身体を外に出してあげたい……。たとえどんなになつていたとしても。パパとママのところに……返してあげたい」

僕に憑いてきて五日目のこと。今日まで優奈の遺体があることはなかった。捨てられたのはあの用水池で間違いない。僕もそうしてあげたい。だが僕がそれを通報して捜索を頼んで本当に発見されたら、僕は一体どんな言い訳をしただろう。

……超能力です、なんて馬鹿げている。それはそのスジ専門の人の役目だ。僕が用水池に遺体が沈んでいることを知るに至ったうまい筋書きを考えなくてはいけないが、行方不明からすでに四週間以上経過しているからそれも難しい。どうしてもっと早く通報しなかったのだ、とツツコまれたらまごついて、そのまましょっ引かれるのが関の山だ。

「……大丈夫。水の中のことなら、私が全部できる……。私が水の中から出して岸にあげるから、裕也さんはそこを見つけたってことにしてそのまま通報してくれたら……」

……本当に優しい子だったんだ。僕が困っているのに気付いてくれた。どうしてこんな子がこのような目に遭わなくてはいけないんだ。世の中のすべてを呪いたくなる。

だけど、僕の行動範囲からしてあの用水池に行くことなんてありえない。たまたま偶然、なんて理由にならない。僕が刑事ならものすごく容疑者扱いをして、細かく一から調べ上げるだろう。あそこの近くに行く用事なんて……。何か遊びにいけるような施設とかがあれば好都合なんだが。

地図で調べてみると、墓地があった。

……

そうだ、写真だ！

卒論の関係でお寺に取材に行った時に、墓地に行つて直接お墓の説明を受けたことがあったが、資料としての写真を撮らなかった。何だか罰当たりな気がしたからだ。今もその気持ちは変わっていない。

……何かが写つても困るし。

だけど、これは使える。

切羽詰まった（泣）卒論の資料集め、近くの雰囲気も合わせての調査。

言い訳として絶好だ。

思い立った僕は、早速父の車を借りていった。アリバイ作りのために地図で見つけた最寄の墓地へ最初に立ち寄った。写真も撮ろうかと思つたがやっぱりそれは止めておく。代わりに墓石の配列などをメモしていった。何かの資料に使えるかもしれないし。使えないならそれでもいい。そして目的地である彼女の居る用水池の近くで車を止め、林に入っていく。あの日へし折られた木々はまだそこにあった。あの時は恐怖の象徴でしかなかった優奈は、今ではとてもおとなしく、祟りそのものとは到底思えない。

「じゃあ、よろしく頼むよ」

優奈は浮遊したまま池の中心まで進み、両腕を開いて羽衣を水面に伸ばした。池には何の変化も見られなかったが、少しすると黒い何かが水面を揺らした。それがだんだん岸によってくる。着岸したそれを僕は水から揚げた。……非常に重い。

黒いビニール袋。その中に大きなものが入っている。……中に入っているものはわかっていて。開けるのがこんなに怖い物なんて、今まで無かった。触れた時僕の手に伝わる、妙な弾力感。

……水の感触ではない。そしてその奥の少し固い手ごたえ。思わず優奈を見る。戸惑う僕の顔を見た彼女は、とても悲しそうな顔をして頷いた。

決心して袋の口を破り開ける。色が変わった水が流れ出した。思わず背筋が凍る。黒いビニール袋の内側にはさらに土嚢のような袋があつて、歪な形をしていた。それを持ってきた大型のハサミで切り開く。大きく開け、中に外の光を入れてあげるとその中に居たのは、変わり果てた彼女。……四週の間彼女が居たのは、夏の水の中。傷みきっている。縛るのに使われたと思われるロープが一部身体に食い込んで、さらに酷い様子になっていた。覚悟していたのに、直視できない。

……とても本人の目に触れさせることなんかできない。

……

…

「もしもし…… 警察ですか……？」

すべて計画の通りに行動している。だが、想像よりもはるかに重い。かける言葉もなく、ただ計画の通りに行動している。

優奈は声を上げて泣いた。両手で顔を覆い泣いている彼女を見た僕は、反射的に彼女の肩に手をやった。

直後、僕は息を呑んだ。

…… すりぬけてしまう。

彼女は僕を打ち据え、掴み上げ、踏みつけることができたというのに。僕はこの子が恐れ、忌み嫌うレクイエム以外で触れることもできない。慰めてあげることもしない。

そして次の瞬間、僕は伸ばした手を引っ込めるしかなかった。

「ごめんなさい…… パパ、ママ…… 本当に…… ごめんなさい……」

かける言葉が無い。いや、僕に言葉をかける資格なんか、ない。
励ますことも、慰めることも……

この現実を見せたら、彼女がどんなに苦しむだろう。

……そんな当たり前のことしか頭になかった。

だけど優奈の涙は、そんなものではない。

この子だけに留まらない、さらに奥に広がる人たちに突き刺さる
悲しみ。

それを悼む、限りなく重い涙。

……まったく胸によぎらなかった。

今までだって、その当事者の悲劇を避ける事をずっと考えていた。
それが周りの人達の悲しみ、憂いを取り去る最良の手段なのは間違
いない。だけど、実際悲劇が起きた後の事を考えたことなんて……
無かったんだ……。

こんな中途半端な僕が、この子を安らかな世界へ導いてあげるこ
となんてできるだろうか。

「嫌悪」

しばらくしてパトカーが一台やってきた。林の外で待っていた僕はそのまま二人の警察官を現場へと案内する。年配の男性とまだ若い男性の二人。水揚げされた黒いビニール袋を指し、確認してもらう。僕は少し離れたところで待つ。

ビニール袋を手袋をした手でめくり、ポケットから取り出した棒で麻袋の敗れたところを軽く開いて中を確認する。顔を顰めた年配の方が本部に連絡を入れるように若い男性に指示した。歯切れよく返事をした警官は帽子をかぶりなおして僕の脇を駆け抜けていく。ふう、とため息をついて年配の警官が立ち上がり僕の方に戻ってきた。

「驚かれたでしょう？」

「それは…… もう……」

覚悟を決めていたが、人の想像力なんて本当にちつぽけなものだと思い知らされた。どれだけ自分が考えている気になっても現実はそのような物をあざ笑うかのようにかき消してくる。そんな中で失礼だけれども、と断りが入り、簡単に僕の取調べが始まった。どこで発見したか、最初に見たときどんな状態だったか、見つけた場所から動かしていないか。どれも嘘をつく必要も理由もない。すべて見たままに話した。

……誰も優奈を見ることができない。岸に上がった袋を見つけたところからだけでいい。

若い警官が戻ってきて、三十分くらいで鑑識が到着すると報告す

る。こんな重大事件の発見者と言う立場に徹する僕はご協力願われ解放されることは無かった。

優奈の遺体を回収し、四週間も経っているから不必要にも感じる現場の検証を始めた。うっかり「四週間」と言う単語が口から滑り落ちないように極力無言を通す。そもそも、何か話すような雰囲気でも心境でもない。むしろその方が楽だった。僕は、優奈に何をしてあげられるのだろう。考えても考えても、僕の思考は袋小路から出てこない。

調査を続ける警察の人達を残し、僕は署に同行するためパトカーに乗せられた。

……久しぶりだ。前のようになんかなり強い口調で問い詰められると思ったが、今回はなんだかマイルドだ。どうしてあの池に行ったのか、あらかじめ答えを用意しておいた質問をやっぱりされた。答えてみると、さらにどんどん立ち入った話をされていく。当然なのだが向こうにとっても何か矛盾点を感じることはないようで、とてもスムーズに話が流れていく。

池を離れてから移動時間、待ち時間を合わせて二時間くらいはたつただろうか。疲れた。僕が失礼を承知の上で一つ大きいため息をついたその時、僕の取調べを行っていた刑事さんのケータイに電話がかかってきた。小休止タイムと思ったのだが、すぐに話が済んで再開。

……刑事さんの顔色が何だかさっきまでと違う。何か冷たいような気がする。

「三岳さん、アンタ、今日まであそこに行ったことはないって言っ

てたね」

「はい」

「……アンタ、釣りは好きかい？ 今朝行つてたりしてないかい？ ああいう池みたいなところに」

「いえ？ してませんし、滅多にしませんけど」

なんか質問が変だ。今回の件と関係のない僕の話題。過去に何度か現場に行くわし調書をとられたことはあるが、今までそういう質問をされたことは無い。

「三岳さん…… ちゃんとホントのことだけ言ってくれよ。さっきの電話な、今朝の今朝まであの池で何も見ていないという情報だったんだ。毎朝散歩であそこに行く人があってな。イヌを連れて、だ。そんな人が知らん、そんなもの無かつたって言ってるんだ。それなのにどうして昼になる前に出て行ったアンタが寄る時間に合わせたように都合よく浮かんで、それも岸辺にあつたっていうんだ？ まあ、袋が浮いていた、って言う通報なら分からなくてもないが……」

「そんなこと言われたって…… 行ってみたらあつた、としか……」

しまった、そうか、僕以外の人がああ林に出入りすることだってある。しかも毎朝だって？ ああ、そう言う事前の調査もしておくべきだった。今日突然あそこに行くからこそ僕に疑いが向けられな一と思つていたのに。少し面倒な事になってきた。僕の無言が長く続くのに痺れを切らしたように刑事さんが言葉を継ぐ。

「……じゃあ、どこかであんな状態になるまで放つてあつた物を、アンタが行くちよつと前に『誰か』が『置いて』いった、って言うことになるよな？」

「え……？」

「あそこらへんは車通りも人通りもごく少ない。それに道は一本

道だからな。車を通ったかどうかは意外とすぐわかるんだよ。三岳さんが来るちよつと前までに通った車はないそうだ」

「ちよ、ちよつとまつて、いくらなんでもそんなわけ」

まずい。一番なつてほしくない流れだ。

「三岳さん…… アンタが運んできたんじゃないのか？」

「だ、だったら車を調べてくださいよ！ あんな水の入った袋のせたら、濡れたりしてすぐわかるでしょ？ それに一人でできる重さじゃない！」

「袋ごと何かに包めば良い。ガイシャは小柄でおそらく女性とのことだし、それに水を入れるのは池についてからでいい。一人でできない事もないし、俺らが呼ばれて行くまでの間に包んでたモンを処分したんだろ？ 燃やすとか、沈めるとか、埋めるとか。探せばわかるから指示してある。大きなポリ袋がありや、すぐできそうだ。違うかい？ ああ、慌てなくていい。出てこなけりや違ったってことだ。待てばいいさ」

すごい。完全に僕が犯人になつている。ここまで苛立ちはなかったが、優奈が揚げてくれたと言う本当のことを言えない以上僕もすぐに次の手が思い浮かばず、少しずつ焦りを感じてきた。

「アンタなら簡単にできるんだよ。ちゃんと言いなよ？ その方が面倒がなくていい」

「だから！ 誰が好き好んであんな物、っ！」

……僕は今、何て言った？

拳動が不審に思われたっていい。僕は思わず後ろを見渡し、優奈を探した。

彼女はまだ起きていて、僕の左後ろのあたりに浮いていた。僕と目が合いさつきまでとは違う深い悲しみを浮かべて顔を伏せる。そんな彼女を前に、僕は目を背けるしかなく、喉の奥は締め付けられてそれ以上出てくる言葉はなかった。

なんてことを…… 言っただ……

僕が裏切ったから、この子は今も苦しんでいる。そうだと言っのに僕は……

さらにどれだけ彼女を悲しませたら気が済むんだ。

自分の無意識が許せない。僕の言葉が、彼女の心まで殺してしま
う。

……

…

「ごめん……」

対象がない。だが、その一言だけでも出さないと、胸が苦しくてたまらない。優奈はあのあとしばらくして休眠状態になった。ひよっとしたらしばらくずっと起きてこないかもしれない。

……いや、起きたらすぐにでも僕のそばから離れてしまうことだってありうる。

……そのくらい彼女を傷つけてしまった。

焦りだとか、苛立ちなんか理由にならない。

僕は結局逮捕されなかったが、疑いは持たれたままだ。だけど今のところ僕の話に矛盾があるところもなく、もともと任意同行で話だけ、ということだったから捕まってしまうことはなかった。まさかあんな形で僕の方に疑いが向き、それを決定付けるために話が持っていかれるなんて思いもしなかった。この分だとあの遺体が優奈のもので、死後一カ月くらいと特定されたら問答無用で急転直下に僕が犯人になってしまう。

彼女が行方不明になったその日の僕のアリバイは完全にゼロどころか、深夜に原付を借りに行ったりとか挙動が不審すぎる。不審すぎる怪我もしている。マズイ。しかも真犯人たちはすでに彼女の手で処分され、僕が自分の手で容疑を拭い去らなければならない。

……できるだろうか。

「裕ちゃん、大丈夫？ お母さん、ちつとも疑ってないわよ。当たり前じゃない。……前もそんなことがあったけど、結局違ったでしょ？ 今はちよつとだけ辛い運勢に向いてるだけよ。事故にあつてからね。」

そんな時こそ、Keep your smileよ！ 何にもしないんだから、当然じゃない。いつも言ってるでしょ。

Take it easy！ You'll have good
bless soon. So, don't worry
any more！ てね」

……母が励ましてくれている。僕は傷ついてないから別に入ってきてくれても構わなかったのだが、扉越した。

今までずっと、誰かが支えて助けてくれた。これからもきつと。

その境遇が、今は心に痛い。

そう信じていた人が報われず、そんなことを意識したこともなかった、当然だと思っていた自分は死なず生き返り、のうのうと日々を過ごしている。

そんな僕だったから、あんな言葉が出たに違いない。

ふざけるな。

言葉は心を殺す。だけど、言葉でしか癒せない。僕は彼女に触れられない。

僕の言葉で…… できるのだろうか。

「嫌悪」(後書き)

裕也ママの実践英会話！

作中の英文ですが、和訳するとこうなります。

「気にしない気にしない！　きっとすぐ良いことあるわよ！　だから、心配しないで」

まあ簡単な日用英語ですので解説はいらないかも……

ともかく。自己嫌悪の真つただ中の裕也君はどうなっていくのでしょうか。

「ただいま」

さらに五日後。警察が直接僕の家に来てきた。それまでの間も電話があつて、任意で、と言われたがほぼ強制的に現場検証に二度召集された。その場では特に追及されたりすることはなく、僕は日常を過ごしていた。無実をあえて主張することはしない。無理だ。医療記録なんかもとられたら言い訳なんてできない。いよいよ連行されるか、と覚悟を決める。ところが遺体遺棄事件と僕はまったくの無関係で、大変申し訳ないことをした、と言う。遺体の身元、僕の通っている大学、大学での研究、友人を含めた僕の身辺、そして僕につけていた監視の結果、不審な点、不審な行動がなかったとも言われた。怪我の件は何故か不問。これが一番不審なはずなのに、全く話題に上らなかった。

初日に僕の取り調べをした刑事さんが玄関先で僕に謝罪し、ちょっとした菓子折りを手渡して帰っていった。

……想像はしていたが本当に監視がいたんだ。ドラマみたいだ。

そう言えば怪我の事だけじゃなく原付を借りた事も話題に出なかった。高志は何も言わなかったのか……。

僕は本当に、周りの人々に支えてもらっている。

当然じゃないか。そう、当然のはずなんだ。当然じゃないと、いけないんだ。

そう思うと、僕には言葉がないことに改めて気づく。

その日の夜、ニュースを見ていた。

「次は、ひと月前に起きた女子高生行方不明事件の続報です。家族の祈りは、届きませんでした」

僕の目は画面に釘付けだ。

遺体発見現場の上空映像、モザイクつきだが彼女の通っていた高校の映像が流れる。

そして被害者の写真。

テロップとして出てきた名前は、大伴優奈。

……間違いない。

インタビューを受けている人々全員が口をそろえて言う。あんなにかわいくていい子がどうしてこんなことに、と。

そしてニュースはそのまま淡々と事実を伝えていく。

「……犯人と思われるグループは三週間前に三須浪市で起きた爆発事故で全員死亡しており、被害者との関係などの調査は難航しています。またこの爆発事故はこのグループに対する怨恨の線が強く……」

警察もやっぱりバカじゃなかったんだ。優奈の事件もかなり絞り込んでいたから、遺体の身元確認とともに僕は容疑者から外れた。このことに関しては一安心だ。ニュースは最後に彼女の葬儀の日取りを報道して別のコーナーに移っていった。

部屋に戻って転がって考えていた。

僕は優奈の葬儀に顔を出すべきだろうか。

警察は遺体の身元などの情報を僕に伝えることはなかった。誰の遺体か聞くまでもなく知っているし、細かい住所だつて彼女が協力的でいてくれるならすぐにわかる。そう無意識に認識していたから、僕も聞かなかった。そんな僕が、さも知っていました、といった感じで現れるのは不自然な気がしてならない。

「裕也さん」

五日ぶりに声を聞いた。遺体発見から五日間、ずっと水の中から出てこなかった。ずっと寝ていたのか、それとも起きていても出てこなかったのかわからない。その彼女が久しぶりに口を開いた。

「連れて行ってください…… 最後にもう一度…… パパとママの顔を見たい……」

「……聞いてたんだ」

「連れて行ってください……」

「……一人でも、行けるだろう？ 僕が行っても……」

僕が行っても事実は何も変わらない。深く刻まれた傷が浅くなるようなことはない。もしかしたら余計に深くしてきてしまうことだつて有り得る。……怖い。

「一緒に来てほしいんです…… 私一人じゃ…… 怖くて…… 行

けなくて……」

……全く、僕は何度この子を失望させたら気が済むんだ。もう、腹を括った。

僕には彼女に伝え、彼女を慈しむ言葉がない。だったら僕自身でみせよう。

もう彼女を裏切らない。人を信じてもいい。

これ以上辛く苦しい思いのない、心安らかな地に導いてあげる。だから、僕を信じてほしい。

決して声にしない、無言の言葉。いつか彼女がそれを聞いてくれるまで、僕は……

父に喪服と車を借り、優奈の住んでいた町に行く。優奈が道筋を教えてくれるがどこでどう人に見られているかわからない。あえて

道行く人に聞き、店に入って尋ねた。

優奈の家の近くに駐車できるところを見つけ、そこに車を停めて徒歩で向かう。彼女は今朝からずっと覚醒状態にあり、僕の後ろを歩いてついてきている。

「……歩いて帰りたいの。あの日も…… そうするはずだった……」

首だけで振り返りちよつとだけ彼女に微笑み頷いて、また前を見て歩き続けた。

彼女の家の前は白と黒の垂れ幕と提灯で飾られていた。お葬式の時によく目にするものと同じ物。そこに出入りする人たちの多くは涙し、浮かべている表情のすべては無念の極み。想像していたとおり優奈と同世代の女の子が多い。誰もが信じられない、と漏らしていた。

これからの希望に満ち溢れているはずの彼女達。その一員だったはずの優奈。今はこのような悲しみに暮れているが、彼女達もいつかは喪が明け未来に向けて歩き出すのだろう。それを絶たれた優奈は今、友達を目にしてどんな気分なのだろう。

以前調べた。「シェイド(Shade)」は暗がり、陰、そして亡霊を意味する言葉。そしてそのシェイドの亜種に付けられた「ブレイズ(Blaze)」は炎やまばゆさ、そして爆発と言った力強い言葉。優奈はその言葉に相応しいほどの力を持つ。

だけど彼女の種族に与えられた名に隠された、もう一つの意味。今はそれが僕の頭を離れない。…… 悲しいほどに。

……「地獄」。

一体今、彼女はどれほどの苦痛に囚われているのだろう。僕では、理解しきれない。

優奈の死を悼む人々の間を抜けていくと、すすり泣きの中ぶつぶつ小声で話しているのが聞こえる。

「あらかじめ言うておくが……」

聞きなれた僕の声。YOUだ。僕が意識していなくても勝手に口が動いて声が出る。いきなりやるのは本当に止めてほしい。しかもYOUが話している間は文字通り僕が口を挟むことができない。YOUが僕の身体に間借りしているのに。

「優奈、お前はすでにこの世界の魂に在らざるものだ。本来ならばここで己の死を見つめ、未練の大半を諦め、次なる世界へと旅立たなくてはならぬことを知る。そして、扉が開く」

YOUから彼女に、またはその逆に話をすることは出会った時以来一度もなかった。別に敵対しているから、ということではないが、必要もなかったのだろう。

「……だが、お前は違う。すでにその自覚がある。だが扉は開かなかった」

「……」

「お前はそのままの姿で『はじまりのもと』には行けぬ……。有害なのだ」

なんてことを言うんだ。僕がどれだけ強く念じてもYOUは聞かない。

「……お前を救い導くためにも、お前にレクイエムを受け入れてもらわねばならぬ」

「嫌…… 痛いのは、苦しいのはもう絶対に嫌……」

「痛むのはほんの一瞬だ。それ以上の心の痛みを受け続けて、お前は永遠に漂うというのか……？ 見ろ、周りの者を。この者達はお前の友人、お前の親類、お前と縁のある者達だろう？ それらの誰一人お前に気付かぬ。そこは、永遠の孤独ではないのか」

YOUなりの説得らしい。どこか冷たく聞こえるが僕には反論できる点がない。ただレクイエムによって導かれるというのは、シエイド、ブレイズとして再び死ぬ、ということだ。そのことを直感で悟っている彼女は、頑なに拒む。

「このままではいずれお前の残された心もすべてが歪む。そうなつては……」

「……YOU、もう止めてくれ。ここで彼女を刺激しても何にもならない。……それに今日はこの子の言うことを、全部聞いてあげたいんだ」

これは譲れない。静かに、強く念ずる。どうか聞き入れてくれ、と祈るように。

「……わかった。騒がせてすまなかったな」

……YOUが謝るなんて初めてじゃないだろうか。戸惑うじゃないか。

YOUが僕の口を使って喋っていたこともあって入れなかったと言っ事もあるが、ここに来てやはり一步が踏み出せない。玄関の前で立ち止まる。けどもうここまで来てしまった。引き返すことなんてできるわけがない。

それに、覚悟を決めただろ？ 僕が優奈をこんな地獄に落とし込んだんだ。そして彼女を救い上げるのは僕しかできないんだ。

大きく一呼吸して僕は敷居をまたぎ、優奈の家の中へと入る。

……

ただいま、と声がした。とてもちいさく、……とても寂しそうに。

「
」
玄関に入つてすぐ左にある結構広めの和室。そこに優奈の棺があった。白い布が掛けられ、花に囲まれる棺の傍らに座る、ずっと泣いている中年の女性とあまりに沈痛な面持ちをした中年の男性。
……他人事だ。他人事なんだ。以前ならそう思い、そして言い聞かせられた。しかし、今の僕にはできない。息をすることも憚られる、そんな空気が目の前にある。

「パパ…… ママ……」

わずか数メートルの間で何度も挫けかけた意を決し、僕は二人のそばに歩み寄り、正座して二人に挨拶した。僕が彼女と同級生に見えない上、まったく面識のない二人は思ったとおり少し不審に思った顔をしたが、丁寧に二人そろって頭を下げてくださった。

「僕は…… 優奈さんの第一発見者です。ニュースで日取りなどを知りました……。すみません、見つけてあげることしかできなくて……」

そう。もしあの日、僕が声をかけていたらどうなっていたのか。今まで一例として運命を曲げられた人は無い。でももしかして、本当にもしかして、奇跡的に優奈の「律」は変えられたかもしれない。

知っていたのに、何もしなかった。見つけただけ。
力不足の僕では導くこともできず、彼女は永遠の孤独の環に今も

漂う。

そんな彼女の両親にどう声をかければ良かったのか。出来る限りの思考を回してみたが、僕が行き着けたのは余計な感情を省いて目的を伝えることだけだった。そんな僕に対しても優奈の両親は目を閉じて深々と再び頭を下げてくれた。

「あなたが……。いえ、いいんです。ずっと水の底にいるよりも……揚がってきてくれて、あなたのような人に見つけていただけたんですから……」

僕は、違う。苦しめた元凶が僕なんだ。だけど、それを言い出すことができない。

「……まだ全然信じられないんです。ありえますか？ 私達夫婦は、優奈の顔すら見せてもらえないんです。この箱の中に居るのは優奈だと聞かされたのに。信じられるわけ……。ないじゃないですか。」

見ては駄目だ。永遠に癒されない傷に苛まれることになる。

そう言われこの棺には窓も無く、釘で打ち付けられています。見つけてくださったあなたはご存じなんでしょう？ ここに居る

優奈がどんな状態だったのか。

わかります。わかります……。見てはいけないと言っことくらい……

でも、わからないんです……
本当に優奈なの……？

優奈じゃない。優奈のはずがない。あの子が、こんな目に遭った

わけがない。

どれだけそう思ったことが……。

でも、ひと月も行方知れずで、真剣に探していただいた警察の方々から、残念ながら優奈だ、と言われ……。他に信じられるものが無い私達に、こんな酷い嘘を吐くはずがないんです。これが……現実で……

……

どうして優奈なのでしょう。他の人でも…… よかったのに……」

涙のせいで鼻声になり、詰まり詰まり本音を話す彼女の母と目を合わせられない。ただ頷くだけ。

「他の人でも良かったのに」

有ってはいけなはずの感情が、僕の心に突き刺さる。

「今日はお忙しい中どうも……。見つけていただき、本当にありがとうございます。」

……この子は、たった一人の娘だったんですよ。その子を奪われて、これから何を支えに生きていけば……。

正直ね、許せません。何があっても許せるわけがない。

……優奈をこんな風にした犯人は、全員事故で死んだそうです。一人ではなく、何人も。何人もが寄ってたかって優奈を…… こんな……

警察の方から聞きましたが、相当無残な形だったそうです。

目を背けたくなるような現場だったと聞かされました。

……そんな風になって当然じゃないですか。

ですがね……

どんなに惨たらしく死んだとしても、許すはずがありません。

命を落としたぐらいで、こんな姿にされた優奈に顔向けできると
思っているんでしょうか。

私達夫婦のたった一つの心の支えを奪っていった拳句、私達は復
讐することすら叶わない……。

……そんな連中の罪が、どうすれば一瞬の死で償えると言っんです…
…？

こんな酷い話が有ってたまるか……！

もっと苦しむべきだ……

何度だって殺してやりたいくらいです。この私、父親自らの手で

……。

何度でも、何度でも……

何度でも…… 何度でも……

何故…… こんなに優しかった子が…… 何故……」

……

地の底に這いずるかのよう深い、深い声。苦しい、そんな一言
では納まらない。

僕はこの感情を否定するつもりはない。否定できようか。大切な、

大切な、それこそ自分自身を省みることなく愛した者を奪われたのだ。

これ以上に無い悲しみが、行き場を求めている。

それが生み出す負の連鎖。この鎖が切れる日はいつまでもこない。それでもいいと思う。

…… だけど二人の後ろを見ると、それにすら疑念を抱く。

「優奈さん、とても優しい娘さんだったんですね」

生前の彼女を僕は知らない。だが変性してしまったが今の彼女からでも十分に、以前からずっとそうだったと簡単に想像できる。もし僕が彼女をまったく知らなかったとしても、同じ言葉が出ただろう。

写真の彼女の笑顔…… それを見るだけでわかる。

右を向いて棺の上に飾られた生前のかわいらしい笑顔をたたえた彼女を見、二人に話しかけた。そして三人の方に向き直る。

今優奈は、僕の正面で寄り添うようにして座っている二人を水の羽衣で包み、首を横に振って、涙を流しながら二人の背中に抱きついている。

「だから…… そんなことを仰らないでください。お父さんも、お母さんも、わかってみえると思います。それを一番望まないのが、優奈さんなんだ、って……」

陳腐で、チープな、よく聞く言葉。それしか出てこない。だけど、そうとしか本当に言いようがない。

寄り添いあっている三人の姿を見ていると、自然に涙があふれ、

言葉に詰まる。こんなにお互いを愛しているのに、それはもう、二度と伝わることはない。

せめて想いが通じてくれたら……

僕の祈りは、ただ、それだけだ。そしてそれは所詮他人事でしかない者の戯言だった。

「わかっています。わかってるんです。わかって、いるんです……
わかってるから、こんなに苦しい…… 何で…… どうしてこんな…… 優奈…… 優奈……っ」

もう、僕は口を動かすことすらできない。これ以上、何といったらいいんだ。教えてほしい。わからない。
……潰されてしまいそうだった。来なければよかった、そう思うてしまうほどに。

いつまでも続くはずだった。そんな日常が簡単に崩れてしまった現実。

壊されてしまったにもかかわらず、残り続ける慈しみと愛。
そして、それが強すぎるゆえ止まることを知らない鬱積と狂気。

言葉のすべてが飲み込まれ、ただそこに居るしかなくなる。

気付けば僕は目を閉じ、深く、深く頭を下げていた。そうしよう
と考えたわけではない。身体が勝手にそうしたのだ。

彼女達への、僕ができる最大限のいたわり。だが、この程度が僕
の限界だ。

そして僕が今日ここに來た理由が、わかった。

優奈の為じゃ無かった。

……許してほしかったんだ。

僕がしたことを、わずかでも。

僕はなんて酷い奴だったんだ。
……自己嫌悪しか感じない。

「
」（後書き）

裕也君と優奈ちゃんとYOU。三人の「ゆう」が揃いました。
後悔と懺悔の濁流に飲まれた裕也君は、レクイエムを手にどこまで立ち向かっていけば良いのでしょうか。

悲しみ深く、重い第六章。これにて閉幕でございます。

「夜行（やぎょう）」

朝から空気に感じる熱も弱くなり、見上げれば空高く筋を引く雲が目立つ。力強く緑を放っていた木々や草花もさすがに疲れてきたのか少しその色を薄くして、ところどころに乾いた部分を作っている。虫の音もがちゃがちゃと騒がしかったものから、澄み渡って凜とした涼しさを運ぶものへと移り変わってきた。

だんだんと秋を感じるようになってきた。大学もすっかり後期が始まっている。だけど授業はまったく言っていないほど無くなった。これじゃあ夏休みとほとんど同じ生活だ。ゼミと家の往復ばかりで、たまにある授業が息抜きみたいなものだ。本末転倒な気がする。

大分卒論の方にも目処が立ってきて、僕はまた就職活動を再開した。一社として採用通知をもらえていないし、今までずっとやってこれなくて相当ギリギリ、むしろアウト。振り返れば振り返るほど、事故に遭うまでの自分の行いが悔やまれてならない。

収入の無い仕事の方は優奈に会った時以来、ずっとマジメに続けている。たとえどれだけ疲れていたり、時間が押していたりしても彼女のように見捨てられる者を出さないように。

面接の時間に間に合わなくなったこともあった。チャンスを失うことは残念だが、比較の対象に挙げることはなんかできない。

……偽善にみえるかもしれない。

僕だって本当なら自分の事を考えた行動をしたい。だけど、誓っ

たんだ。

やせ我慢と言われてもいい。取り返しのつかない裏切りをした僕ができるせめてもの罪滅ぼしは、このくらいのことしかない。

優奈の遺体を引き揚げてから二ヶ月。この間で導いたのは変性前の人達が十六人、シェイドが二人。三日から四日に一人くらいのペースだ。初めの頃は二、三ヶ月くらいで三人とか四人とかだったことを考えると、相当に多くなってきた。前は二、三週間で十人以上導いた事があったが、これは対象者が増えてきた、と言う事よりも僕の意識が変わって避けて通ることをしなくなり、遭遇する機会が増えたと言うことだろう。確か三須浪を中心にしたこの地域の総人口は五、六十万くらいあったはず。その人口からすれば微々たる数だが、僕が遭遇するだけでもこの量。知らないところで起きていることも数多いであろう事を鑑みると、僕が想像していたよりも遥かに多い非業の死に愕然としてしまう。世界中がそうなのか、それともこの国だからこうなのか。それは知る由もない。

考えてはいけない。考えれば心が潰される。思考を麻痺させてやらなくては、僕の何かが壊れてしまうような恐怖に駆られる。けどまだ、僕はこの手の大鎌を棄てるわけにはいかない。

優奈は今も僕達と一緒にいる。僕があればどの失望を彼女に与えたと言うのに、優奈は憑いたまま。

あの日、彼女に言った。このまま家族の傍で、また僕が来るまで一緒に居たらどうかと。彼女はその時僅かに迷いを見せた。しかしきっぱりと言い切った。

いつか、自分の手で壊してしまうことが怖い。だから憑いていく、と。

最期まで自分を愛した家族への慈しみを持ち続けている優奈に、僕は改めて自分の過ちに打ち拉^ひがれた。

でもこれはチャンス。彼女がレクイエムを受け入れる勇氣を持つきっかけは失われていない。だから僕はレクイエムを手にし続ける。たとえ膨大な非業の死を目の前にしたとしても、まだ壊れるわけにはいかない。その使命を持つ以上、僕は立って生きる。

だが難点があった。優奈の覚醒と休眠は僕たちからでは干渉できないことだ。僕たちが導きに出かけたとしても、彼女が偶然覚醒状態でなければ、僕達がどのようにしているのか彼女が知ることはない。

それから、彼女が起きていても彼女が僕たちをサポートしてくれることは無い。シェイドを相手にした時彼女は起きていたのだが、レクイエムの当たらないくらいの距離から、ただ浮いて見ているだけだった。

……もともとサポートを期待しているわけではないし、彼女自身がレクイエムに対して恐怖を抱き、僕達の行動を信頼してはいない。凍りついた心を溶かすのを急ぐつもりはない。彼女が自分から出てきてくれる、その日を待つ。だから、今は見ていてくれるだけで良い。

ところでレクイエムの刃は全体が薄桃色になってきた。何だかわいい感じた。業の力が結構貯まってきたらしい。今の状態で全快の何分の一になるのだろうか。これまでで一体何人分やってきたのかよく覚えていない。

それにしても半年を越えてまだ完了しない。運の要素も強いがもっと精力的にやっていると、もし就職できても続けていることになるだろう。そうなるとまたしてもいろいろな信賴を失ってやっ

ぱり窮地に立つ。嫌だ嫌だと駄々をこね、途中でサボったりした結果がこれだよ！

あえて就職浪人を選ぶか……。でも就職浪人すると後々厳しい世の中だし（ネット情報）……

それじゃあ大学院？ 院試はとうに募集の終わってるところが多い。春にも試験をしている所を探すにしても、果たして今の状態で勉強できるだろうか。それに合格したとしてもこれ以上両親に世話を焼いてもらうのも……。学費を自分で稼げるかわからないしな。っていうか、稼げるくらいならそこに就職しろと言う話だ。

最終手段は卒論を落とす、または休学届出して来春から大学五年生。

……駄目だ。どの手も悪手にしか思えない。「人生オワタ」、とどこから聞こえてくる。

頭が痛くなる一方だ。

稼ぐといえば、普通の魂を導くのとシェイドを導くのでは、シェイドを導く方が相応に業の力を稼ぐことになるという。あの苦勞を考えたら正当な報酬といえるだろうけれど。少なくとも二十倍、高いと五十倍くらいにはなるそうだ。力が強くなったものほど当然高い。ブレイズなんていったらもう破格。

……でも、そのために導くつもりは毛頭ない。

そんなことを思い返し、両脇に広がる咲き誇るコスモス畑を見ながら歩く。だんだんはつきりしてくる首筋がひやりとするあの感覚。これをYOUは遥か遠くから感じ取っているのだから、本当に信じられない。全快のYOUは一体どれほどの存在だったのだろう。

「ここだ」

頭の中で僕の声が響く。目の前にあるのは人が住まなくなってきたらしばらく経っていそうな古びた家。大きな和風の家だ。ここに来る用事はさつきまでなかった。

卒論の関係で遠出するようになって、最近行ったことのないところしばらくと出かけるのが趣味になった。いつもは利用しない路線の電車に揺られている途中、YOUが察知した。できるだけ近くの駅で途中下車してYOUが感じる方へと向かう。随分遠くて、一時間は歩いてきた。大分涼しい季節になったとはいえ、日中の日差しを受け続けるとなるとまだまだ暑い。疲れた。見知らぬ土地で方向しか分からないのだから、バスやタクシーを使って行けるかわからないので、仕方なく歩くことにしたのだが、これからも移動手段を考えないといけない。自分用の車があれば便利なのだが、あいにく僕は持っていない。近い将来原付を持つようにしよう。

「時間が経っているかも知れぬ。十分に気をつけろ」

建物のサイズに加えて庭が広く、入り口は長い垣根の向こうの方だ。門の前には先客がいた。作業着を着た男性二人。恰幅のいい人と、痩せ型の人。中年の上司と新入りの部下、と言った関係だろう。

なにやら大きめの紙を広げている。それを折りたたみ、恰幅のいい上司が胸ポケットにしまいこみ、中に入っていく。

まずい。あの中はシェイドの巢。僕は慌てて走り出した。

門をくぐり、庭を駆ける。人がいなくなつてほつたらかしにされた庭は雑草が生い茂り、庭木の枝葉は好き勝手に伸びている。ちゃんと手入れされていれば和風の家屋にマッチした心落ち着く姿であつただろうに。

そんなことより、まだ領域に入り込んだ感覚がない。僕が庭に入つた時にはすでに二人の姿はなかった。中に入った二人がシェイドに見つかり危害を加えられる前に何とかしなければならぬ。最悪目の前で……

引き戸になつてゐる玄関に手をかけた瞬間、無音の世界が広がり、目の前が闇に包まれた。

……

意識ははつきりしている。だが、何も見えない。触れるものも無い。もともと音も無い。二本の足で立っている感覚だけはある。自分はどうなつてゐるのかわからない。真つ直ぐ立っているはずなのに身体の平衡感覚がはつきりせず、ふらふらする。気持ち悪い。

レクイエムを引き抜き、杖代わりにしよう。

地面に柄尻をつき立てたその時、闇が開けた。

……ここは家屋の中か。日中だが雨戸が閉めきられ、真っ暗だ。かすかに日の光が入り込んでいなければ、何も見えないかもしれない。あたりを見渡すが、僕の周囲に先ほど僕が手をかけた玄関は見当たらない。引きずり込まれ、どことも知れない部屋に飛ばされたようだ。僕が居る部屋は畳敷きの八畳ほどの部屋だ。少しかび臭い。よく目を凝らすとクモの巣も十分に張っている。

先に入った人達も僕と同様どこかに飛ばされているのだろう。彼らを早く見つけ出す、または何か起きる前に本体を導かなくては。

襖を開けると、そこは板目の廊下。すでにここはシェイドの腹の中。どこから何が起きるかわからない。いつものように集中し感覚を研ぎ澄ませ、部屋の外に出た。

ク
ス
ク
ス
……

クスクス……

来タヨ……

来タヨ……

オトモダチガ五人モ来タヨ……

三人ダヨ……？

ソナナコト無イヨ、五人ダヨ……

二人タリナイヨ、オカシイネ。……アア、ソウカ。アノオ兄チャ
ン、三人ダ

「わらへうた」

とおーりゃんせー とおりゃんせー

こーこはどーこの 細道じゃ

天神^{てんじん}さまの 細道じゃ

ちつと通して くだしゃんせー…

歩く度にギシッギシッと音を立てる廊下に出た途端、小さな歌声が聞こえてきた。

これはシェイドが歌っているのか？　すでに目覚めているのかもしれない。

どこにいるのだろう。この屋敷は結構大きかった。しらみつぶしに探すしかないかもしれない。周囲を警戒しながら廊下を進み始めた。

クスクス……

クスクス……

笑っている？ 近くで見ているのか？ 隣の襖をゆっくり少しだけ開け、レクイエムの柄尻を滑り込ませそのままサッと襖を引き開けた。開けた瞬間に襲われても良いように、そのままレクイエムの長い柄を体の正面に構える。

……何も無い。

クスクス……

ハズレー

近くから聞こえるようで、遠くから聞こえてくるようにも感じる。やはりすでに目覚めているようだ。それに二人以上だろうか。

ここはシェイドの領域の中。彼らからしてみたらこの場に居なくとも僕の行動のすべてが手に取るように分かるのだろうか。

「……相当時間が経っているな。かなり狡猾だ。先に取り込まれた二人は諦めた方がいい。俺達が来る前に入ってしまった時点で運が悪かった。おそらく映っていなかっただろう。そう割り切っておけ……」

あつさりと冷たくYOUが言い切る。YOUは本職の死神。こういった事例に幾度と無く遭遇している上での発言だろう。だけど、まだそうとは言い切れない。本当につきさっきなんだ。今まで何度かシェイドと遭遇してきた中で、一つ感じていることがある。

その感覚が間違っていないければ、間に合うかもしれないんだ。

僕は鏡を見ていない。あの二人は映っていたかもしれない。映っていなかったとしても、今なら律を変えられるかもしれない。YOUは諦めると言ったが、結果を見るまでは僕だけでも抗おう。

……どこから、また歌が聞こえてくる。

かーごーめ かーごーめ

かーこの なーかの とーりーはー……

…

…

痩せた体型の男が必死に耳を塞ぎ、頭を抱え込むようにうずくまっている。男はかわいそうなほど震えていた。悲鳴を上げることもない。彼の居る空間は完全に闇の中で、一体どこなのか、それがどれほどの広さなのかまったく分からない。

彼を中心に、二つの何かが点対称の位置に立ち、歌いながら円を描いてまわっている。気配とそれらが立てる音から二つと思われた。

少しずつ少しずつ、円が小さくなっていく。

かーごーめ かーごーめー

かーこの なーかの とーりーはー

いーつ いーつ でーやーるー

よーあーけーの ばーんにー

つーると かーめが すーべったー

うしろのしょうめん だあれ？

呼吸も震え、固く目を閉じている。首筋に何かが触れる。その冷たさに反射的に背筋が伸びる。そして耳から手を離してしまった。

それは小さかった。

突然両肩にしがみつき、背中に乗った。
耳元でひそひそと囁く。

ネエ、ダーレ？

クスクス……

ダーアレ？

男はただ身を凍らせていた。声を上げることもできず、振り払うこともできず。

とうとう目を開いた。周囲はやはり闇だった。目の前で固まっている自分の手すら分らないほど光が無い。

まったく見えないはずだが背中に乗った小さな何かを、恐怖に囚われたまま横目で見る。

彼の肩のあたりにその頭が見えた。こんな暗闇の中なのに、はつきりと見えた。おかっぱ頭に黒い髪。小さな子供のようだ。

男の首に絡みつく子供の手に力が入る。息がつまり、男は「かつ」と軽く声を上げた。首に何かが吸い付く。男は白目をむき、口をだらしく半開きにし、脱力していった。そしてそのまま後方の闇に勢いよく引きずり込まれていく。抵抗することもできず、また抵抗することができたとしても抗うことを許さないほどの力で。

男の耳元で声が続く。優しく、ゆつくりと。
だがそれは低く呻くようで、まだかろうじて意識を残していた男の心を蝕んだ。

遊ビマシヨ……

遊ビマシヨ……

オトモダチニナリマシヨウ……

ズーット一緒に遊ビマシヨ……

クスクス……

クスクス……

ズット、ズット……

ズット、ズット

……おかしい。今気づいた。領域の中独特の、耳鳴りがするほどの静けさがなくなっている。

さっき聞こえてきた歌声は、今はしない。かわりに風にそよぐ木々の葉擦れの音と、かすかな鳥のさえずりが闇の中に入ってくる。優奈のように自分の意思で領域の展開を自由にできるのだろうか。だとしたら何故、今領域を解いたのだろうか。

また一つの部屋を開け、中に入った。その瞬間に音が無くなる。いつも感じる、領域に踏み込んだ感覚。

なんだ、この違和感。

落ちて着いて部屋から廊下に戻る。すると耳鳴りが治まった。

……そういうことか。領域を展開してないんじゃない。廊下でシェイドの歌っている声が聞こえたから、この屋敷全部がシェイドの巣であるには間違いない。だけど、領域が展開されているのは各部屋だけで、廊下は違う。何故こんなおかしいことに……？

考えていても理解できるとは思えない。分かるのはますます急がなくてはいけないということ。僕が領域の外に出ている時間が長ければ長いほど危険だ。

廊下から各部屋を探るのは止めだ。なるべく領域の中に居なくてはいけない。ここが古くからの日本家屋で助かる。部屋から部屋へとそのまま探索するのを続けよう。

…… オカシイネ

…… 三人ノオ兄ちゃん、何カオカシイネ

オ兄ちゃんガオ部屋ニ居ルト、オジちゃん達ガ遊ンデクレナイ。
ナンデダロ

オラガ代ワルヨ。先ニ遊ンデクルネ

ハ―イ、オラハ太ツタオジちゃんト遊ンデルネ。マタ後デ……

「わらべうた」(後書き)

空白改行が多数あることを好まない読者様もいらっしゃると思います。

シェイドの会話部分に静けさと不気味さを出すには、と考えてみた結果がこの形。ほかのやり方があるかなあ……。

「無邪気」

……居ない。

見つからない。一部屋一部屋をくまなく探す、今のところ先に入った二人も、シェイドにも出くわさない。何かが傍にいて見られているような感覚はある。また一枚襖を開けて、次の空間に出るとそこは廊下。仕方ない。出ざるを得ない。領域を一旦抜ける。

クスクス……

あの笑い声だ。左右、そして上下に視線を配る。

左の方で何か黒っぽいものが部屋の中に引っ込んだのが視界に入る。足音を殺してゆっくりその方向に向かい、おそらく黒っぽい何かが入った部屋の前に行く。襖に手をかけようとしたその時、今度は右の、さっき出てきた部屋のあたりでやはり黒っぽい何かがちを覗いているのが視界に入る。僕が振り向くとサッと引っ込んだ。あれがシェイドに間違いない。先に入った二人が、僕をからかうような真似をするわけではない。

元のところに走って戻る。開け放っていた襖が閉じられていた。その襖に手をかけた瞬間、闇が僕を包み込む。広がりきった後、す

ぐに晴れた。

相変わらず廊下に居る。だがおかしい。染みの広がり方、破れ方がさつき触れた襖と違う。さつきは右手側に光がもれている雨戸があったはずなのに今は右にも左にも雨戸が無い。

玄関に手をかけた時と同じ。どこかに飛ばされたようだ。

クスクス……

また笑い声が聞こえる。周囲に注意を払う。今度は右の方で何か動いた。動いたと思われる方へ走り、再び開ける。また闇が広がる。そしてやはり別の部屋の前に立っていた。

クスクス……

領域に入ると問答無用で襲いかかってきた今までの者達とは違う。ずっと僕を見張っているだけ。……むしろこっちの方が気味が悪い。

今もなお廊下に居る。こんな怪現象に襲われているが、廊下にはまだ外から入ってくる音がある。早く領域に戻らないといけないのに、入ろうとすると別のところに飛ばされる。

くそ、このままだといけないというのに。気ばかりが焦る。

小さくパチパチと音が聞こえてくる。本やテレビで聞いたことがある、ラップ音という現象。シェイドの仕業であれば、何が起ころうとも驚きはしない。あたりに注意を払い続ける。どこから聞こえてくるのか。

おーにさーん　こーちら

てーの　なーるほうへ……

……遊んでいる？　僕と鬼ごっこでもしているつもりか。
まさかもうすでに先に入った二人を……

⋮

…

あーぶくたったー にえたったー

にえたかどーだか たべてみよー

むしゃ むしゃ むしゃ

まだにえなーい

周囲は完全の闇に包まれ、ここがどこでどんな状態になっているのかまったく分からない。椅子に座らされているようだ。

あーぶくたったー にえたったー

にえたかどーだか たべてみよー

むしゃ むしゃ むしゃ

まだにえなーい

「むしゃむしゃむしゃ」という歌詞と共に全身に何か吸い付く。
恰幅のいい男性はその度に身体を小刻みに震わせ、顎をかくかくと
動かしている。視線はぶるぶるして定まらず、表情はもはや正気を

保つてはいなかった。口角からは唾液がたれていた。

始めは恐怖に支配されていたのだろう。だが今はそんな感情すら麻痺し、何も分かっていないようだ。

にえたかどーだか たべてみよー

むしゃ むしゃ むしゃ

もうにえたー

「待て！」

遠くからはつきりとした、誰かの声が聞こえる。

吸い付かれるたびに混濁する意識のなか、声に対して一瞬正気を

取り戻した。

「た助けてくれ、助けてくれ！」

届くかどうかはわからない。その誰かが近くに居るのかもわからない。しかしこの恐ろしい状況から出られるかもしれない。必死だった。

「助けて！ たふ へ へ……」

再び何かが吸い付き、全身の筋肉が弛緩していく。

クスクス……

遊ボウヨ

マダ遊ボウヨ……

アノオ兄チャンモ、ユキチャント遊ンデクレテルノ

オジチャンモ オラト一緒ニ遊ボウヨ……

耳元で響く、低く呻く声。恰幅のいい男性は目尻に涙を少し溜めて
いる。

しかしその表情には恐怖も、戸惑いも、嘆きも、喜びもなかった。

とだなにしまっておきましょう

おふとんしいて もうねましょ

歌と共に引きずられていく。

のちに闇の奥からごきん、ごきんと鈍い音が闇の中に響き渡り、
間もなく静かになった。

「玩具（おもちゃ）」

にえたかどーだか たべてみよー……

追いかけている途中、通り過ぎた一つの部屋から歌が聞こえてきた。子供の時にやっていた「あぶくたった」の歌詞の一部。

「ただど途中？ 僕が相手しているのではない。
つまりここだ。」

「待て！」

声を上げて襖を開く。

……だめだ。何度やっても違う部屋の前に飛ばされる。

クスクス……

おーにさーん こーちら……

くそ、今度はどっちだ。もう時間がない。

……左の方からか。目だけで左手の方を探る。黒っぽい何かがか
らうかがを窺っている。

息を整え、少しだけ足をリラックスさせる。そしてレクイエムを
握り直す。大きく息を吸い込み一気に駆け出す。黒い影がさつと引
つ込み、襖を閉める。その襖にレクイエムを突き立て、そのまま薙
ぎ払った。

パンっ！ と大きな破裂音が立つ。かつて家屋に根を張った男の
子のシェイドと戦った時のように、横一文字に切り裂かれた襖が上
下に大きく捲りあがった。そこから入る。別の部屋の前に飛ばされ
ることも無い。

今僕が居るのは無音の世界。このまま急いでシェイドを抑えなく

ては。

……スゴイネ

スゴイネ

三人ノオ兄ちゃん何ダロネ

モット遊ビタイネ……

ソレジャア ミンナデ遊ボウヨ

ジャア呼バナイト……

...

クスクス
...

クスクス
...

巨大な刃が桃色に輝く大鎌を手にした青年が、暗闇に閉ざされた和室の中で周囲に意識を配りながら歩を進める。
小さくかすれたような声が聞こえる。

コッチコッチ……

声^{こやな}がする方に、誘われていく。道を閉ざす襖のすべてを手にして
いる大鎌で切り裂いて進む。その瞳、表情は鬼気迫った。

コッチコッチ……

追っ手への恐怖が無いかのようにさらに誘う声。青年は表情を緩
めず先へと進む。

何部屋か通過し、また別の部屋に入ったところで何か動くもの
が一つ、隅で動くのが見えた。青年は眉をひそめ、さらに一段表情
を引き締める。隅で動いた何かがゆらりと立ち上がった。それは青
年よりもやや背の低い、痩せ型の成人男性だった。その動きは脱力
しており、緩慢。一歩前に出るたびに首が据わっていない赤ん坊の
ようにカクカクと揺れる。

「……危険だな。ハンドラーか」

青年の頭に声が響く。

「ハンドラー？」

青年の声が部屋に静かに響く。

「その名の通り、支配し操るものだ。あれに襲われたのならば、
うあの者達は助からん。魂は囚われ、すでにこの世界には無い。
躊躇^めわず始末しろ」
躊躇^たも

クスクス……

ガオー

低く呻く声とともに痩せ型の男性の両腕が上がる。マリオネット
によく似ている。

苦渋の表情をした青年は右手だけで巨大な鎌を握り、男性の頭上
を一閃する。途端に腕が落ち、畳の上に崩れた。

ア—ア

ソーレ モウ一回

先程からしている声とともに再び立ち上がり近づいてくる。さつきよりも動きが滑らかで、明らかに速い。人の姿ではあるが、その意思はここになく別の者が握っている。まさしく人の形をした繰り人形。

「捕まるな。本体がどこにいるかわからん」

頭に響く声に従って青年は距離をとり大鎌を構えなおした。それは操られているのではなく自分の意思で動いているかのようにすばやく的確に青年の腕を掴もうと手を伸ばしてくる。青年は短く握りなおした金色の柄でその腕を払いのける。人形は払いのけられた腕とは逆の腕を伸ばしてくるが、大鎌の柄に再び払われる。それを何度も繰り返し、徐々に徐々にお互いの間合いが狭まる。後退していく青年は徐々に壁際に追い詰められていった。

人形が両腕を開き飛び出した。大鎌を持つ青年が床を転がるようにして避けると、ぱすつと破れる音が室内に響く。体勢を整えた青年が振り向くと、人形が飛びかかったところの襖に大きな穴が開いていて人形はそこに居なかった。見失った人形がどこから襲ってくる

るか分らない。青年は今のうちに呼吸を整え、四方のどこから来ても良いように意識を張り巡らせる。

突然左側の襖が破れ、そこから腕が飛び出した。距離があつたので掴まれることはなく、即座にその方向に大鎌を振る。しかし腕は大鎌が届く前に穴から引き抜かれ、広く真一文字に切り裂かれた襖の向こうには何も居なかつた。再び闇に意識を張る。

数回大きく呼吸をする間があつた。上方から上がった、みしつと言つ音に氣をとられた次の瞬間、木片を散らし、天井が砕けて人形が落ちてきた。その体格からは予想が難しいくらいに力が増し、着地と同時に叩きつけた腕の反動で畳がわずかに浮き上がる。前方に飛び込み前転して躲した青年が後方に向かって鎌を薙ぐ。人形はさらに低い姿勢をとつてその鎌をくぐり、両腕をバネにして立ち上がろうとしたが、突然バランスを崩した。先程振り下ろした腕の関節が増え、あらぬ方向に曲がつている。

よるめいて立ち上がった瘦躯の腹に、駆け寄つた青年が利き足で蹴りを入れる。バランスの悪い姿勢にタイミングよく蹴り込まれたと言つのに、押し返されただけで人形は倒れることなく踏み止まつた。咳き込むことも無い。だがほんの少しだけ動きを止めた。

その時を待つていたかのように青年は素早く一步踏み込む。左足を軸に体を回転させ、右足でさらに踏み込む勢いをそのまま大鎌に乗せて相手の胸に刺し込んだ。

血が噴き出す代わりに光が数瞬、闇に包まれた部屋全体を照らす。光が失せるとともに痩せ型の成人男性は完全に倒れこんだ。

……アア　ゼンゼン動カナクナツチャッタ

スゴイネ、鎌ノ才兄ちゃん

楽シイネ。モットモット遊ンデクレルカナ……

無邪気な言葉が聞こえているはずがない。大鎌を手にした青年の顔は晴れず、口を真一文字に結んでいた。

「鬼っっ」

桃色に輝く大鎌を持った青年は、自分より少し背の低い痩せ型の体型の男性が横たわる和室を後にした。再び彼を呼ぶ声がする。

次の襖の向こうは廊下だった。切り裂いた襖をまたいで廊下に出ようとしたその時、目の前を小さな子供くらいの大きさのものが横切った。走るようではなく、すーっとすべるように移動していった。あまりに唐突の遭遇に青年も息を呑み、一瞬動きが止まった。すぐに我に返ると影を追う。

キャハハハハハ

オーニサーンコーチラ 手ーノナールホーウヘー

そんなに移動する速度は速くないが、捕まえるにはやや速い。あ

えて青年との距離を保つかのように速度を調節しているようだ。逃げていくと言うよりもむしろ誘導するように廊下を滑る。青年が追いかけて出た先は、広めの調理場と思われる土間だった。いつの間にか影はいなくなっている。

とん とん とん

小さくかすかに、何かを叩くような音がする。その音がどこから来るのか、青年は全神経を集中して探った。

「何の音だ……？」

かぜのおとー

青年呟きに答えるようにどこかから声がした。声がしたと思われる方へにじり寄り、埃を被った机の影や、物がひとつとして残っていない棚の裏を見るが、何かが潜んでいることも無い。

とん とん とん

再び音がする。音はわずかに上の方からするようだ。そーっと天

井近くに目線をやる。雨戸を閉められた窓の上に、引き戸がある。おそらく人が暮らしていた頃は皿や鍋などの収納に使われていた棚だろう。音はそこから来たような気がする。

なんのおと？

また声がした。その声は音が聞こえた方とは違ったところから聞こえてきた。そっちへ青年は首を向ける。だがその直後

がたがた　がたん！

先程目をやった引き戸から大きな音が響いた。油断していた青年の心拍が跳ねる。全身が硬直する。違う方向へ向けていた首をゆっくりと音が響いた棚へ向ける。

……

引き戸が半開きになっている。

暗い闇に包まれ、その奥はよく見えない。じつと凝視していると、何も手を触れていないのに戸が鈍く、ずずつ、と開いていく。

生唾を飲み込む。目を逸らすことができず、見開いたままになっていた。十分に開いた引き戸の向こう、その棚に入っているものが

だんだん分かってきた。

人。

こんな棚に、無理やり押し込まれている。首は曲がり、肘と手首は折りたたまれ、一目見てこれでは生きていないと分かる無残な形状をさせられていた。

とん とん とん

今度は音ではなく、声だった。人を仕舞い込んでいた戸棚から目を背けていた青年が集中を取り戻す。

なんのおと？

おばけのおとー！

その直後、がたん！ と大きな音を立て、引き戸が床に落下した。そして、どちゃ、と重たい物が落ちる音が続く。

クスクス……

音の主は関節と言う関節がおかしな方に曲がつた恰幅のいい男性だった。おかしな方向に曲がつたままの腕と足が動き出す。床を掻きむしり、徐々に青年の方に向かう。腹が天井を向いているのに顎は下を向き、爪先はしっかり地を捉えている。おかしな格好のためやはり動きは遅かった。青年は鎌を振り上げ、胸部に突き立てた。その刃は何も貫かず、そのまま土間を捕らえた。青年が視線を右に遣ると、その先にはその格好からは想像できないほどの速度で腕と足を動かし、床を這いずり回って移動する姿があった。

まるで昆虫。その動きはもとも人間であつた物がすると極めて不快で、おぞましいものだった。そのまま移動し、壁を捉え登っていく。首が回って、虚ろな目のまま無表情に青年の姿をじいっと見つめる。

壁に張り付いた元人間に向けて刃を振りぬく。意外と機敏な動きで壁の上を駆け、なかなか捉えられない。天井付近まで移動すると跳んだ。そして青年の真横に落ちる。関節はさつきと逆の方向に曲

がつてちゃんと身体を支えていた。低い位置から青年の足首に向かつて手が伸びる。それを躲し、金色の柄尻で打ち伏せる。だがやはり滑るように横へ移動していき、止められない。地面を掠めるように何度か薄桃色に輝く大鎌を振るが、不規則に、そして刃の流れる空気を感じ取っているかのようにしてそれは逃げ回り捉えられなかった。

「……ここは広い。どういふことかわかるな？」

青年と同じ声が彼の頭に響く。頷き、元来た方へ走る。

マテマデー

捕マツタラオ兄チャンタチガ鬼ダヨー

嬉々とした声が響き渡る。背を向ける青年の後ろから、まるでガサガサと音が聞こえそうな動きで迫る。見た目と想像以上に速い。だが、青年の走る速度にはおよばない。ところが変な風に跳ねる。机に飛び乗り、そしてさらに跳んで青年が入ってきた廊下の前に先回りした。

これでは通れないと判断した青年は踵^{きびす}を返す。それを跳躍と気味の悪い動きを繰り返すことで追いかけてくる。跳ぶ度に腹が上になつたり、下になつたりする。だが生気を感じない眼を持った首だけは常に同じ向きを保っていた。

ナカナカ捕マラナイネー。鬼ゴツコ上手ダナア

ネエ ユキチャン、アノ三人ノオ兄チャン、体ニ二人居ルケド、モウ一人ハオ姉チャンダヨ。
オ姉チャンハ体ニ居ナイ。ソレニ井戸ノ水ミタイニ冷タクテ、キレイダヨ

ホントー?! オラ、全然ワカンナカタ。早く オ姉チャントモ遊ビタイナー

ソレニシテモ オ兄チャン達スゴイネー。オラ達ト モットモット遊ンデモラオウネー

闇の中で交わされる会話が届くことは無い。青年は捕まらないように逃げながら周囲を探る。土間とつながった部屋が一つ見える。

暗がりの中のためはつきりと分らないが、机、椅子、棚が置かれた手狭な空間だ。立体的に動き回り、行く手を塞ぐ様に飛び跳ねる虫をこの土間で相手することは至難、と青年は判断していた。わざと大振りに鎌を振り回し、虫がその部屋の入り口から遠のくように牽制する。相手が青年から十分な距離を取った直後、青年は背を向けて走り出しその部屋に飛び込んだ。もちろんおかしな虫も追いかけてくる。

部屋の中央あたりで振り向き、真っ直ぐ迫ってくる相手に対して大鎌を振り下ろした。青年の動きを虚ろなままの目で凝視していた男性はそれを避けて置かれていた椅子を押しつけ、机の下に入り込む。青年が少しだけ口元を上げた。

木製の机には、虫が潜り込んだ辺に椅子が一脚、ほかの辺には二脚ずつ置かれている。人がスムーズに通じ抜けるだけの空間は無い。がんっ！と強く蹴って、虫が入った拍子に押し出された椅子を押し込み更にスペースを奪い動きを封じる。がたたつと机が激しく動く。下に居る人であった虫が机を跳ね除けようと暴れているが、巧くいかないようだ。

何度目になるだろう。青年が大鎌を振りかぶる。机が邪魔になっているにもかかわらず今までと異なり彼の目には確信を映し出されていた。机の下めがけて振り下ろすと多数の脚の間から閃光が走る。

……

…

光が治まった時、青年の持つ桃色に輝く大鎌は大きな机を何の抵抗も無く貫き、その下に這いつくばっていた男性を床に磔はりつけにしていた。もう動くこともない。金色の柄も机の天板を通り抜けている。今は刃も黄金に輝く。先とは異なる物のようだった。

息を整えた青年は手にした大鎌をふりまわし、柄尻を床に突き立てた。両手を胸の前で音を立てて合わせ、何もない空間をこじ開けるように開く。

……

青年の眼前に扉が姿を現した。

それは巨大な、本当に巨大な扉だった。門と言って差し支えないほどの。

そしてそれはとても荘厳だった。ギリシャ神殿やルネサンス時代の彫刻、絵画も比べてしまえば色褪せて見え、まるでそれをモチーフにした、あるいはその扉のレプリカであるかのように錯覚させる。

黄金の鎌は堅く閉ざされたその扉を切り開き、刃から光の粒があ

ふれだす。粒が吸い込まれていくにしたがつて刃は再び桃色に戻っていた。

光を解き放ちきつた大鎌は自らその身を起こし、青年の手に帰った。

その始終、二つの影は青年に襲いかかることも無く、発する言葉を失ったかのように身を強張らせ、闇を通して今のが何であったのかを感じ取っていた。

……ナニ？ アレ……

危ナイ…… トテモ怖い……

消ソウ…… アノオ兄ちゃん、モウオトモダチジャナクテイイ……

ソウダネ。オ姉ちゃんダケデ…… 二人ノオ兄ちゃん、モウイラ
ナイ……

「鬼気」

「……………空気が変わったな」

YOUの声が響く。どういう意味が分からなかったが、二人の魂を導いた机と椅子が置かれた手狭な空間から再び広い土間に戻ってきた時、確かに感じた。今までになかった、世界に満ちる緊張。呼吸するのも苦しい。

これに似た空気を以前どこかで……

一歩だけ踏み出すと、左の腰の辺りからちやぶつと音が立つ。

……………そうか、これは彼女と初めて会ったときと同じ空気。

あの日出会った優奈の殺意によく似ている。

かーってうーれしい はーないーちもーんめ

まけーてくーやしい はーないーちもーんめ……

歌が聞こえてくる。昔から歌われているだろうわらべ歌。タイトルはそのまま「花一はないちもんめ」。のん気なメロディと、列を作った子供達の無邪気なやりとりがかわいらしい遊戯。だけど、この歌は昔、食べることもままならないほど貧しかった人達が、自分達の子供を子買いに売り、安く買われていく子と別れる情景を歌ったものだと言ったことがある。そんな悲しい歌だからこそ、遊戯だけでも楽しくあつていいんじゃないか。

でも、この場にあつては狂気しか感じられない。

とーなりーのおーばさーん　ちよいと来ておーくれ

おにーがでーるかーら　よーう行かん……

後ろから気配がする。振り返って見た物に驚いて飛び退き、間合いを広げた。そこには着物姿の子供が二人いた。二人とも同じようにおかつぱ頭で、赤い唇をしていた。だが、一人は黒い包帯のようなもので幾重にも目隠しをしていた。

こんなに暗い屋内だと言うのに、二人の姿はやけにはつきりと、

色濃く見える。この子達が本体。二人組みのシェイドも在ると言う
ことか。

二人が手をつないで歌っている。

あーの子ーがほーしい

あーの子ーじゃわーからん

相談しーましょ

そーしましょ

遊戯のクライマックスだ。先手を打たれる前にレクイエムで薙い
だ。

姿が消える。だが手ごたえはない。視界の右側で何かがゆれた。それは着物の袖。さらに薙ぐ。また手ごたえはない。

クスクス……

才兄ちゃんハイラナイ

左側から声が聞こえた。それと同時に突き飛ばされる。

才姉ちゃんダケデイイヨネエ……

ネエ……

ペットボトルを二人でパスし合って遊んでいる。そんなものがこの屋敷の、こんな土間に転がっている？ それに「お姉ちゃんだけだど？ 気がついて腰の辺りを探る。ない。」

クスクス……

オ姉ちゃんダケデ……

「優奈のことに気付いているか…… これは相当に手強いぞ。加えてハンドラーだ。危険性はブレイズ級だと思え」

YOUの声に僕も気持ちを引き締めなおす。ブレイズ並だっただけ？ 僕に勝てるのか？ …… いや、導かなくてはいけないんだ。

目隠しをした子がペットボトルに口づけする。吸うような仕草をして、ぱあっと息を吐く。眠ったままの優奈が宙に放り出された。起きる様子がない。

ワァ……！　キレイナオ姉チャンダネ……

オラ達トヨク似テルネ

ソウダネ！　キットオトモダチニナツテクレルヨネ！

そう言つて二人して全く動くことのない優奈にぺたぺた触る。あまつさえちゅっちゅと頬や手にキスしていく。

なんてうらやま……じゃない。優奈をどうするつもりだ。出方を窺っている、突然二人とも動きを止め、僕の方を見た。辺り一面に一気に緊張が^{みなぎ}漲る。

ダケド…… 才兄ちゃんたちハ モウイラナイ……

オラガヤツテクヨ、先ニ才姉チャント遊ンデテ……

ウン、マタ後デ……

目隠しをした子が優奈に抱きつくと、すうっと姿を消していく。

「待てっ！」

僕の声は無視され、伸ばした手も空を切った。直後再び突き飛ばされた。

ダーメ。怖イオ兄ちゃんハコゴデ消エテシマエ……

宙に浮いたままのその子が見開いた瞳が僕を捉えると、周囲にあった物が浮き上がり、僕めがけて飛んでくる。木箱や皿、置物程度ならまだしも、包丁まで飛んでくる。包丁くらい家を引き払う時に処分なさい！ とともにとの主に説教してやりたい。

当たらないように走り回る。シェイドの女の子は必死そうな僕の姿を見て嬉しそうな顔をしている。だがその顔も、子供らしい愛くるしい笑顔ではなく、狂気に囚われた無邪気な笑顔。だが、どこことなくおかしい。すべての飛来物を躲しシェイドの子供を間合いに捉え、柄尻で突きを出す。慌てる様子もなく、すーっと滑るように移動して間合いを離された。そのまま移動していき、壁に手を触れると闇となって消えた。

クスクス……

背後から笑い声が聞こえたかと思った瞬間、突き飛ばされた。

オ兄チャンガオニダヨ…… コツチコツチ……

不意を突かれたので姿勢を崩しはしたが転ぶには至らなかった。踏みとどまり振り返ると僕の方を見たままシェイドが後ろへ流れていく。走って追いかけるが、やはりさつきと同じように捕まえるにはやや速い。見失わないのが精一杯だ。襖が開いたところから小物が飛んでくる。避けきれない物はレクイエムで弾き、そのまま追跡した。襖を開いてシェイドが逃げ込む。僕もその部屋に飛び込む。僕が入ると襖が閉じた。そこは今まで通ってきた部屋よりも少し広い。そしてもう少し暗かった。

ドーコダ

一步一步部屋の隅々に意識を配りながら進む。僕の脇で、ずっと動く大きなものが視界に入る。思わずびくつとして見えた側に振り向いた。

……それは僕の姿だった。僕が動くとその通りに動く。鏡のようだ。目を凝らせば部屋中で僕と同じ動きをするものがある。鏡だらけだ。枠など無く、鏡面だけがたくさんあった。それはそれで気味が悪い。宙に浮いているものもある。後ろから勢いよく僕の頭に何かがぶつかる。小物のようだが結構痛い。

いろいろなものが飛んでくる。鏡と闇に包まれているこの部屋ではどこから襲い来るのか把握できない。次々に僕に当たる。そして飛んでくる小物が数を増していく。果てには鏡の中からも飛んで来た。もはや現^{うつ}も幻もあいまい。

闇雲にレクイエムを振り回したところで本体をとらえられるわけもなく、無駄に体力を消耗してしまう。ここは耐えるところだ。

逃ゲタツテ 暗クタツテ 関係ナイヨ

ダツテ オラニ触ラレタデシヨ？

ドコカラダッテ当テラレルヨー。オラハ的当テ名人ダカラ！

「ぐっ！」

側頭部が痛い。飛んできた物が僕の頭に衝撃を与えるのと同時に高い音を立てて崩れ落ちた。僕も思わず膝を折った。足元に見えるのは陶器の欠片。くそ、花瓶なんか置いたまま家を手放すなよ……。衝撃を受けてぐらぐらする頭を軽く振って立ち上がって、本体を探した。髪が少しぬれている。軽く出血しているようだ。

クスクス……

ドコカラ来ルカワカラナイデシヨ

ドンドン増エルヨ。イクラデモ……

カクレンボモ、オニゴツコモ、的当デモ。全部才兄チャンノ負け
ダヨ……

クスクス……

着物姿の子供が目の前に音も無く現れる。苛立ちもあつて、思わず手が伸びた。僕にとつても不意の行動で、相手にも予想できなかったらしい。僅かに遅れてそのまま後ろに流れて闇に溶けたその子の腕を掴むことはできなかったが、僕の指先はシェイドの手首を掠めた。

……掠めた。

僕からシェイドに触れた？ 何だ、今の。

危ナイ危ナイ モウオシマイニシヨウネ。ジャアネ、才兄ちゃん

僕の周りに合わせ鏡の世界が広がる。頭が痛い上にさらに視覚的に気持ち悪い。そして僕の周りに無数の刃が列を成す。

ドレモ本物ダヨ…… オラハ一人ダケダケドネ

クスクス……

分カンナイデシヨ。

クスクス……

勝利を確信したかのような余裕のある笑い声とともに、全方位から一斉に無限の刃が僕の方へ向かって来る。だけどそれがこの子の最大の過ちだ。

左後方、そこに向かって思いっきり蹴りこむ。刃が僕に届くよりも前に、僕の足にある程度の大きさの物からくる反動が確かにあった。蹴り飛ばされたものは僕の足の延長線上にあった鏡を碎き、床に倒れる。迫りくる無数の刃も鏡の奥へと帰っていった。

……

その時、僕はどんな顔をしていたんだろう。

合わせ鏡の世界にできた欠けから飛び出し、大きく振りかぶった
レクイエムをそのまま床にめがけて振り下ろす。眼下には恐怖に顔
を引きつらせた、小さな子供と同じくらいの大きさの人形がいた。
必死に両腕を交差し、頭を護っている。しかし、止めることはでき
ない。

その胸部を貫いた瞬間、この部屋に巢食う闇がすべて追いつめられ
た。

…

…

死期が近い者、シェイドは鏡に映らない。優奈も姿見に映らなかった。

この子は一体どっちだったんだろう。

シェイドと共に行動していたのだから、おそらくシェイドの類だったに違いない。

大切に、大切にされていた人形に生じた小さな魂が、この闇の屋敷の主の孤独を紛らわせていた。そこに悪意があったとは思えない。

してきた行為に善はない。これ以上行わせることはできない。

い。ただ僕もまた、ただ闇雲に怖がらせているだけなのかもしれない。

僕の責務に追われて、一体僕はどんな顔をして、どんな風に彼らと接してきたんだろう。

床に転がったまま抜け殻となった人形を抱え起こし、台になりそうな背の低い箆笥の上に座らせた。床の上を転がったせいでまとった和服に付いた埃を払い、おかっぱ頭の髪を整える。

……

一度だけ、もう動くことの無い瞳を見遣った後、無言でこの部屋の襖を閉めた。

「鬼気」(後書き)

クダリさまからいただきました、
「YOU - the song
for death -」のイメージイラストです。

> i 2 1 6 6 2 — 2 2 0 0 <

ありがとうございます！

「道標（みちしるべ）」

……

領域は消えていない。やはりこの領域を作っているのはもう一人の、優奈を捕らえていった目隠しをした子。シェイドは自身が形成する領域から出ることができない。この屋敷に広がる領域は極めて特殊。完全に覚醒している状態とはいえあの子はこの廊下に出ることは無い。

部屋から部屋へと渡り歩いていればいずれ遭遇するはずだ。あの人形に憑いていた魂はシェイドのものではなかったから領域から出てこられたのだろう。もしくはあの人形の中に領域を作り上げて入れ物ごと移動していたからこの領域から出てこれたのかもしれない。今となってはわからない。

襖を手で開いて入ったそこは、次の部屋とを遮る襖が外れて倒れ、一つにつながった大部屋になっていた。他の部屋より少し明るい。板目のずれた雨戸から漏れる光が、奥に見える和紙の貼られた障子を照らしていることで周囲を明るくしているようだ。光を周囲に分けている障子もその姿は完全ではなく、何ヶ所も穴が開いている。

この部屋に置かれている物は特に無い。よりだたっ広く感じる。もともと一部屋のサイズが大きい、二部屋ぶち抜きのサイズはかなりになる。少なくとも三十畳はありそうだ。

ドコニヤッタ……

突然耳元で低く呻くような声が響く。さっきまでとは比較にならない、尋常ならざる殺意に満ちた空気に一気に冷や汗が吹き出る。探す手間が省けた、とかのんきなことを言えるような状況ではない。

ドコニヤッタ……

オ屋敷ノドコニモ居ナイ…… ズット一緒ニ居タノニ…… オラ
達オトモダチナノニ……

オマエジャナクテ ドウシテ ユキチャンガ居ナクナッテル……

オマエダケガ消エレバイイノニ……

抑えきれずに溢れ出した凄まじい怒りの前に、僕の喉元は完全に押えられた。返答することも、無視して問う事も出来ない。息をするのがやっとだ。優奈と戦った時の酷い戦慄を思い出す。加えてじわじわと真綿で絞められるかのような感覚。

「消したのではない。導いたのだ。次はお前の番だ」

僕じゃない！ 恐ろしいことを平然とYOUが言う。止めてくれ、殺されてしまう。そう感じた瞬間、喉に何かが巻きつき一気に締め付けた。呼吸が止まり、頭に血が上る。吸うことができないのに咳が出て、肺から空気が一気に搾り出される。レクイエムの刃の部分を持ち、締め付けているものを必死で切断した。ぶつとした感触と共に頭に留められていた血液が一気に降りていく。同時に、ちつ、と舌打ちをされたような音が聞こえ、何かが僕から離れて行ったような感覚がした。大きく息を吸い込み、何とか意識を途切れさせないように気を強く持った。何とか息を整え、周囲を見渡す。

部屋の奥に着物姿の女の子の姿がある。

その子は今もやはり黒い布を幾重にも巻いて目隠しをして、宙に浮いている。口元はくすりとみせず、閉ざされたまま。音も立てずにすうっと両手を広げ、目の高さのあたりに掲げると、ぶわっと音を立てて畳が何枚か浮き上がった。それらが僕に向かって飛んでくる。

確か畳は相当な重量があるはずだ。加えて銃弾を受けても貫通させないとか、刀で両断するなんて神業だということを聞いたことが

ある。本来あらゆる物質をすり抜けてしまふレクイエムもシェイドの影響を受けた物体なら受けることができるようだが、日本の誇る量産型盾を相手にできる自信は無い。

飛んでくる畳を掻い潜^{かく}つて何とか近づけないかと努力する。だがさっきの人形が僕に向けて飛ばしてきた小物と違つて、シェイドに支配された大きな畳は僕が避けても軌道を変え襲い来る。レクイエムに掠り、手から離れかけた。この大きな物を抱えてでは避けきれない。レクイエムを一旦消し、避けることに専念する。もう必死だ。避けている間もシェイドの隙を探し続ける。それだけでなく見つけなくてはいけないものがもう一つ。見当たらない。

「優 つ奈をど、 つこにやった！」

避けるのに必死な中、途切れ途切れにシェイドに問う。ぴたつと畳たちの動きが止まる。

ドコニヤッタ……？

オ前コソドコニヤッタ……

オ姉チャンハアゲナイ…… オラノオトモダチ、居ナクナッタ……

絶対二返サナイ……

動きを止めていた畳が動き出し、少し僕から離れて行く。さらに部屋の四方からガタガタと音が響きだした。目隠しをしたシェイドが彼女の目の高さで両方の掌を大きく開く。……いやな威圧感。周囲がメキメキと音を立て始める。

「伏せろっ！」

声に従う。シェイドが小箱を握りつぶすように掌を合わせた途端に中心に向かって部屋が押し潰された。

……YOUの声の通りに動いたおかげで何とか挟み潰されることだけは避けられた。けど何とか動けるだけのスペースはあるが、身体にのしかかった瓦礫や畳が邪魔でなかなか出られない。もぞもぞとまがきながら脱出を試みる。

何て化け物だ。これがハンドラーと呼ばれるタイプ……。自分の領域の中にある影響を与えたものを自在に操る。空間そのものがシェイドとも言えそうだ。

しばらくがんばって瓦礫の中から顔を出すとシェイドの少女はまだそこに居た。だが、僕ごと押し潰した部屋に背を向けてちよつと天井の方を見上げている。僕も視線をそちらにやる。

……繭みたいなものがある。

クスクス……

早く起キナイカナ……

オラトズーッと遊ブンダ……

オテダマ、アヤトリ、鬼ゴツコニカクレンボ…… イッパイ、イッパイ……

……

ダケド初メニヤルノハ才兄チャンタチヲ一緒ニ消スコト……

ダカラマダ生カシテルンダ……

ワカッテル……？

確実に僕に向かって話している。冷や汗が首を伝った。僕は未だ身動きが取れないままだ。今の感じからするとあの繭の中に優奈が居る。そして優奈にも何かしらの術でもかけたのか、自分の仲間にする気だ。もし万が一優奈が再び敵になるようなことがあれば、それこそ一巻の終わりだ。

一緒に消すと言っていた以上今すぐ僕を殺すつもりはない。わずかも早くこの瓦礫の中から脱出しなくてはいけない。もがいていると宙に浮いたままのシェイドが振り向き、すーっと滑るように僕の目の前にまでやってくる。

クスクス…

ドウセオ屋敷カラ逃ゲラレナイヨ…… ソコデジーツトシテナヨ

……

シェイドは勝ち誇り油断が見えた。この距離はレクイエムの間合い。体勢は悪いがこの場でレクイエムを引き抜く。しかし左手から飛び出した柄を握り、引き抜くと同時に刈り取る前に両腕に糸が絡みつき、引き剥がされた。その糸はシェイドの女の子の口から細く伸び、ぷつつと切れるとその子の両手に断端が吸い寄せられた。両手をふざけるように上下に振ると、僕の腕も一緒に上下に振られた。完全に遊ばれている。

……まな板の上の鯉とはこのことだ。今の僕は身動きが取れず、完全にこのシェイドの少女に命を握られた状態で活路が見い出せない。

オラ、一人ハ モウ嫌ダ……

才目々ガ見エナクナッタオラヲ 忌ミ兎ッテ言ッテ ミンナガ怖
ガッテ近付カナカッタ……

病氣デ苦シカッタ時モ誰モ来ナカッタ

ズット寂シカッタ……

ユキチャンガ話セルヨウニナツテカラ オラハズット樂シカッタ

ユキチャンヲ ドコカニ消シタ才前達ハ許サナイ……

才目々ガ見エナクナッタ時モ

樂ニナツテ オラガ才屋敷ノ中ヲ自由ニ遊ベルヨウニナッタノニ
誰モ何モ言ワナクナツテカラモ

ユキチャンハ ズット一緒ニ居テクレタ。大事ナ大事ナ オラノ
オトモダチ……

オトウモ オカアモ オバアモ オジイモ オ屋敷ノ人ガミンナ
居ナクナレバイイネツテ言ツタラ、ソウダネツテ言ツテ一緒ニ笑ッ
テクレタ ユキチャン……

ミンナ本当ニ居ナクナッタ後モ、オラ達二人仲良シデ、ズツト住
ンデタノニ……

ダカラ、オ姉チャンニハ オラト一緒ニ コノオ屋敷ニ住ンデモ
ラウンダ

オ兄チャンヲ一緒ニ消セバ オラト一緒ナラ楽シイッテ ワカル
ヨネ？

目隠しの奥の表情は読み取れないが赤い唇はにたりと上がり、気
分が上々であることを思わせた。シェイドの独白の間も僕の腕はず
っとこの子の支配下にあり、抵抗することができない。何とかする
べく身を振り僅かでも力が緩まないと死力を尽くすが打開されな
いままだ。

その時炸裂音が響き渡った。僕もシェイドもその音に驚き、音が
した方向を見遣る。

そこにあつたはずの繭が無い。

同じ場所に居たのは羽衣を漂わせた破壊の女神。その瞳はすでに

開かれ、不快をあらわにしていた。

押し潰された僕を見て、そして着物姿の子供を見る。優奈の目つきが一層冷たくなった。焦燥感に満ちる僕とは対照的にシェイドはとても嬉しそうで、目覚めたばかりの優奈の方へすーっと滑るように近づいていく。

次の瞬間、何が起こったのか二人ともわからなかった。

突然僕の上にのしかかる瓦礫に何かがすごい勢いで激突した。ごろりと身体を転がして上を見る。瓦礫の山に横たわっていたのは目隠しをされた着物姿の女の子。支配から解放された僕の腕はまた僕の意志通りに動く。そこからは更に必死になって身体を山から引き抜き、瓦礫から距離を取る。巻き込まれてはたまらない。

優奈が攻撃したんだ。

ナンデ……？ ナンデ……？ 同ジナノニ、仲間ナノニ……

「私に害を為す者は許さない」

違う！　一緒ニ、オトモダチニ……

混乱し必死に懇願するシェイドに対しても容赦なく強大なプレッシャーをかける。見ている僕までそのままひねり殺されてしまいそうだった。優奈は操られていない。それどころか小さな少女を完全に攻撃対象にしている。

YOUはこのシェイドもブレイズ級に危険だと言っていた。しかし実際のところ優奈はそれを遥かに上回る。化け物としか言えない力を持っていたハンドラーも兇戯に等しいと言わんばかりにねじ伏せた。

違う……　違う……　ゴメンナサイ……　ゴメンナサイ……　ゴメンナサイ……

ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ！

モウ　イジメナイデ……　ユキチャン……　ユキチャン……

格が違いすぎる優奈に対して頭を抱えて泣きじゃくりながら侘び

続けている。あまりに見てられない。今この場を納められるのは僕しか居ない。引き抜いたレクイエムを両手にし、一気に駆け寄る。僕の接近に気付いた優奈は一瞬で移動し、僕の背後に回る。

一瞬のことでもよく見えなかったが、振り向いた時に見せた彼女の顔は、落胆にも見えた。

背後に回った優奈が次取るだろう行動も気がかりだが、今はそっちではない。振りかぶって、怯えきって動くことのないシェイドの身体を貫いた。まばゆい光の中で動く者は誰も居なかった。

……これが、非情だけど僕ができるこの子への救い。

せめて僕が奪ったこの子の友達と一緒にの世界へ……

……

…

無言。ただ一言も発さない。
僕は一体何なのだろう。

自分の与えられた役割。それは恐ろしい死を受け、悲しい思いと共にこの世界に縛られた魂を鎖から解き放つこと。

何度も出会ってきた。
何度も繰り返してきた。

何度も裏切った。
何度だって逃げようとした。

そんな僕は、彼らにとってどんな存在なんだ。
神にでもなったつもりか。
こんな驕れた僕に導かれて、あの子達はどう思っているのだろう。

これ以上この世界で苦しむ必要が無くなって、喜んでくれているだろうか。

……そんなはずがない。偽善だ。

僕は決して誇れたような人間ではない。

ならば、ただこの与えられた役割を果たすだけの機械に成ろう。だけど……

「……考えなくて、いいんじゃないですか？」

落ち着いた優奈の、落ち着いた声。澄んだ水の如く、僕の心を見透かす。

「少なくとも私は、精一杯している裕也さんを悪く思う人は無いと思います」

少し下を見ると僕の影だけが、僕の後ろに長く伸びている。

「お前が俺になる必要は無い。お前に力があるうちは俺の代わりを果たしてもらうが、お前の心は在りたいように在ればいい」

YOUの声が全身に響き、迷いに満ちた心に波が立つ。不意に見せられた優しさに思わず涙がこぼれた。

優奈にはYOUの声は聞こえることはなく、僕が優奈の言葉に泣いたように見えたのだろう。大の大人の男に涙に戸惑っている。それがとても微笑ましかった。

秋の夕暮れに向かって顔を上げて歩く。

まだ、がんばろう。

僕はまだ、自分の足で未来を歩けるのだから。

「道標（みちしるべ）」（後書き）

裕也君は今、明日を迎えるために踏みとどまらなくてはいけない時間を過ごしています。

いつの日か裕也君の悩みが晴れ、自分の在り方を認めることが出来るようになることを祈ってください。

第七章、閉幕です。

「幽明（ゆうめい）」（前書き）

第八章のはじまりです。

「幽明（ゆうめい）」

日曜日。今日は就活の予定もない。まだ内定をもらえてないからもつと必死になれ、と思わなくもない。しかし毎日毎日就活と仕事と卒論に忙殺される日々となると僕の心まで死んでしまふ。心の平穩が約束されてこそ頑張れるというもの。とりあえずいつも行く大学や三須浪とは逆の方へとぶらりと出かけることにした。

母の作る「朝ごはん」を食べ、優奈がいつ眠っても良いようにいつものようにカバーを付けた500mlのペットボトルに最近雑貨屋で見つけた革製のペットボトルホルダーを取り付けてベルトリーブに引っ掛ける。昨日一日出てこなかった優奈は今朝僕が起きるよりも早くから覚醒した状態になって、僕のベッドの隣に浮いていた。優奈の休眠のサイクルは僕達からは干渉できないうえに本当に不定期で、予測が全く立たない。二、三日ずっと起き続けていることもあれば、一日の間で休眠と覚醒を数回繰り返したこともある。数日間全く起きてこないケースもあった。力を使ったことによる反動というわけでもなく本当にランダム。

日にち感覚が無くなる、と前に優奈が言っていた。僕と一緒にいることがこの世界との唯一の接点で、それが断たれてしまったらこの世界で本当に孤独になってしまう、と声を振り絞っていた。

……だけど僕は焦らせるようなことは言わない。YOUも言わなかった。以前までのYOUだったら絶対、ならばレクイエムを受け入れるように、と言っていただろう。しかし今では方針を変え、彼も彼女が自ら受け入れられるように変わってくれるのを僕と一緒に待たせてくれる。

一人一人が少しずつ変わって、三人が同じ方を見るようになって、そしてそれぞれが別々にその方に向かって歩き始める日がやってくる。

るまで、僕達はこうして関わりあっていく。

昔ならこんなこと煩わしくてごめんだ、と思っていた。そんな僕がこんな風に思えるようになるだなんて、当時の僕が見たら絶句するに違いない。とても信じられないだろう。でも人間は変わっていく。自分自身がこの変化に戸惑いながらもひとつひとつ乗り越えて生きていく。それが僕のできる事なんだろう。

休眠サイクルに干渉できないが、長い事四六時中一緒に居たためか、どの水の中に優奈が居るのか何となくの雰囲気でわかるようになった。さすがに味覚を試したことは無いが、見た目も、振った時の音も、ボトルを持った時の重さや手触り、冷感も、水そのものの匂いも、どれも正直差がわからない。だけど彼女が寝ている水からは何やらぞわぞわと、明らかに他の物とは違う気配を感じる。まさに靈感と言ったべき感覚だと思う。決して良い物とは言えない感覚だが、この感覚があるということは優奈が近くに居ると言う事。いや、僕が彼女の傍に居ると言う事。

「お前は世界から拒絶された優奈をこれ以上歪ませないための楔だ」

あの屋敷から帰ってきてからYOUに言われた。格下の相手、しかも幼子の姿であった同類に対してまで無情の攻撃を加えたように、優奈が暴走した時には本当に手が付けられなくなるだろう現実には僕は身震いを覚えた。

そうさせないための僕の役目は、彼女が導かれる意志を固めるまで世界と彼女を結び続け、彼女を守ること。

……そう。今度こそ、見捨てはしない。

……

…

相変わらず目的地があるわけでもないまま電車で揺られ、いつも目にしない景色が流れて行くのを楽しむ。気ままに時間を過ごす小旅行。三須浪方面だったらこんな風に座ってられないが、郊外であればだいたい混み合う事もない。席は十分に余裕がある。

がたんがたん、がたんがたんとはぼ一定のリズムを刻むレールと車輪の振動にまどろみも覚えてくる中で、ふいと優奈の方を見る。僕の右隣の空席に優奈がちょこんと座っている。優奈自身は他の女の子達と比べて背が高いわけでもなく、どっちかと言うと小柄。ブレイズになってもなお、駅のホームで最初に見かけた第一印象と変わらず美少女と言った容姿だが、その表情は冷たいと言うよりも、無感情に硬いまま。あの遺影に残された笑顔が脳裏によぎった僕は、胸を締め付けられるような感じを覚えた。

「……まぶしい」

僕が見ていることに気付いた優奈が、僕の方を見て呟く。やつぱり一般的な幽霊のイメージと同じで、強い光が苦手なのだろうか。ロングシートタイプの車両の向かい座席に座っている人も居ないのでブラインドを下ろそうか、と優奈に提案したが首を横に振った。光が苦手とかそういう事ではないらしい。

「この世の中はこんなに明るくてきれいで、楽しい事があふれているはずなのに、見ていると何だかざわざわするんです。……私、や

っぱり夜の方がいい。こんな風に思ったこと、無かったのに」

放っておいたら彼女は間違はなく世界を呪う。それはたくさんの人に悲劇をもたらすだけでなく、彼女自身を更なる地獄へと送り込むことになるだろう。「ブレイズ（地獄）」とはよく言ったものだ。彼女を閉じ込めようと閉まっていく地獄の門の楔になれるのは、優奈を知ることができる僕しかない。

「……いつか、前みたいに明るい世界を楽しめる時が来るよ。あわてなくていい。その気持ちを思い出せるまで僕と一緒に居たらいいいさ。僕は必ず傍にいる。不安になったら、泣いてくれたって良い」

驚いた顔をした優奈がこつちを見る。続いて二度ほど瞬きをし、小さく開いた口をまた閉じて会釈をした。……笑った顔が見たかったな。まだ時間がかかりそうだ。

彼女から感情が無くなったわけではない。彼女が見たこの世の絶望が、彼女のプラスの感情に重い重い蓋をしてしまっただけ。この蓋が開いた時、きっと彼女の世界も変わる。

僕は僕がした罪を拭うためだけじゃなく、彼女が世界を許すための力になりたい。それを少しずつ感じてもらって、凍てついた優奈の心が溶けてくれますように、と密かに祈る。

かたんかたん、と規則正しく小気味よい振動に身を任せ、二人並んで窓の外の明るい景色を見る。

世界は、冷たいだけじゃない。

それを思い出してくれる日は、きっと遠くない。

「孤独」

電車に揺られてしばらく経った。周りの景色に自然が目立ち始めた駅で下車し、清算して外に出た。優奈はふわりと羽衣を漂わせて僕の左後方に憑いてきている。歩くのではなく、ほんの数センチ浮遊して僕の後を穏やかな速度でついてくる。

日の光はもう強すぎることは無く、風が吹くと少し肌寒さを感じるようになってきた。そんなに遠くない山は赤や黄色の葉をつけた木々の春とは違う華やかさに彩られ、風に合わせて道端の草が奏でる軽く囁くかのような旋律を伴奏に、街路樹からの落葉が僕の目の前でワルツを踊る。

その姿に、思わず笑みが漏れてしまう。不思議そうに優奈が尋ねてきたので、感じたままに答えると彼女は何かに気付いたような顔を見せた直後に少し俯うつむいてしまった。

「私、前までだったら裕也さんと同じように感じてたのに……。今では何も思わなくなってしまった……」

無理もない。彼女は自分からこうなったのではなく、運命を押し付けられた。僕が想像できる苦痛を遥かに超えた痛みを、身にも心にも魂にも、そして彼女の未来にも刻み込まれた。優奈は世界のすべてを呪い尽くして飲み込まんほどの激流を抱えている。……それでも彼女はまだ人を信じたいとどこかで願っている。

「そうかな？ 色々違うことが多すぎて戸惑っているだけじゃないのか？ 無理に今すぐ元通り！ なんて思わなくなっただけいいさ。僕だって、一年前のままだったらこんな風に思うことなんてなかった

と思うしね」

そうだ。僕もたくさんの変化を受けて今ここにいる。だから優奈だつて変われるに決まっている。それを端っはなから諦めるなんて事だけはしたくない。

「だから焦らずいこう？　優奈が良いならそれに任せるから」

歩きながら首だけ振り向いてみると優奈はまだ俯いていた。小さく何か呟いたのだが、小さすぎて聞き取れなかった。僕の言葉は生者の戯言に聞こえたかもしれない。それに対して憎しみを覚えたかもしれない。その逆であればうれしいが、どんな感情を彼女が持ったとしても僕はそれを受け止めよう。

しばらく二人並んで歩く。……ふと気付いた。女の子（と言っても所謂幽霊だけど）とこんな風に二人で歩くことなんて僕の生涯に一度も無かった。身近な所で高志がアキちゃんと一緒に居るところをよく見せつけられていたが、羨ましいと思った事はあまりない。さすがに煩わしいと思う事はないが、僕としては一人で居ることを苦痛に感じないし、積極的にカノジョカノジョと獣けだものの目をしてコンパに出向く男達の心境が正直わからない。

はつきり言つて優奈はかわいい。きつと彼氏が居ただろうし、別れたとしても引く手数多だったに違いない。でも今は優奈とコミュニケーションがとれ、彼女の姿を目にすることがするのは僕だけだ。そう思うと若干優越感が湧かなくもない。

しかしそんな浮ついた気持ちになる事なんて、これから先もないだろう。彼女は僕の罪のためにこうなった。優奈を閉ざされた輪か

ら解き放つ事ができて初めて僕の本当の人生が再び始まる。

優奈が眠くなることもなく長閑に時間が過ぎていく。陽が高く上がり、そろそろ小腹が減ってきた。軽く何か食べようと思い、目についた喫茶店の扉を押しあけると耳触り良くドアベルが鳴り響く。時間帯が昼時だからだろう。結構繁盛しているようで、思ったよりも人が入っていた。入店した僕と目が合った店員さんが小さく会釈をし、目配せで少しそこで待っていてくれ、と伝えてくる。できるだけ早く注文を通したところで僕の方へと来てくれた。些細な事なのだろうけれど、お客さんを大切にしよう、と言うこの姿勢の一つが気持ちいい。だが、次の瞬間、

「いらつしやいませ。おひとり様ですね？」

頭を殴りつけられたような気がした。

……まただ。自分につかりする。結局僕は無神経で、知らぬうちに人を傷つけて回る。

僕の傍、すぐそこには優奈がいる。だけどこの世界の中で孤独に取り残された優奈の事に気付けるのは僕しかない。存在を無視される事の辛さを考えたら、僕は決してこう言う店に入るべきではなかった。出ようかと思って左側に振り向くと、僕よりも頭一つ低いきれいな茶色の髪をした女の子が首を横に振る。……本当に何から何まで見透かされている。店員さんの方に向き直って、席は空いているか、とだけ聞いた。店員さんはぐると店内を観察し、窓側の二人掛けのテーブル席に案内してくれた。一つ一つの笑顔が心地よい。そう、彼には悪意は一切ない。これは僕が気を付ければ良いだけの事なのだ。

通された席についてカバーを付けたままのペットボトルを腰から外して対面の席の前に置き、出してくれたお冷に口にして、ふうと一つため息をつく。

「……一人じゃないんだけどね」

ぼつりと呟いた僕の声に、空中に座って彼女の寢床にそっと手を添えていた優奈が顔を上げた。

「呪縛」

優奈と知らない町の駅に降りて数時間。秋の夕暮が訪れるのは早く、陽も大分傾いてきている。

「ふふっ、そうね。裕也さんの言うことも分かるわ」

「……それじゃあ、考え直して」

「それは無いわ。飽く迄あなたが言ってることも世界の真の一つ。私はそのことも分かっているけれど、私が行き着いたのはもう一つの真」

また別の喫茶店で、二人掛けのテーブルに着いて話をし始めてしばらく経ったが、このままだと水掛け論が続くだけだ。結局僕の心は届かないのか？ 人の意思はここまで強くなると動かなくなってしまふものなのか。

「僕は、世界は明るく温かくて、冷たいだけじゃないってやっと知ることができた。斜に構えていたら見えなかったことがようやく見えてきた。この世界には知らなかった真実がいくらでもあって、あの時は正しいと信じて疑わなかったことが別の時になったら正しくなかったと言うことが数え切れない位あるということも。それは事故に遭って自身の死に触れ、世界が一新されたからやっと自分の中に落ちてきた感覚で……」

僕の考えがすべて正しいなんて在り得はしない。だけどこれだけは間違っていると言わせたくない。別の真実にたどり着けたはずの扉に鍵をかけ閉じ籠って諦めてしまっただけじゃないのか。

「だから、鎖くさりさないでください。自分からその輪に囚とらわれないでください。出たくなった時にはもう遅いんです」
「ありがとう。でもね、もうダメなのよ。私は沢山たくさんのものを失い過ぎた。新しく大切にしたいものを得る事すら怖い……。いつか失うから。それなら私は鎖された世界に居た方が心安らかになれるし、それを望むわ」

言葉が紡げない。下唇を噛み締め、テーブルに置かれた二つのコップを見るしかなかった。おそらく僕が次に言おうとしていた言葉を彼女はすでにどこかで聞いているだろう。それがその時に届いていれば、この結論に達し「律」が決定することはなかった。僕の言葉では「律」を破れないのか？

こんなに固めなくなつて良いじゃないか…… もっと揺らいでいたって良いじゃないか……

クロスだけが不自然に映っていた美容院の鏡の正面に座っていた彼女は、店員さんと話している時も、店から出てからも笑顔で、こんな決意をしているとは全く感じなかった。

「どうして分かったの？ これから私が向かうところが」

以前踏切に飛び込んだ人とは正反対に晴れ晴れと、明るく、さも当然と言わんばかりに答えてくれた。僕の言葉を聞いてくれると言うのならもしかして、と思ったがそんなに甘いものではない。

「失ったら、また得たらいい。そう言って励ましてくれる人もいたわ。……貴方も、きっとそう言ってくれるでしょうね。でもね、それが届かない人もいるの。みんながみんな強ければ、人間はこんな思考のメビウスリングに閉じ込められることは無い。いつか破つて、無限のループから出てこれる強い人は幸せなの。出てこれない人もたくさんいること、それは揺るぎない事実なのね」

「それでも…… 必要としてくれる誰かがどこかにいるはずで」
「もういない」

僕の言葉を強制的に打ち切った正面の中年女性の目は、喉から出てくるはずの僕から声を奪った。

「言っただはずよ？ 失い過ぎて得る事すら怖いって。分からないかしら。貴方は何か強い思いを目に宿してるから、見えなくなってることもあると思うわ。強い思いの炎が作り出す陽炎の中に溶けてしまう程弱くて微かな物事が世界にはごまんとあるの」

出てくるはずの言葉を奪われた口は固く閉ざされ、僕は奥歯をぎりりと噛み締めるしかなかった。

「私にとって救いは諦め。それを否定されることは今までの苦しみにまた自分を投げ、そして今までよりもさらに酷く残酷な現実と戦わなくてはいけない覚悟を強いさせられることになる。……もう戦いたくないの。」

今までずっと戦って得た物は何？ この疲れ切った心？ なら、私はそんな報酬はいらないわ。代償を求めない生き方をすれば楽になる、と言ってくださった先生もみえた。でもね、私は戦い疲れた心をもう休ませてあげたいの。これだけ戦ってきた。戦えた。自身自身に愛を囁いて慰めてあげたいの。よく頑張った、もうこれ以上

頑張らなくてもいいよ、って」

「……」

「今日初めて会った人に八つ当たりみたいにこんなことを言うなんて酷い話ね、貴方の心に深い傷をつけることになることをわかってるって言うのにね。……いえ、もう未練なんてないと思ってるのにやっぱり誰かに覚えていてほしいと思ってるからこうしてお話してるんだわ。本当に酷い人間……」

僅かに生まれた無言の中に僕は言葉を発しようとした。だがもう僕自身もこの決意を止められないと理解してしまって、言い出せない。

「何？ おしまいまで言ってもらえない？ 気にせず言っしてほしいわ」

目を閉じて鼻から大きく息を吸う。吐くまでの間に頭を整理し、目を開ける。気持ちの整理もつけたつもりだ。だけど正面の女性の目を見ることは出来なかった。

「……僕には、貴女の「律」を変えることはできません。でも、苦しんで苦しんで、世界を呪って逝くその想いだけは変えたい……。どうしてなんですか？ 望まずにその環に無理やり閉じ込められた人もいます。決めなくなっただけいいじゃないですか、どうして……」

「……最期くらい我が儘を通したいから、ね。それが私の最期の希望の光だから。苦しかったけど自分の意思で生きてきた自分へのご褒美。自分で終わらせてあげる、と言うね」

……思い上がっていた。僕にはこの人の人生を抱え込める自信はない。そしてその覚悟もない。

「ありがとう、裕也さん。声をかけてくれて嬉しかったわ。何も言わずに逝くつもりだったけれど、最期におしゃべりできたのが貴方で良かった。貴方は本当に優しい人。貴方と一緒にいる人は本当に幸せね。淵の底に沈むことを望む前の私だったら、きっと貴方に救われたでしょう。だけど今はもう違う。許して、私の最期の我が儘を」

テーブルに置かれた伝票を手にも、向かいの席の女性が立つ。

「私の名前は、教えてあげない。それじゃあね」

ここでもドアベルが心地よく響き、外の空気が店内に入ってくる。同時に僕の胸の中にも秋風が吹き込み心に冷たさを覚えた。

事の始終を優奈は眠ることなくずっと傍で見ている。優奈の目はやはり無感情で、僕を慰めるでもなく責めるでもなくただ見つめていた。その無感情な視線がむしろ今の僕にとって救いだ。

……YOUが前から言っていた。「律」は変えられないと。こう言うことなんだ。単に決められた運命と言うだけでなく、魂が救いを拒否する。さらに単独で「律」を変えと言うことは、最低でも自分の人生のすべてを捨てる覚悟が必要なんだ。僕には……

……。

……わかった。もういい。様々な因子の影響を受けて悲しい運命の「律」がどこかで破綻することを期待することは止めないが、僕はもう一度基本に立ち返ろう。僕は僕の目の前にある救いすら拒む存在を導く。この手の中に力を持つ僕にしかできないことは鎖を断ち

切り、送り出すこと。

「YOU、探してくれ。僕の手が届かなくなる前に」

あの人^が世界を呪^う存在になる前に、鎖を断つ。たとえその鎖を彼女^が望んだとしても。

……いや、そんな偽りの幸福なんて許さない。

僕の隣に居る人を見ろ。

絡め捕^られることに、幸せなんてない。

「紫煙」

「裕也か？ お前どうよ」

「あ？ どうよ、って……」

「ほら、仕事」

「ん、順調」

「うお、決まった？！ 世の中二トやる気だった奴でも採つてくれるところあったんだな！ どんだけ人手が足りてないんだ、そこ！」

違う違う違う！ 思わず表に出てはいけない仕事の方の会話をしてしまった。っていうかさり気なく失礼極まりないことを言いやる。

就職活動の帰り道。ケータイに着信履歴があり、誰かと思えば久しぶりに電話してきた悪友の高志。着信履歴からそのまま発信。こっちも久しぶりに電話をかけた。

「や、職探しが順調というワケで……」

「あー、だろうな。そりゃそうだな」

やかましい！ 人が憂鬱になっている事にさっさと納得してるんじゃない！ 就職してから五月病になるがいい。念願の自動車系の会社に就職が決まり、心に余裕を持っている羨ましい高志と違って、どこからも一向に色よい返事がもらえないまま今に至る僕は、最近では遠方にある会社にも行っている。が、今日はいつもの慣れた街だ。ケータイで話しながら駅に向かって歩いている。ああ、もう半年ないんだよ卒業まで……

「そーいやお前まだ治療費の残り半分返してくれてねーだろ。もう三ヶ月になるぞ?」

「れ? そーだっけ……? あっ」

「あつ、じゃねーよ!」

服は優奈があのかから移動してしまっていたことを確認した後ですぐに返しに行ったが、その時手持ちが足りていなくてとりあえず半分だけの返済にさせてもらっていた。アキちゃんのトラブルの時も緊急事態だったし、事後もうっかり忘れていて返していない。というか、それだけ高志と顔を合わせていなかったと言う事か。お互い同じ大学に行っているのだから会っていてもよさそうなのだが。学部が違うから選択する授業ももう被らないし、ゼミ室も離れているから仕方が無いのかもしれない。金が無い金が無いと年中ぼやいていたはずなのに今日まで何も言っていないとは。意外とやりくり上手だ。初めて知った。

「あ! そうだ、心靈写真の件! あれで貸し借りなしってのはどうだ?!」

「バカヤロ。感謝はしてるが、別の話だ。金は金だ!」

「でもさー、今まとまって返せるほど残ってないんよ。今しばらくの返済の滞りを認めていただくか、債権放棄を」

「っざけんな! そんなら金を作れよ! お前、ムダに古いマンガとかゲームとかかなり持つてるじゃんか。もうやらないのいくつか売って耳揃えて用意しろよ」

「そ、そんな! 臓器売買はお断りだ!」

「おいおい、何だよその一心同体感。それじゃあ何かで一発当ててこいつて」

「……お前、僕のクジ運の悪さ忘れたのか？」

「ああ、まあなあ。これからはハズレと思った方引けよ。そんなら当たりだわ。サッカーくじとか負けると思った方選べばウハウハじやね？」

「結構です。いざと言う時のために運をとってるんだよ！」

「ははっ、お前今その運がないんなら生涯ないわ」

くそっ、その通りだよ。相変わらず悪意があるのかないのか分からない言い合いが続く。だけどこれも高校の頃からずっとそうで、お互いが険悪になることなんてなかった。ただでさえ少ない僕の友達の中でも本当に気の置けない相手。たまに憎らしく思うこともあるけれど。

そう言えばこの街で優奈のいたビルに行く前に買った宝くじは一枚たりとも当たらなかった。でも、優奈を見つけてくることができただから、ある意味大当たりと言えるかもしれない。ここで運を使い果たしたか……？

「裕也…… 裕也……」

「ん？ 何」

「お？ どうした、誰かと一緒？」

「いやいや。ちょっとね」

思わず返事してしまった。僕に話しかけてきたのはYOU。今話しかけてくるってことは……

「ホントごめんな。ちゃんと今度返すよ。一つ行くところが残ってるから。もう切るぞ？」

「おー、がんばれよ。またな」

久しぶりだったから積もる話もお互いあっただろうが仕方ない。電話を切りシヨルダーバックに入れたところでYOUが行くぞ、と僕を急かす。やっぱり思った通り。この街でシェイドの発生を感じたらしい。よかった、終わった後で。不謹慎だがそう思わざるを得ない。そんなに遠くないらしく早足でその方面に向かった。

……

…

そこはやや大きめで交通量も少ない交差点。指定方向外進入禁止の道路標識が立っていて直進か右折しかできないことになっている。こんなところでシェイドが出るんだろうか。でも最近、この街で車の事故が多発し死亡事故も起きているというニュースを見た。シェイドが存在したのならばその影響と考えられなくもないが発生はついさっきのはずだ。偶然だろう。

もうひとつ気になることがある。こんな人目につくところでひと悶着起こしても大丈夫だろうか。一応一つ確信に近い感覚はあるのだが……。レクイエムを引き抜き近づいていく。

突如さっきまで聞こえていたエンジン音が聞こえなくなる。あたりを見渡せば車という車、歩行者という歩行者が静止してしまっている。

やっぱり想像していたとおりだ。シェイドが作り出した領域に死神が入ると、死神がそこを離れるまですべてが止まってしまふ。周囲から聞こえる音が無くなるのはこのためだ。だけど今回はこのシ

エイドの領域に入る直前に違和感があった。

「おかしい、気をつける。今までと違う。これは……？」

YOUが言い終わる前に霧が出てきた。もわもわと周囲を包み景色が分からなくなる。ほんの数メートルの視界もない状態だ。何だか眩暈めまいもしてきた。そんな状態の僕の目の前の霧の中に突然影が現れる。驚いて思わずレクイエムを左から右に振る。霧を裂いたが手ごたえは何も無い。また影がふつと現れた。現れたかと思った次の瞬間には消えた。消えたと思ったたら違うところに現れた。

ふつつつと現れて、ふつつつと消える。くらくらする頭では捉えきれない。ぼんやりして意識が薄らいで行くのを感じる。

「しつかりしてください！」

声がしたかと思うと強い風が起こり、僕の周囲の霧が晴れた。思考力を奪われていた頭にかかる靄もやも同時に澄み渡っていく。見渡すと目を覚ました優奈が浮き、彼女の羽衣を手繰っている。僕とYOU、シェイド以外はこの空間内で動ける者は無い。つまり優奈が振った羽衣が霧を押し返したと言う事になる。

我が目を疑った。優奈が、僕をフォローした。

短く礼を述べ再びレクイエムを構えるが、霧は奥の方から際限なく押し寄せてくる。優奈が押し返してくれるがきりが無い。しかもこの霧には催眠作用がある。幸い現状のところ大きな中毒症状のような事は無く、身体はすぐにでも動ける。すぐにでも発生源と考えられる本体を探し当てて導かないといけない。消耗戦では僕に勝ち目はない。しかし問題の霧はかなり濃く、霧の中に入っているものは全然見えない。

「シェイドの本体は目覚めぬ限り必ず領域の中央にいる。そこを指せ。だがこの者はすでにそうなってから相当時間が経っている。領域もかなり広い。これだけ入り組んだ街中では困難かも知れぬ」

YOUの言葉に今度は耳を疑った。時間が経っている？ そんなばかな。シェイドの領域をかなり広域で感知しているYOUが見落としたというのか？ 優奈のように領域を展開していなければ察知できないそうだが、初めて会ったシェイドの男の子の時はまだ弱かったと言うのに発生同時に感知した。YOUが気付いてから今ここに来るまでの道のりよりも、僕の家からあの子の家に行くまでの距離の方がずっと遠いのに。時間が経って強力になっているシェイドを、何度もこの街に来ているのに見逃していたはずが無い。まさか……。脳裏を掠める嫌な想像とともに優奈の方をちらりと見た。

「確率は低いだろうが、ブレイズの可能性もある」

一番あつてほしくない可能性をYOUはさらりと告げた。自然現象を己の武器とする祟り神。優奈と戦った時の記憶が瞬時に思い起こされ、背中にぞくりと冷たい物が走った。目覚めて間もない優奈があれだけの凶暴性を持っていたのだから、時間を経たブレイズであつたらまさに天災とも言える存在に違いない。

「とにかく急げ。向こうもすでに我々の存在を認識した。目覚めるまでに時間はそんなにかからんぞ」

考えたいこと、聞きたいことはたくさんあるが、後回しにしないといけないようだ。

一体この街で何が起きていると言っんだ。

「暴力」

領域の中心か……。

この霧がここの主の力だろう。となればとりあえず霧の濃くなっているところを目指せばいいはずだ。まだ日の光は強く探索には何の不自由も無い。

領域に入っただけにあるこの交差点はあくまで領域の一部で、しかも端の方だ。まだ中心は奥にある。しかもこの道路には脇のビルの間から伸びる小道も入ってくる。ビル群の間に本体がいたら探すのが困難だ。探知能力があるYOUの指示が唯一の手がかり。しかしYOUも方向がわかるだけで、道がどう続いているかはわからない。ゴールの方向だけがわかる迷路の中にいるのと同じだ。指示のあった方向を見失わないように走る。僕の走る速度に合わせて僕の後ろを、羽衣をたなびかせて優奈が飛んで憑いてきて、押し寄せる霧を優奈がすべて押し戻す。

迷いに迷った挙句にたどり着いた、ビルとビルの間の一車線だけの小道の奥。ここからは彼女が押し戻しきれないほどの量の霧が湧いてくる。優奈が振るう羽衣が生み出す風圧で押し返した後も、押し除けられた空気の間隙に吸い寄せられて、この一帯の霧だけが一向に晴れない。

あまりに霧が濃くて中に入るのは危険。深過ぎるこの中で本体を目視で確認することはさらに不可能。まだ目覚めていないことを願ってレクイエムを投げつける。屋敷に居た子ども達の前に戦ったシエイドの時に気づいたのだが、レクイエムには斬る時も投げる時も魂がある程度ホーミングする性質がある。基本的に自分で狙って振っているが、こんな武器、しかも刃が大きく長い物を使った戦闘の

初心者の僕が、初めてシェイドを相手にした時に刃が届き戦えていたのは、この性質があったおかげだ。

だから、僕の手元を離れたとしてもレクイエムはこの霧の発生源に届くはず。たとえこれが見事に命中しなかったとしても、何らかの反応があるはずだ。

飛んで行ったレクイエムも霧の中に入ると見えなくなった。声も上がらなければ光もない。優奈のように防御行動に移ることもない。命中しなかったことは明白だが、僕の期待に反して反応があまりにも乏しい。

「……移動している、すぐに呼べ！」

YOUの声が響く。くそっ、また本体と戦わないといけないのか！ 迷っているうちに覚醒してしまった。霧が濃いところを目指してくることを悟っていたのだろう。これだけの霧を置いて、僕達をあざ笑うかのように立ち去っていた。これは相当に手ごわい。覚醒して即座の攻撃ではなく、僕達を手玉に取り様子を見、攻撃するタイミングを狙っているような知性の持ち主。今回の相手がブレイズであるかもしれないと言う最悪の可能性が高まってきた。今からすでに手が震える感覚がする。……落ち着け。

呼び戻してみるが戻ってこない。このまま待っていることにメリツトは無い。仕方ない、直接行くしかない。優奈ができる限り霧を払ってくれているが、予想されていた通り、薄くなる程度で晴れない。長時間ここに留まればさっきのように毒に冒されてしまう。しかも素手。想像していた一番まずい方向にすべてが流れている。

突入して間もなく霧の中にぼんやりと三日月状の物体が見えてきた。地面に突き刺さるレクイエム。これだけ目立つ色をしていなければ見失っているだろう。柄を持ち引き抜こうと試みるが抵抗が強

く、目を凝らしてみると濃い霧が朱色の刃に不自然に絡みついていた。払っても払っても散らないその霧の綱をレクイエムに押し当てて切断し、その縛を解いて両手に構える。切断作業中に息を止めているのが苦しくなったので、少しだけ吐きだして胸を楽にさせたがもう限界だ。一呼吸だけして再び止めた。息継ぎに制限のあるここで襲われたら一巻の終わりだ。これ以上は諦めて戻らざるを得ない。

息を止めて走るなんて芸当は僕にはできないから、この霧をできるだけ吸わないように呼吸を極力抑えて歩いて移動するのが最良。持っていたハンカチで口元を押さえてみるが一体どれほど効果があるか分からない。息をするのは控えたはずだがこの小道に居た時間が長く、吸った総量は意外と多かったようだ。頭が少しくらくらする。

しかも本体がいたはずの小道から出ても一向に事態は改善しない。ここに来るまでの道の霧は優奈がすべて吹き飛ばしていたのだが、戻ってみると再び一面の霧。目覚めた主に呼応するように深まっている。こんな中でどうしろって言うんだ。

舌を打ち、奥歯を噛み締めたその次の瞬間、僕の顔に何かが巻きつく。本体の攻撃かと焦り、それを引き剥がそうと手をやるが優奈の声が僕を制した。

だんだん頭が覚め、楽になっていく。

顔に触れているところが少しひんやりする。

……優奈の羽衣だ。羽衣の水が霧の成分を吸い取って周りの空気を安全なものにし、供給してくれている。すごい。本当に万能だ。まさか水がここまで多様性に富んでいるとは考えもしなかった。

彼女のおかげで僕は安心して探索ができる。今までこの仕事に協力的ではなかった彼女が僕に手を貸してくれる。優奈が少しだけ心を許してくれた、そう言う事なのだろうか。

「……止まったな。迎え撃つ気だろう。裕也、一つ安心しろ。これはブレイズではない。だが相当に力を蓄えた状態だ。

領域から移動できないヤツにとって俺たちは非常に都合の悪い来客だ。向こうも全力で来る。気を抜くな……」

YOUの一言で空気が変わり、僕の浮かれた心も引き締まる。
少し大きめの交差点に出た時、声がした。

才前ラ…… 何者ダ？

ジャマスル気ナラ死ネヨ……

霧の奥の方に浮かぶ影がある。声もその影の方からしている。……
……本体だ。

「お前か！ ここで事故を起こしてるのは！」

ダツタラ何ダ？

正義ノ味方ゴツコナラ他所デヤレ

殺シ続ケテリヤ イツカ当タルンダヨ…… 止メル気ハ無^ネエ……
アイツラ、絶対殺ス……

ココカラ出ラレネエナラ、当タルマデ殺シ続ケルダケダロガ！

「無関係の人まで手にかける必要なんてない！」

アア？ 知ツタコトカヨ

他ノヤツラモ思イ知レヨ 俺ノ痛ミヲ万分ノ一デモナ……

ヤバい奴だな……。生前からこうなのか、それとも変性したからこうなったかはわからないが、このシェイドは相当にキている。それに僕との会話が成り立つ。あの子達と同様、防衛、闘争本能だけのシェイドになりたての状態とは明らかに異なる。

一気に霧が深まり、うつすらと見えていた本体がまったく見えなくなった。その次の瞬間霧が凝縮したかと思うと突然爆発し、周囲に紫色の霧を撒き散らす。近くに浮いていた優奈の姿すら見えない。水の羽衣のおかげでこれだけの霧の中でも意識を失わなかった。

……。だけど何か変だ。肌が痛い。ちりちりと染みる。

嫌な予感がある。とにかくここを離れなくては。この霧の中に居るのは命取りだ。

ドコ行クキダ？

全力で走り始めた僕の右真横から、呻くようなくぐもった声が響く。頭を掴まれそのまま勢いよくビルの壁に叩きつけられた。腕で反射的に側頭部をガードしたので頭への直撃は避けたが、腕が痺れただけでなく脳震盪のうしんとうも起こし、めまいが激しい。だがレクイエムだ

けは離さない。これを手放したその時は完全に髑り殺される。

頭を掴まれたまま再び振り回され、窓ガラスを突き破ってビルの中に放り込まれた。まだ何かが頭を掴み続けている。眼下にはスーツ姿の会社員と思われる人たちが仕事をしている机が見える。天井に押し付けられているようだ。眼前の光景が静止していたのはわずかな間だった。今度は机が流れていき、再度外に放り出されて再びビルの壁面に押さえつけられた。

激しいめまいのせいでだんだんガードが間に合わなくなっていく。次振り回されたらきつと頭に直撃だ。頭はぐらぐらしていたが腕は何とか動ける。片手でレクイエムを短く持ちなおし横に薙ぐと、手ごたえは無かったが僕を押さえつけていたものが頭から離れた。

どさつと落ちた。ちよつと膝を打った程度。思えば幸運だ。押さえつけられていた場所が2階以上の高さのところだったら自殺行為にだってなっている。よろよろ立ち上がる。だけど腕と足がとても重い。受けたダメージが相当重いようだ。

……いや、違う。それだけではない。焦点が定まりきらない目で見ると、何かが両手足に巻きついている。

霧だ。腕と足の周りだけ霧が一段と濃い。そして、身体他の部分に比べて巻きついているところの痛みが激しい。

……ダメだ。この霧の中はコイツの体内に居るようなものだ。そして霧が晴れることは期待できない。せめて……

俺が近づくノヲ待ッテンダロ？ 甘エヨ、コノママ焼ケ死ニナ……
ヒヤハハハハハハハ！！

諦めかけていた。その時、どがん！とすごい音が響く。直後に何かが噴き出す音が続いた。

そして、雨が降り始めた。

……雨だ。時間が止まってしまっている中、雨が降っている。それに今日、さっきまで晴れていた。

……何だ？

頭に浮かぶのは疑問ばかりだ。そしてその中に見えてきた希望。空気が雨に洗われ、霧が晴れていく。僕の手足に絡みついた塊も溶けていった。

何ダ！？ ナンデ雨が？！

テメエ…… フザケンジャネエ！

慌てた様子のシェイドがはつきりと見えた。姿は僕とほとんど同年代の男。できれば僕は関わりたくない系統の人だ。服はその派手さをわずかにとどめる程度にボロ切れとなり、服の間から見える彼の身体は皮膚もずたずたになって、下の組織がむき出しになっているところが多かった。骨の何本かが身体から飛び出ている。

宙に浮くシェイドの視線の先に、僕も目を遣った。そこには水柱が立ち、それを背にして鎧を身にまとう優奈が居た。水柱の立っている場所の反対側の歩道に、消防で使われるあの赤い消火栓がへし

折れて転がっていた。優奈が大量の水をあたかも雨が降っているかのように領域全体に散らしている。

「殺させない」

たった一言そう言うと、次の瞬間男の背後に居て、羽衣を振り抜いた。相変わらず目で追えるような速度じゃない。完全に仕留めたと思われたがシェイドは彼女の風圧の前に霞かすみのようにかき消されかと思うと、離れたところで再構成された。その瞬間からシェイドも標的を僕から優奈に変えた。再度優奈が羽衣を伸ばして打ち据える。すると自ら身体を分解し直進してきた彼女の武器に絡みつき、そのまま優奈に接近する。取り憑けば彼女の攻撃を無力化できると考えたのだろう。

迫りくる霧に対して優奈が左手を前に出した。手甲の掌から巨大な凹レンズのような盾を作り出し、シェイドを押し返す。そしてそのまま盾を自分の装甲から切り離し、蹴り飛ばして地面に落とした。取りつくのに失敗したシェイドが優奈の盾から離れて地上で再び形を成す。そのタイミングにあわせて空中にいた彼女が両手を前に出す。優奈の両手から何かが放出された。凄まじい速度のそれを避けるのが間に合わなかったシェイドは左肩から削り取られ、そして優奈の掌の延長線上にあるアスファルトも鈍い轟音と共に深くえぐられた。

眼を疑った。アスファルトは欠片も残らず粉碎されている。

放たれたそれは無数の針だった。

水で出来ていて、針の形を保っているのはほんのわずかな時間だった。こんなものを撃ち込まれたらたまったものではない。苦痛の叫び声を上げて優奈を睨む男。その形相はすでに人間とは思えなかった。えぐられた左半身が絶叫とともに霧に包まれ、もとのように

再生した。

再生していく最中にも優奈の攻撃は止まらない。敵意ある眼で睨みつける者に一瞥をくれ、その者に対して指をさす。同時に地表から太い氷柱^{Can}が三本、突然現れシェイドを串刺しにした。その水源はさつき切り離れた彼女の盾。円錐は刺さった後にも径を増し、その体をひきちぎった。苦痛の響きが止むことは無い。予測がつかないうえに情け容赦のない優奈の攻撃は、ただ見ているだけの僕の背筋も凍りつかせた。

引き千切られた男の体が煙となって、逃げるように移動する。それを捕えるかのように優奈の雨に濡れた地面からいくつも檻が現れたが、捕えることは叶わず、煙は最終的に檻の届かない空中に逃れてそこで本体の形を成した。

大量の水源があればまさに無敵。この降り注ぐ雨も彼女の手足。優奈がブレイズの脅威をまざまざと見せつける。

クソ…… コノ、メスガキガ！

優奈に手も足も出なくてキれたシェイドが叫び声を上げた。

肩、いや背中に手を当てたかと思うと、自分の皮を勢いよく剥ぎ取る。男が背中から二つに裂け、裂け目から霧があふれ出し形を成し始めた。

それは巨大な猿に似ていた。体中を毛の代わりに、優奈が降らせている雨にも溶けないほどの濃い霧で覆っている。巨大なくせに素早く、ビルの壁を蹴って飛ぶように移動する。移動した軌跡に霧を残している。本体から離れた霧は雨に溶けていくが、しばらくは宙を漂っているほどに濃い。

巨大な獣を前にしても優奈は自分の方が強いことをはつきりとわかっていようで、まったくひるむことが無かった。素早くなったがむしる巨大になった的に向かって針を撃ち、羽衣で強打する。彼女の攻撃は確実に命中している。しかし相手も的になるためにむやみに巨大になったわけではなく、頑丈な表皮と体力を持ち合わせ一向に倒れる様子が無い。何より回復力が異常に高かった。優奈によって破壊されるとそこからすぐに霧が湧き出し治ってしまう。攻撃力も跳ね上がっている。丸太ほどもあるつかという腕で殴りつけたコンクリート壁には幾筋ものひびが入り、その度に轟音が響く。だが彼女を捉えるには速度がまるで足らなかった。

なんだこれは。もう漫画の世界の戦いだ。

「これが人に非^{あら}ざる者の戦いだ」

これが本来、YOUがいた世界。レクイエムが完全なもので死神の力を失っていないければ、人の身でありながら彼らを抑え、導いていく。

改めてぞつとする。僕がどうこうできる次元ではない。太刀打ちできるはずが無い。

追い詰められているのは明らかにシェイドの方だった。しかし決着がつく様子は無い。

「わかるか？ 終わらせることが出来るのは、お前だけだ」

何を血迷ったことを。あんな嵐の中に飛び込んで帰ってこられる

人間なんているものか。

はつきり言う。僕は怖い。もう二度と見捨てないと決意した。だがもし戦っているのが優奈でないのなら、もうこの場に居ないだろう。

ここにあるのは決意が揺らぐほどの死の予感。

それでも今ここから逃げない理由は、彼女が戦っているからだ。これ以上あの子を失望させるわけにはいかない。たったそれだけの理由。死神の役目だとか重責だとか、もっとも重要なことは理解しているが今はそんなことでここに居ない。

チツ ソレジャア、アノ兄ちゃんカラ始末シテヤルゼ！

勝てそうも無い優奈と戦っていることにイライラしたのだろう。ずっと弱い僕を殺して鬱憤^{うつぶん}を晴らすつもりか。口から一気に霧を吐き出す。優奈に対する目くらましのつもりだろう。そして遠巻きに見ているしかなかった僕の方に一直線に突っ込んできた。まだふらつきが残るが僕も身構える。

「……バカでしょ？」

僕の前にはもう優奈がいて、先端を刃のように尖らせた羽衣で獣の頭から尻までを貫き、上に振り上げた。

目を丸くした優奈が後ろを見る。切り裂いたはずの獣は濃い霧に変わった。

馬鹿ハテメエナンドヨ、姉ちゃんヨオ！

勝ち誇ったような声が背後からする。そこにはすでに巨大な右腕を振りかぶり、殴りつける寸前のシェイドが居た。吐き出した霧の方が本体。僕も優奈も完全に騙された。

僕が振り向くのに少し遅れて優奈が僕の前に移動した。思わず僕は優奈をレクイエムの柄で押し払っていた。僕の行動を予想もしなかった彼女は簡単に突き飛ばされ、僕から離れた。

もし逆の立場で優奈がこうしたのなら、たとえこの絶好のタイミングの攻撃といえども避けられよう。だけど僕には無理だ。あの豪腕に比べたら小枝みたいなこのレクイエムで受け止められると思えない。よしんばレクイエム自体が無傷でも、押さえている僕の身体は粉々だ。

破れかぶれになるしかない。とりあえず向こうが全力で殴ってくるのなら、僕も全力で打ち返してやる！

身体を捻り、思いつき振りぬいた。

……

…

少し時間があつて、恐ろしくなるほどの大絶叫が響き渡った。

…痛くない。吹き飛ばされた感覚も無い。無事だ。生きている。

顔を上げると、右腕と胸から上が無くなった巨大なシェイドの本体がいた。無くなった胸から上は僕の視線の左側にずれ落ちていた。残った体積は多かったが、胸から下は優奈の雨に少しずつ溶けていった。

啞然としたまま、突き飛ばしてしまった優奈の方を見る。彼女も目を見開いて、僕がした事を見ていた。

そして僕を、怯えた目で見た。

「仮初の風」

冷たい雨に打たれて目の前の霧の塊が少しずつ溶けていく。
この場に渦巻いていた暴力と狂気、そしてそれを捻じ伏せるほどのさらなる暴力が生み出した嵐は嘘のように過ぎ去り、風の時が流れていた。

僕は今、何をしたんだ？

ただ単純にレクイエムを振り抜いた。それだけのはずだ。

レクイエムの柄で反射的に押し倒してしまった優奈はまだ地面に両手を付き、座り込んだ状態で僕を見ていた。彼女の方に一歩近づくとびくつと身体を強張らせ、倒れこんだまま後ずさる。力の塊とも言える彼女の怯えた目、それが今の異常な状況を何よりも如実に物語る。

何だ？ 何が起きた？

僕の疑問が大きくなるのと反比例するように、響き渡っていた絶叫がだんだん掠れていく。それと共に一つの事に気が付いた。シェイドの様子がおかしい。さっきまで優奈によって破壊された部分は瞬時に回復していた。だが今僕がつけた傷はまったく回復する様子が無い。

終わらせることが出来るのは、お前だけだ

お前だけ？ この場で動けるのはシェイドを除けばレクイエムを持つ僕だけだ。今この状況はYOUの言葉通りであるというのなら僕が作り出したと言うことになる。一体何があった？ 色々考えた

いことはある。だけど今現在体に受けているダメージなどが明確な思考を奪い、まとまらない。訳が分からず呆然としていた僕も、今この場で自分がやらなくてはいけないことを思い出した。

ゆっくり歩いて近づく僕を、上半身だけになった巨大なシェイドが悔しそうな恨めしそうな目で見る。僕が十分近づくと、目つきが変わった。きつとさっきの僕も同じ目をしていた。部分的に無くなった右腕を振り上げ、そして振り下ろす。

僕の背後で、どおん！ と大きな音が立った。動きがのろい。それにリーチが長大すぎる。ここまで接近した僕に当てようと思っただけ自分自身を打つくらいでなければならぬ。当たるわけが無い。今の一発で力を振り絞りきったようでシェイドはもう攻撃に転じない。レクイエムを頭上でくると振り回し、上段に構えなおして振り下ろした。

朱色の刃が右肩から心臓のある位置に向かって深々と突き刺さるとまばゆい光が放たれた。その光が失われていくにつれて、上半身だけの獣の姿からもとの人間の姿に、そして剥き出しの組織が皮膚で覆われ、殺意だらけの表情が和らいでいく。彼は自分に何が起きているのかわからず、呆けたような感じだった。

「止める！ まだ殺^やつてねえんだ！」

突然声を上げた。自分に何が起きようとしているのか、感づいたらしい。っていうか、もともとそういう性格だったのか、やっぱり彼の望みを聞くことはできない。そもそもどうやったらレクイエムのこの作用を中断することができるのかわからない。

……できないんじゃないかな。諦めようよ。

「ちくしょう…… ちくしょ」

無念を言い残し、レクイエムに吸い込まれた。予想どおり、万人に望まれてないんだな。だけど構うものか。こんな間違った希望に一時的に身を委ねたところで、いつかはその選択に苦しむことになるんだ。

その事に向こうで気が付いてくれたら、それで良い。

……

…

作業終了。扉が姿を消すのとはほぼ同時に彼が展開していた領域が消失し、時間の流れが戻る。

がしゃん、がしゃん、ききーっ！

きやー！ ぎやっ！ うわー！

誰か、救急車！ 救急車！

……忘れてた。ここ、街中だ。時間が止まっていたから実感がなかった。あんな巨大なモンスターが跳ね回り、優奈が力を振るったなら巻き添えが大量に出て当然だ。とんでもない事件を引き起こしている。冷や汗が噴き出てきた。めまいもする。

自分も壁に叩きつけられたり、周りの人たちと同様皮膚をただれさせる毒霧の中にいたりしたのだからダメージが大きい。体力の消耗が半端ではない。ビルの壁にもたれかかって座り込んだ。しかし座った姿勢を保つこともできず、そのまま横になってしまった。意

識を失うことは無かったが、そのまま救助を待つ情けない姿を晒している。

肌がとにかく熱い。あの毒の霧が確実に身体を蝕んでいる。呼吸も荒くなる。そんな僕に鎧を脱いだ優奈が隣にしゃがみ込んできた。僕の焼けるように熱い身体に羽衣を差し伸べ、包み、冷やしてくれた。すごく楽になる。

僕がシェイドを斬り裂いた時、確実に僕のことを恐れていた。だ
というのに……

「ごめん」

彼女は一瞬きよとした顔をしたが、目を伏せ、首を横に振った。

……

…

救急車が何台も何台も来た。僕は重傷者として結構早くに病院に連れて行かれた。裂けたスーツ姿で、戦っている間もずっと持っていたショルダーバックも傷つきまくり。他の人たちと見比べても一線を画して被害者度が高い。早いとこ新調しないと……。またチャンスが逃げていく。もういつその事、これで食べていける方法があ

ればなあ。

今回は以前入院していたところとは違う病院だ。ベッドに寝かされ、点滴をぶら下げられた。することもできることも、特に無い。時間だけはたくさんあった。

だから、天井を見ながら考えていた。

今日はいつもと勝手が違った。自分の力の使い方を理解し、自我を持つに至った強力なシェイドをYOUが見落としていた。

そしてその領域に入る時に感じた違和感。いつもなら足を踏み入れた時に周囲の音がふっと消え、そこに入ったことを感じる。だが今日は、音が聞こえなくなる前に何かが有った。

……

そう、何か一枚、領域の表面を覆った膜があるかのようなだった。

僕達に何者だ、と聞いたあのシェイドは死神という存在を知らなかったはずだ。となるとその膜はYOUのようにシェイドを感知できる者がいて、あえてあのシェイドの存在を隠すために彼の領域の上に張り巡らした物。そんな感じがする。

一体誰がそんなことをして得になるというのだろう。シェイドを使ってこの周囲に混乱をもたらすことに何の意味があるのだろう。

そして最大の疑問は、死神以外にシェイドの存在を知る者がいるのだろうか、ということ。

発生した時からその場所を離れることのできないシェイド同士の間でコミュニケーションがとられているとは考えにくい。シェイドが自分以外の他のシェイドのことを知っている可能性ですらとても低い。

だが例外がある。ブレイズだ。

もしかしたらある種のブレイズが死神の手から逃れ、同属に手を貸しているのかもしれない。優奈は自分の領域をあえて展開しないということができる。そのため彼女が目覚めていても周囲の時間は止まらないし、その状態であればYOUの探查能力にかからない。

それに類するような能力を持ち、他のシェイドの領域を覆い隠すことができる者がいることは十分に考えられる。そうすると他にも存在を隠されているシェイドがすでにたくさんいて、僕達に知られないところで被害を出しているかもしれない。

「……その可能性は高い。だが、感じられぬ以上探し出すことができぬ。不可解な事件の起きている場に赴き、偶然その領域に踏み込まない限りは」

だけど現実問題としてそれは不可能。僕は人間だ。存在を隠されたシェイドを探し、被害を食い止めることも重要だが、それを行うのは寝食を削るだけの自己犠牲に留まらない。人間、生命体である以上、自分をないがしろにしてできることではない。それに時間、移動手段、そして費用。これらの問題も人である以上解決しなくてはいけない。普通に生きていくことだって大変なのだ。

YOUもそのことを十分理解し、こればかりは仕方の無いこと、と珍しく許容してくれた。

定職を探すことだって……。う、思い出したら凹へこんできた。ちくしょう、高志のヤツ、うらやましいなあ。根はマジメだし行動派だったからなあ。ナーバスになっている僕の事なんかお構いなしにYOUは僕の最近の死神の仕事ぶりの評価をしてくる。微妙に辛口。やめてくれ、人生に自信なくなるから。お小言が終わった後はさっ

きの事件と類似しそうなケースの記憶を僕に伝えてきた。

死神が領域に入っても攻撃も何もせず完全に姿を消してしまい発見が困難である者や、人に取り憑きその人ごと領域を移動させてひとところに留まらない者。

そう言った本体が見つかり難いシェイドも有るには有るそうだが、その領域が展開されないために感知されなかったのは優奈が初めてのケースで、移動もせず根付いた通常のシェイドが成熟し強大になるまで気が付かなかったことなどないと言う。

「あるいは…… いや、何でもない。忘れてくれ」

「何だよ、らしくないな」

「確証がない。俺の憶測でお前を惑わすわけにはいかぬ。確信に変わった時、話すことにしよう。話さなければ間違っていた、ということだ」

何だかすつきりしない感じがするが、まあ良いや。疲労しきった身体はこれ以上思考する力をも奪っていく。大体においてYOUの声は僕と同じなので、ぼーとした今の状態だと自分の思考なのか彼の思考なのか分からず頭がどんどん混乱してくるんだ。何も言わなくなったYOUと同様、僕も何も考えないことにした。

今僕の体には濡れた布が巻かれ、これ以上熱くならないように冷やされている。それに加えて救急車が来るよりも前からずっと、そばで手当てしてくれている。

安心して、眠ることにしよう。

「覚悟」

今年は病院のお世話になる機会がとても多い。だけどさすがに入院になるのは事故に遭ってから二度目だ。軽度だが全身の熱傷、中程度の全身打撲、そして原因不明の虚脱と説明を受けた。ちらりと見えた僕のカルテにはたくさん文字が書かれていた。でもあまりに走り書き過ぎて読めない。でもこれくらい僕の卒論を先生が校正して返却してくれた時に見慣れている。いや、そんなことはどうでも良いんだけど。この病院のお世話になるのは初めてだがもし前に入院した病院のカルテと合わせる機会があったとしたら、結構なボリュームになりそうだ。

今回のシェイドによって起きた事件が世間でどのように解釈されているのか、父が持ってきてくれた新聞を見て知った。

「白昼、謎の爆発事件」

「テロの可能性」

「愉快犯？ 動機不明の凶行」

いろいろな憶測が飛び交っている。真実を知るものは僕たち三人しかない。優越感とも違うが、誰にも知られることの無い秘密を持つていることに少しだけ高揚感を覚えたが、そんな時に僕の目に飛び込んできた文字に言葉を失った。

「重傷者7名 軽傷者71名 死者1名の大惨事」

頭の中が白くなる。父が傍にいたので動揺しないように極力平静を装い、もう一度紙面に目を落とす。しかしそれは幻ではない。

「死者1名の大惨事」

あのような暴力が街中でまき散らされ、交通事故だけでも僕の目の前で多数起こった。怪我人が出ているなんて僕が救急車で運ばれる前から分かっている。殺すつもりなんてあるはずがない。だけど現実には不運にも僕の戦いに巻き込まれ、命を落とした人がいる。仕事柄、人が目の前で命を落とすことなんて今までだって何度も見ている。怖いと思ったことは一度や二度ではない。でもそれは、今思えばすべて本当の意味で他人事だった。

僕が人を死に誘った。^{いっせ}

目の前が真っ白になって、治まっていたはずのめまいが一気に戻ってくる。どれくらい時間が経ったのか分からない位、頭の中でぐるぐると同じ思考が繰り返された。優奈の事件とも違う、直接僕が関与したこのケース。僕がもっと上手くやっていれば、もっと強かったら、殺さなかったのか？

「まあ、一応口外無用と言うことになっているが」

父の声が呆然としていた僕の思考を現実に戻した。

「それ、本当は誰も死んじやいないぞ」

自分の声なのか、と言いたくなるようなバカみたいな声が思わず出る。

「相当派手な事件だったみたいけどな、一歩間違えば本当に死者が出そう。担当じゃないから細かく知らんが。ほら、あれだ。良心の呵責を狙ってるんだとさ。自首は期待できんが次の犯行を抑え

るための情報操作だ。

何故この場所を選んだのか、と言う推察は専門家に任せるとして、あんな要所でもない街の中心から離れたところで起きた事件だから明確な意図を持った組織的なテロじゃないだろう。それに明らかに死者が出なかったことから見て、それが目的じゃなかったということだ。個人による犯行だとしたらこれは相当に覚悟を必要とすることだ。

だけどなあ、そんな覚悟を生涯貫き通せる個人なんて一握りどころか、一つまみだつていやしない。ほぼ全員、自分の行いを必ず自分の良心の天秤ばかりに乗せて、善悪の判断をしているもんだ。そのバランスなんて、日によって変わってしまうほど本当に微妙なものだ。事が重大であればあるほどな。だからそこに、『悪』とする要素をそつと加えてやれば大きく傾き、覚悟が崩れる。

今回の場合それが「死」の報道だったわけだ。たとえ嘘でも、そんな言葉ならいいんじゃないか？」

いつも言葉を扱っている、父なりの哲学。こんな風に考えていたんだ。今回のことが無かったら多分一生聞くことなんてなかっただろう。正否は僕には付けられないが感心させられた。

それにしてもけるつとした顔で平然と言っている父の様子から、人死にが無いのは本当なのだろう。心臓に悪いよ、そんな嘘。驚くのは僕だけだよ。でもよかった。僕の不注意で死なせてしまう人が出なくて。

しかし僕を除いて重軽傷者があわせて七十七人いる。このミスはかなり大きい。社会的な責任を問われることはないのが唯一の救いだ、シェイドを放置することがどれだけ危険なことか痛感する。そしてシェイドを利用しようとしている存在は許されてはいけない。

「しかし、どうした？ そんなところに目を留める性格じゃない

だろ、お前。……まさかお前が犯人じゃないだろうな」

いやいやお父さん、あなたの息子がそんなことをできる奴に見えますか？ 失礼な！ この前も僕を、事件に巻き込まれる側じゃなくて事件を起こす側だと言ってみたりと冗談が過ぎますよ！ 声を大にして反論したいところだったが、今の僕では苦虫をかみつぶすような顔をするので精一杯だった。

父が帰って一時間もしない頃、コンコンとノックがあつた。はい、と返事をするところ居たのはよく見知った顔が二つ。

「よう」

「ミッキーやっほい」

お見舞いに来てくれたのか。泣かせてくれるじゃないか。

「では、早速返してもらおう」

泣かせてくれるじゃないか。友達甲斐がなくて本当に涙が出そうだ。

「冗談冗談。お見舞いに来てそりゃないからな。今日は純粹に顔を見に来ただけ」

「そーそ。ミッキーがヒッキーになつたて聞いたから是非笑つとかな思つたんや」

こんな子じゃなかったはずだ。カレシの悪いところが伝染^{うつ}ってしまったのか。悲しい限りです。それに韻を踏むな、韻を。

……わかつてる。親しいからこそこういう冗談がこんな場でも言え

るんだ。

……

「疲れたやろ？ 何か飲むもの買ってくるわ」

談笑をかわしてしばらく時間が経った。確かに疲れた。そこまで酷くないとはいえ、全身に力が入らない。アキちゃんが席を立ち、高志と二人になった。バカ話のネタも尽きて、空白が出来る。何か話題を切り出そうか、と思った時だった。ちよつと良いか、と今までと声の調子の変わった高志が僕に断りを入れてきた。

「思い違いじゃ…… 無いと思う」

突然高志が椅子に座って床に視線を落として口を開いた。

「お前、今日こうなるよりも前から調子おかしかったんじゃないのか？」

「何が？」

トンチンカンな質問で少し戸惑った。こうなる前まで普通に体調は良好です。正直聞かれた直後は高志が何を言っているのかさっぱりわからなかった。だが時間を追うことにその真意に心当たりがありすぎることに気がついた。

「前も言っただけど、俺みえる人だろ？ お前のすぐ傍から何かヤな感じがするんだわ」

「…… おいおい」

「最近入院とか怪我とか多いだろ？ 何か関係があるんじゃないか

つて…… ちよつと心配なんだわ」

「……止めるよ、そう言うの。変に意識しちゃうだろ？ そう言うちよつとした意識の変化が人間の行動とかに影響を及ぼすんだぞ。それに今僕は病人なんだから、ネガティブなこと言うない」

返事をしながら部屋を見渡す。優奈は今寝ているのか、姿は無い。ほつと胸をなでおろした。

……そうだった。高志はみえる人だ。でもどうやら傍に優奈が見えたから僕に警告を発していると言うわけではないらしい。

今僕は誰にも打ち明けることなくこの仕事をしている。高志も自分の事で騒ぎ立てられることを嫌うタイプの人間だ。僕が今していることを見せ、話してもきつと秘密にしてくれる。窓から外を見て、一つ大きく息をつく。

「……もし、もしだぞ」

彼が顔を上げ、僕の方を見る。真剣にこれから僕が話すことを受け止めようとする力のこもった眼をしていた。

「もし憑かれてたら…… 就職できないのはそのせいか！」

「それは無いから」

はつきりと言い切りよった。それも真顔で。せめて笑えよ！

「いやしかし、こうなっている現実とみえるお前の勘を照らし合わせれば、僕が何かに憑かれてこう悪い運氣を……」

「運氣じゃなくて、それまでの積み重ねによる業こころだつて」

「おまたせー、って何で若干険悪になつとるん？」

……これでいい。僕はこのことを現世の誰にも話さない。話したと

ころで何か大きく律が崩れるわけでもないはずだ。だけど僕はこれを僕だけの秘密にしておく。僕の過ち、僕の罪。それを清算しきれぬ日は来ない。その事に精一杯悩んで生きること、それ自体がきつと僕の償い。

僕だって何かを背負って生きていけるはずだ。

潰されそうになっても必死に支えてみせる。

今みたいにほんの少しでも周りのみんなに力を分けてもらえるだけ、僕は幸せなんだ。

僕の天秤を支えてくれる人達の為にも、僕は自分の心に芯を入れて生きていく。

僕はやっと、その事に気が付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1573q/>

YOU -the song for death-

2011年9月19日05時22分発行